

鞠智城とその時代2

—平成14～21年度「館長講座」の記録—



2014

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館

きくちじょう

鞠智城とその時代2

— 平成14～21年度「館長講座」の記録 —

2014年3月

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館

序 文

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、唐・新羅による国土侵攻に備えて西日本各地に築かれた古代山城の一つです。熊本県教育委員会では、昭和42年度から平成22年度まで32次にわたる調査を実施し、多くの成果をあげてきました。平成16年には全国でも有数の重要な遺跡として国の史跡に指定されています。

歴史公園鞠智城・温故創生館「館長講座」は、鞠智城跡、ひいては各地に所在する古代山城の歴史的価値を少しでも多くの方に知っていただくために平成14年度に開講した講座です。この講座では、鞠智城跡の歴史や発掘調査の成果についての発信はもとより、同時代の古代山城をテーマに、考古学、文献史学、歴史地理学、建築史学など様々な分野の研究者や各自治体の担当者に講演をいただきました。平成23年には、その成果の一部をまとめた『鞠智城とその時代』を刊行いたしましたが、今回は、それに引き続くものとして『鞠智城とその時代2』を刊行できることとなりました。

なお、「館長講座」の実施にあたりましては、御講演いただきました諸先生方、並びに各自治体の教育委員会・担当者から多大なる御協力・御支援をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成26年3月20日

熊本県立装飾古墳館長 木崎 康弘

例　　言

- 1 本書は熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」が平成14～21年度にかけて実施した「館長講座」の報告書である。
- 2 講座の実施にあたっては、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」文化財整備交流課が担当した。
- 3 講座は平成14～17年度までを村崎孝宏、平成18～21年度までを矢野裕介が担当した。
- 5 本書に掲載した各講演者の原稿は、各講座のテープ起こし原稿に基づき、各講演者に依頼して新たに執筆していただいた書き下ろし原稿である。
- 6 コーディネーター(大田幸博)との対談に係る内容については、特に重要な認められる箇所を抜粋して掲載した。
- 7 各講座のテープ起こし原稿は、平成22・23年度緊急雇用創出事業で任用した青木優子、木村智恵美、福島秀子、大和智子が行った。
- 8 本書の編集は、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」で行い、能登原孝道が担当した。

目 次

「金田城跡の調査結果について－調査内容と今後の課題－」	1
田中淳也（長崎県対馬市教育委員会）	
（平成 18 年 2 月 12 日開講）	
「大廻小廻山城跡」	15
乗岡 実（岡山市デジタルミュージアム）	
（平成 18 年 3 月 12 日開講）	
「永納山城跡」	27
渡邊芳貴（愛媛県西条市教育委員会）	
（平成 18 年 7 月 9 日開講）	
「播磨城山城跡」	39
義則敏彦（兵庫県たつの市教育委員会）	
（平成 18 年 8 月 6 日開講）	
「鬼ノ城跡」	49
村上幸雄（岡山県総社市埋蔵文化財学習の館館長）	
（平成 18 年 9 月 10 日開講）	
「屋嶋城跡について」	61
山元敏裕（香川県高松市教育委員会）	
（平成 18 年 10 月 8 日開講）	
「雷山神籠石－1996 年における最新踏査結果について」	73
瓜生秀文（福岡県前原市教育委員会）	
（平成 18 年 11 月 12 日開講）	
「高安城の発見と発掘」	87
棚橋利光（元八尾市立歴史民俗資料館館長）	
（平成 18 年 12 月 10 日開講）	
「古代山城・高良山神籠石を考える」	101
小澤太郎（福岡県久留米市役所文化財保護課）	
（平成 19 年 2 月 11 日開講）	

※所属は開講当時のもの

金田城跡の調査結果について

—調査内容と今後の課題—

田中淳也

1.はじめに

平成5年度より金田城跡保存修理事業に伴う範囲確認調査が開始されて今年で13年目となった。整備に伴う発掘調査として開始したが年間を通して1ヶ月程度の調査期間しかなかったため、調査面積も100～200m²程度と少なく、進捗状況は良いとは言えなかつた。それでも毎年新たな知見が得られたのは幸運であった。これまでの大きな成果といえば、平成11年度に調査した二ノ城戸から出土した城門跡と、平成15年度に城の南部で発見された南門である。双方ともほぼ原型を留めた形で姿を現した。特に南門は二ノ城戸などの城戸とは立地・役割が明らかに違う立地にあった。詳細は後述するが、古代山城の城門の形態が発掘調査によって確認されたのは多くはない。二ノ城戸城門、南門とも極めて遺りが良く、門の構造や他の山城と比較する上で、第一級の資料であり、今後の整備が重要となる。

○金田城の所在地 長崎県対馬市美津島町黒瀬及び箕形

指定の経過等

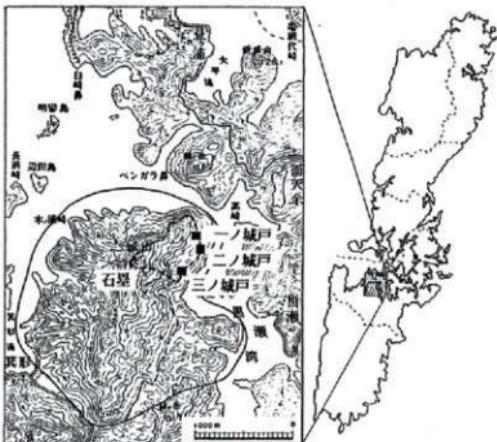
昭和37年11月8日	長崎県指定史跡に『対馬城山』(つしまじょうやま)で指定
昭和55～56年	金田城跡保存管理計画策定会議
昭和57年3月23日	国指定特別史跡に指定(指定面積2,417,701.91m ²)
平成3年	金田城跡整備委員会設置
平成5年	発掘調査開始
平成11年	二ノ城戸城門跡調査
平成15年	南門跡調査

2.地理的・歴史的背景

対馬は南北約82km、東西約18kmと細長く、東側は日本海及び対馬海峡、西側は朝鮮海峡に面し、中央に湾入した浅茅湾から万関瀬戸(明治33年)によって南北に分断される。日本の島の中で佐渡島、奄美大島に次いで3番目に大きく、面積は708.47km²を有する(沖縄・北方領土は除く)。隣国韓国の釜山までは最短距離で49.5kmの位置にあり、隣島玄岐は73kmと古来より大陸との交流が盛んで海路の要衝として役割を果たしてきた。

対馬のほぼ中央部には天然のリアス式海岸が発達した浅茅湾があり、その西方の外浅茅の南辺に金田城がある。金田城は三方を海で囲まれ浅茅湾に突き出た半島(城山:標高276m)の山腹にあり、陸続きは南側だけで、北と西側は急峻な地形で外敵を威圧する。東側は比較的緩やかな地形で城戸などの主要な施設が集中し防備を固めている。山頂からは西方海上を見渡すことができ、空気の澄んだ日には韓国南岸も目視が可能である。唐・新羅に対して海上防衛拠点としての好条件を備えている。

金田城が記載されている最も古い文献は『日本書紀』で、卷二十七の天智6年(667)「是ノ月ニ、倭國ノ高安城、讃岐國山田郡屋嶋城、対馬國金田城ヲ築ク」とある。齊明天6年(660)朝鮮半島西南部に位置した「百濟」は唐・新羅によって滅ぼされ、同盟関係にあった大和朝廷は天智2



第1図 金田城跡位置図

年(663)白村江で唐・新羅連合軍と戦い大敗した。対外防備を早急に備えるため翌年対馬・壱岐・筑紫に防人、烽を配置し守りを固め来襲に備えた。

3. ピングシ山・同鞍部の調査

調査の前年度、平成4年度の整備委員会で次年度の調査方針が決定した。一ノ城戸の図化と二ノ城戸と三ノ城戸間の鞍部の試掘調査を実施することとなった。金田城は発掘調査が行われたことはなく、現存する城戸、城壁以外の遺構の存在は皆無であった。

調査地であるピングシ山鞍部は城の東部に位置し、城内唯一の平坦地である。しかし現地は、南にピングシ山、北は城山の斜面が迫り、東西は谷が深く入り込む場所で、実際の平地部分は約20m四方の範囲しかない。東西の谷はそれぞれ二ノ城戸、三ノ城戸方面へ続き、鞍部の現状は後世の炭焼き、植林によりかなり荒れた状況であった。この地の調査は、初年度より6年間継続して行われた。また、平成13年度には鞍部南西部の補完調査を実施している。長期に渡る調査が出来ないため少なからず時間を要したが、調査の度に新たな遺構の発見があった。調査内容について触れてみたい。

(1) ピングシ山鞍部の調査

昭和30年代に城山一帯にスギ・ヒノキが植林され今日に至る。特に鞍部一帯はヒノキが多く密集し、昼間でも薄暗く見通しも悪かった。鞍部中央一帯にグリットを設定しトレンチ調査を行ったが、具体的な遺構を検出するに至らなかった。この鞍部の広場は後述する土塁や門の内側になり、ピングシ山北斜面より見下ろされる位置にあることから、本来建物などの遺構が存在しない場所であったことが調査によって明らかになった。遺物は表土層から時期を特定できない須恵器片10数点が出土している。

(2) ピングシ門付近の調査

ピングシ山鞍部の東側入口にあたるこの地は、鞍部中央一帯の調査で遺構の確認ができなかつたことにより場所を東へと移し調査した。その結果、鞍部東端の表土下より門礎石が出土した。それに伴い付近を精査した結果、石列と集石遺構を新たに確認した。残念ながら対となる門礎石の発見には至らなかったが、この地に門の存在が明らかとなった。周辺を観察すると門礎石の左右にある盛り土は土塁であることが判明した。これまでヒノキが密集し見通しが悪かったため自然地形と思われていたが、門礎石の発見により周辺のヒノキを伐採したことで南北に延びる土塁を確認することができた。調査開始時には土塁の存在も確認されておらず、門の存在も予想していなかった。門礎石は縦0.8m×横1.2m×厚さ0.3mの石英斑岩に、直径25cm、深さ6cmと直径

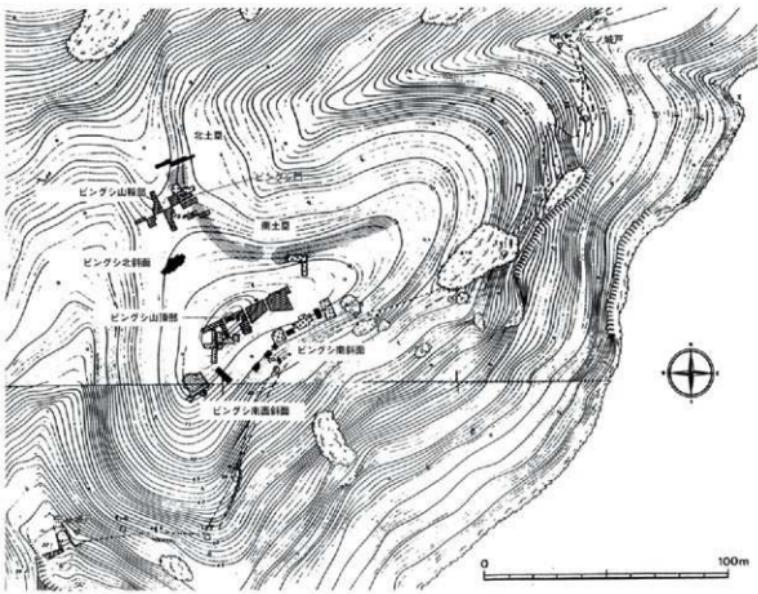


図2 ピングシ山・鞍部調査範囲

13cm、深さ8cmの2つの柱穴が施してある。大きい柱穴は門柱を支えるもので、小さいものは回転扉の軸摺穴である。検出された門礎石は、従来知られていた城戸とは立地が異なる場所から発見されたということで、この鞍部が城戸同様にかなり重要視された場所であったことが窺える。特に二ノ城戸方向へは土星を巡らし、門を築いた堅牢な作りで、防備が強化されている。二ノ城戸は北東に三ノ城戸は南西の位置にあり、敵は北から攻めて来るものと想定し土星を築いていたと推定される。三ノ城戸方向にはこのような施設の痕跡は何ら確認できていないため、それぞれの城戸の役割・重要度の相違を思わせる。この新しく発見された門は、既存の各城戸とは立地・構造が異なるため、あえて四ノ城戸とせず、「ピングシ門」と呼称することにした。大野城太宰府口門跡は掘立柱門として創建された後に礎石建物へ建て変えられているため、金田城においてもその可能性がある。後のピングシ土星の調査で前後期2時期の土星が確認されている。出土したピングシ門礎石は後期土星に対応されると考えられるため、前期土星は掘立柱門であった可能性があるが、門礎周辺の調査では検出されなかった。

(3) ピングシ山の調査について

ピングシ山の頂上付近の標高は83mを測る。名の由来は対岸の黒瀬地区から望んだその形容が、女性の髪飾りに似ているところからその名がついた。ピングシ山は小高い丘陵になっており、その北西部には鞍部があり城内唯一の平坦地が形成されている。山頂からは黒瀬湾が一望でき、黒瀬地区の集落も視界におさめることができる。東側の眺望は特によく、見張りや物見には最適な場所で、南斜面は日当たりも良いため好天の日は暖かい。また山頂部は当初予想していた以上に傾斜が緩やかで、尾根上には狭いながらも平坦な場所があった。調査は山頂から東北東に延び

る尾根上に基準杭を打ち、トレンチを設定した。調査の結果、柱穴 8 個の掘立柱建物と判明した。規模梁行 1 間、桁行 3 間で、標高は 80.5~81 m 付近にある。柱穴は平面形が約 60cm 四方の正方形をなし、全て岩盤を掘り込んでいる。残存している深さは 60~70cm のものが大半である。柱穴の間隔は 190~200cm ではほぼ統一されている。建物の面積は 12m² である。東方面的視界がよく、鞍部も見下ろせる位置にある立地から見張りのための施設であったと考えられる。この建物跡の西側 5 m 付近のところから南北に一列に並ぶ方形の柱穴 5 つを確認した。こちらも岩盤を掘り込んでつくられており、深さは 40~70cm で柱間は 2 m 程である。柵列と考えられ、建物跡とほぼ直行する並びである。また、山頂の南には狭いながらもテラス状の平場がある。南向きで日当たりもよく、その先には石塁が南北に走っている。調査の結果、石匂いの炉跡と周辺から温石 5 点が出土した。また、少量の須恵器も出土している。柱穴も 10 個確認されたが、遺構として成り立たず正確不明のものであった。しかし僅かながら防人の生活痕を確認することができた。“人”が住んだ形跡がよく遺るこの地が、いかに重要であったか窺える。ビングシ山にこのような施設があることは、ビングシ門や土塁を確認できた鞍部と相まって、金田城の中核部としての役割を担っていたと考えられる。

(4) ビングシ山北斜面の調査

ビングシ山の鞍部側、北斜面にテラス状の平坦地が存在する。標高 73 m 程の場所にあり、ビングシ門や鞍部を見下ろせる位置にある。調査の結果、梁行 1 間、桁行 2 間の掘立柱建物を 1 棟検出した。柱間は 2.1~2.2 m で柱穴は円形で岩盤を掘り込んでいる。直径 50cm、深さ 80~90 cm を測る。柱穴は 5 個確認できたが、北側の中央部分は検出できなかった。建物の南側には幅 10~15cm、長さ 6 m 程の溝で区切られ、北側は岩盤が落ち込んでいる部分に客土し平坦地をつくりだしている。東側は列石を置き区画している。ビングシ山山頂で検出された建物と比較するとひとまわりほど小さく、プランも異なる。建物の規模は小さく生活の場として機能していたとは考え難い。倉庫の役割を持った建物であったと考えられる。

(5) ビングシ山鞍部南西部の調査

調査地であるビングシ山鞍部南西部は、標高 70 m 程に位置する。ここより南へ 100 m の位置に三ノ城戸があり、東はビングシ山頂部、北東 200 m には二ノ城戸となる。この地も例外ではなく、ヒノキが植林されており、谷部（三ノ城戸）へ緩やかな傾斜地となっていた。ほぼ平坦地になっており何らかの遺構の存在が期待された。調査の結果、掘立柱建物が 1 棟出土した。また、北東及び東側から建物を取り囲むように小柱穴が出土した。標高は 70 m 付近に建てられており規模は梁行 1 間、桁行 3 間の建物で、地山を加工し整地された平場に建てられており、柱穴は岩盤を掘り込んでいる。柱穴はおよそ梁行 2 m、桁行 1.9 m で直径は 48cm を測る。小柱穴はおよそ柱間 1.7 m、直径 20cm である。面積は全体で 25m² である。ビングシ山北斜面で検出された掘立柱建物と比較すると柱穴は双方とも円形で、柱間、深さとも酷似している。また、内部より炉跡が確認されており、60cm 四方の範囲に炭と赤土を帯びた石が検出された。なお、ビングシ山南斜面でも炉跡が確認されている。建物の北東及び東側から出土した小柱穴は建物に附属するものと判断した。これまでの建物にはない構造で、柵列・目隠し塀などの構造物と推測される。今回出土した掘立柱建物は、内部に火を焚いた形跡があり遺物も確認されている。ビングシ山鞍部はこれら建物遺構やビングシ門、土塁が存在する。この地は城の中核として機能していたとみられ、建物の性格は防人が生活していた詰め所・宿所の可能性がある。これまで金田城で確認された建物は立地と出土状況から見張りか、倉庫の役割を持つ掘立柱建物だと考えられた。今回検出

した建物は内部から炉跡が、周辺には小柱穴が確認され、これまでの遺構とは明らかに違った構造であり、防人が生活していた可能性を持つものと推測される。建物内部から出土した遺物、炉跡から検出した炭化物は7世紀後半のものである。ビングシ山及び鞍部周辺からは土壘やビングシ門のほか、掘立柱建物を3棟検出し、生活の痕跡も確認されたことから、金田城の中核部として機能してきたことが裏付けられたといえるだろう。

(6) ビングシ土壘の調査

かつて金田城では石垣は存在するものの土壘は存在しないと思われていた。しかし、平成5年度の試掘調査で門礎石が発見されたことを契機として、周囲の樹木を伐採したところ、ビングシ山鞍部を防御するように、孤状に築かれた土壘が発見された。ここではビングシ門を境として北に延びる土壘を「北土壘」、南へ延びる土壘を「南土壘」と呼称する。

土壘はビングシ門を境として南北方向に「L」字を描くように構築されている。北土壘の長さは現状で確認できる範囲では15m程で、北端は城山の山腹に吸収される。南土壘はビングシ山の東斜面をL字状に巡り、その端は谷にてたところで完結する。南土壘の現状の長さは約100mである。土壘の高さは自然地形の勾配の影響をうけて地点ごとに異なるが、土壘の内側からみた現状では最大1mほどの高さである。北土壘と南土壘の断面調査を実施した結果、金田城の土壘は二重構造をなすことが判明した(以下、現状で確認できる土壘を後期土壘、その下に存在する土壘を前期土壘と呼称する)。前期土壘は鞍部東側の谷の地山となっている赤褐色土を用いており、黄褐色の土盛りである後期土壘とは明確に分離できる。その結果、2つの旧表土はそれぞれ前期土壘と後期土壘のそれと判断できる。したがってこの2つの土壘が前後関係をもつことは確実である。北土壘では新旧土壘の頂が離れており、両者の盛土の違いが際立っていた。すなわち前期土壘では土壘頂部付近にわずかに古墳の墳丘の盛土に類似する版築構造であった。版築は北土壘によく遺っている。それより下位はいわゆる互層積土である。後期土壘も互層積土であるが、各土層の幅は新土壘のほうが多い。これに対して南土壘は土壘の頂が接近しており、分かり難いが前期土壘の盛土状況は調査の結果、北土壘と同じような状況であろうと判断し

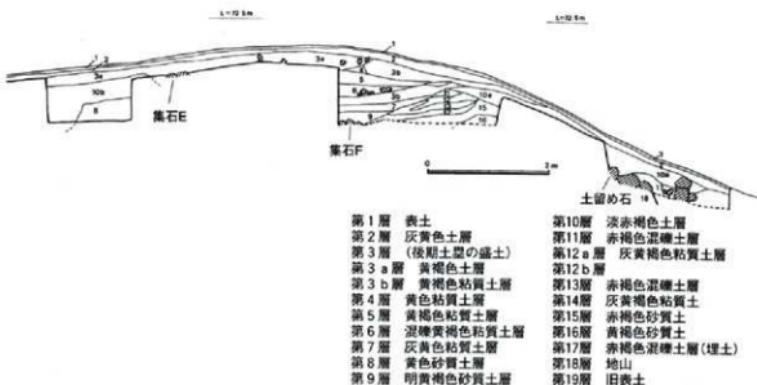


図3 北土壘土層断面図

た。土壘の周辺からは石垣状の遺構や比高差をもつ石列や集石、さらには神籠石のような巨石を並置した遺構が検出された。これらの遺構は土壘に附属した施設と考えられる。このうち巨石並列遺構は土壘の土留めないしは根固めの遺構と考えられる。一方、比高差をもって検出された集石ないし石列であるが、それぞれの調査区で約1mの比高差をもって検出されている。その本来の姿は石垣遺構のようなものではなかったかと考えられる。北土壘では長側辺をそろえた3段の石垣遺構が検出され、石垣の北半分では石の崩落がみられないことから、石積みは当初から3段までであったと推測される。石垣の機能は土壘南側(内側)の土留めないしは根固めと考えられる。

金田城の土壘は前後2時期の土壘から成り立っており、そのうち前期土壘は谷部に向かって巨石を立て並べて、土壘の根固めとしている(巨石並列遺構)。巨石を観察すると表面が変色し断面に残る旧表土から、築城当初は地表に露出させていたものとみられた。前期土壘の盛土は谷を掘削することで得られた土(赤褐色土)を用いている。鞍部側の土壘の裾は数段(3段か?)の石垣で土留めをおこなっている。後期土壘は前期土壘を被覆する形で盛土されている。使用した土は谷部の土ではなく、ビングシ山ないし鞍部の土と考えられる(黄褐色土)。谷部の土留めは北土壘では巨石並列遺構をそのまま使用し、鞍部の土壘裾の土留めのために新たに3段の石垣状遺構を築いたと考えられる。前後土壘の時期差の判断は出土遺物が少なく判断できなかつたが、前期土壘内より検出した炭化物の年代を測定した結果、西暦540~650年の数値を示した。測定された年代をそのままあてはめると、6世紀前半から7世紀後半のある時点で造られたといえる。したがって『日本書紀』に記されてある天智6年(667)に金田城が築城されたという記録より若干古い年代を示している。しかし最終的には考古遺物からみた年代との組み合わせにより年代を決めることが望ましく、結論は今後の調査に持ち越しとなる。

4. ニノ城戸城門跡について

(1) ニノ城戸の現状

二ノ城戸付近は、ビングシ山の北東標高24mに位置する。石壘に沿って南東に進むとビングシ山南斜面をかすめて三ノ城戸に至る。南北より石壘が迫り、双方の石壘は損壊が著しいが、とくに南側の石壘の損傷は激しい。以前より二ノ城戸付近には2つの柱穴(そのうちひとつは軸摺穴)をもつ門礎石と、谷部に流出した礎石(1穴)が存在することから、かつてここに城門が存在したことが推定されていた。しかしながら二ノ城戸の状況は、先述したように石垣部分の崩落が著しく、大小の崩落石が城戸全面に散在するという状況であった。とくに、城門のあたりとおぼしきところは、崩落石がマウンド状に堆積し、その上にはカシの巨木が生えるというありさまで、調査前には主要な遺構は破壊されたものと推定されていた。

(2) 調査の概要

これまで二ノ城戸の先端部には、3個の巨石を積み上げた石積みがあり、原位置を動いていないと想定されていた。さらにこの石積みはその場所から判断して石垣の一方の角ではないかと推定された。調査はこの石積みを基点として、石積みの根石を露出させながら、西へ延長するところから開始した。崩落石や崩落土を除去していくと、西へ向かって側壁の根石の列が検出されたため、当初の想定どおり、この3つの巨石の石積みは二ノ城戸の南側石垣の角であると判断した。次に二ノ城戸北側の石垣部分の根石を検出すべく調査を継続した。すると現地表下1mより、原位置を保つであろうと推定できる根石を発見した。さらに南側の石壘の角に対応した北

側の石垣の角を検出しようと試みたが、原位置を保つ根石が発見できず、苦慮していたところ、城門の北壁に使用されたとみられる巨石が出土した。この巨石を中心に東西に崩落石を除去していくと、推定したとおり城門の北側の壁が現れた。北壁は整然とした石垣で構成されていた。この後、城門の床面は石敷であることが判明し、既存の門礎石と対になる礎石が検出された。さらに門柱の礎石が2対計4個、原位置を保って検出された。また城内入口部分は、袖石をつかって狭めていることもわかった。袖石部から城内への進入部には2段の石組み(階段)が残っている。

(3) 城門の概要

城門は床面先端部から城内入口部の石段までの奥行きが4.0m、城門入口の間口は南北壁間の距離とすると先端部で3.2mを測る。城内進入部は袖石によって狭められているが、現存する袖石間の幅は1.8mである。しかし

南側の袖石に続く石が流出した可能性が高く、城内進入部分はさらに狭かったと推定される。このことは2段目の石段が1段目より幅が狭くなっているところから推定できる。したがって2段目の石段の幅を考慮して復元される袖石間の幅は1.4~1.6mである。城門は梁行1間、桁行2間の礎石建物で当初6本柱と推定されていた。しかし後述する南門の調査で梁行1間、桁行3間の礎石建物が存在したことが明らかとなった。二ノ城戸には前方の谷部に明らかに原位置を保っていない1穴の礎石がある。この礎石と対の礎石の存在が予想され、本来門前方部にあつたとされる階段上に置かれていたと考えられた。もう1つの礎石の確認が急がれる。門の規模は柱穴の心々間を測ると、東西方向は338cmと346cm、南北方向は279cmと280cmである。

(4) 遺構

北側壁の城門入口部に高さ70cm、幅170cmの巨石塊をおく。その後方に石垣を築く。石垣は残存部で4段の石積みである。石英斑岩を用い、小口を面としている。小口面は平滑に仕上げている。積み方はおまかに目地を揃えるもので、石塊と石塊の間に角礫を入れて固定させている。城内入口部より4m程入ったところに高さ80cm、幅90cmの巨石塊をおく。このことは南側壁と同様である。石垣の残存高は110cmである。石垣は若干上圧により城門内に傾く。

南側壁の城門入口部は石垣が構築されているが、樹木により若干損なわれている。残存部の石垣は4段である。石材は石英斑岩で、ほぼ目地をそろえている。表面は面とりして平滑に仕上げており、石塊の間に角礫で充填し固定させている。根石部分は不明である。石垣の残存高は1m、南壁中央には高さ60cm、幅160cmの巨石が斜めになった状態で座っており、危険なため巨石下の部分は未調査である。充填土は突き固められたように締まっており、同様に北側壁の城内側でも確認できる。

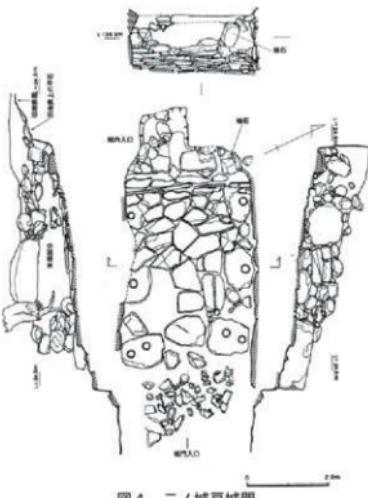


図4 ニノ城戸城門

敷石が城内に配置されている。27個の偏平な石によって構成されている。粘板岩と石英斑岩よりも、粘板岩が多い。城内入口部分の方が城門入口部分より高く、床面は傾斜をなしている。この傾斜はもともとあったものと推定される。城内北西部はやや陥没している。土圧か樹根によるものと思われ、当初は同じ高さに揃えられていたものと推定される。城内入口部では2ヶ所に敷石が流出した部分がみられる。礎石は例外なく石英斑岩が使用されている。

階段の1段目は粘板岩の板石を立てている。土留めの機能をもつのであろうか、城内と階段を区画している。北側壁沿いの直立した板石は二重に配置している。立石の後方は長細い砂岩の板石を4枚敷いており、2段目は石英斑岩によって段がつくられている。3段目は石英斑岩を立てている。石段の中央部は南側には残存しない。旧地表を含めると計4段の石段よりなっていたと推定される。一段の高さは20~25cmである。

城内入口部は袖石によって狭められている。北側の袖石は原位置を動いているものの、5×35×50cmの直方体である。北壁の石積みは袖石に向かって緩やかに回り込んでいる。根石も同様である。袖石の上部には50×50cmの板石を斜めに打ち込んで楔にして袖石を固定している。南側の袖石は北側の袖石の半分くらいの大きさで隣にもうひとつ石があったものと推定される。これは石段の石がないことからも証明される。南壁の石積みは袖石に向かってゆるやかにカーブした石が袖石の下に積まれている。

今後二ノ城戸は金田城の整備箇所の中でも最も重要な場所となる。平成16年度から崩落石の集石作業に着手し、石垣の解体・積直に取り掛かる。敷石の耐久性に問題があるため現状で公開することは難しい。左右の石壙を現況の高さで積直し、門を安全かつ効果的な手法で整備し一般に公開したい。

5. 南門の調査について

(1) 南門の現状

調査地は標高90m付近にあり、軍用道路(登山道)を登って約15分で着く。この調査は対岸の黒瀬から船で渡るのはなく登山道から移動することになる。付近には旧日本軍による軍道(登山道)工事の折に掘削を受けた跡がある。調査地は旧軍用道路と石壙が交差する南部石壙の西へ20mの地点にある。石壙上に「崖み」が存在することが古代山城研究会の踏査によって判明していた。周辺はこれまで伐採をしたことがなく雑草と小木、シダが手付かずの状態で広範囲に渡って生えており、本来の地形もわからない状態であった。

(2) 調査の概要

作業はまずチェーンソーでシダの伐採から取り掛り、その後堆積土、転石、根の除去作業を実施した。周辺を伐採後精査してみると、崖みは石壙の流失でできたものにしては転石が少なく、人為的なものと判断した。転石、土の除去をしていくと崖みの東側より敷石を数枚確認することに成功した。更に四方に範囲を拡幅していくと礎石・敷石・階段・側壁を検出しこの地に門の存在が確認された。最終的に梁行1間、桁行3間の礎石建物で城門入口側、城内入口側の階段が非常に良い状態で出土した。

(3) 遺構

門礎石の石材は二・三ノ城戸、ビングシ門と同様石英斑岩を使用している。柱穴は円形で8個の礎石はほぼ原位置を保っていると考えられ、城門入口から2つ目の礎石に軸摺穴が施されている。梁行は柱穴の心々間を測ると東・西側ともに約550cm、桁行は約320cm間隔で統一され

ており、ほぼ原位置を保っていると考えられる。南門の特徴の一つとして門礎④と⑧は城内入口階段上に、門礎①と⑤は城門入口階段上に置かれており、階段と一体化した門であったことが確認された。この結果、これまで二ノ城戸城門は1間×2間の規模と考えられてきたが、城門入口前面の谷に1個の礎石が転がっており、元々前面にあったとされる階段上に置かれていた可能性が出てきた。二ノ城戸は城門入口と城内入口側にあったとされる階段の一部が残っている。その内、城門入口の階段上には礎石があった可能性が高く、南門より規模は小さいものの8本柱の門が存在が確実となった。軸摺間は238cmあり、門は内開きであったと推測される。城内は二ノ城戸と同じく石が敷き詰められている。城内の面積は5.5m²程度敷石は粘板岩を使用している。11個の扁平な石によって構成され城門入口部分が城内入口部分より若干高いものの高低差は僅かであり歩きやすい。北東部と北西部の一部は石が流失したとみられる。階段は扁平な粘板岩を用い、3段で構成されている。

(城門側) 城内入口西側は粘板岩の板石を立てている。2段目と3段目は石が2列で構成され幅を広く取ってある。

(城内側) 階段は一枚石で構成され現存で7段残る。最大で幅90cmの方形の平石を使用している。城門入口側には西側に1列しか存在しない。敵の侵入を防ぐためか人が1人通れる程度の幅の階段となっている。

側壁 石垣の残存高は210cm程度で、調査前には上部の石垣が露出していた。巨石の石英斑岩を用い、積み方は目地を揃え、石塊の間に角礫を入れ固定させている。表面は面取りして平滑に仕上げている。東壁は城内入口から城門入口へ逆ハの字形に広がっている。

(西) 門の中央部分は側壁下部が抜けしており不安定な状態で、はらみもあり崩落の危険がある。石材は石英斑岩で目地ははらみや抜けのため揃っていない。表面は面取りして平滑に仕上げている。上部に土が覆っているため正確な高さは不明であるが、現状で160cmを測る。

袖石 城内入口部は二ノ城戸同様袖石によって狭まれている。西側は流失しているのか確定しないが、東側の門礎⑧の上に3個の石を積んでいる。最上部は石英斑岩の直方体の石材を用いている。

炭化物 南門の調査で金田城跡では初めて炭化材が確認された。原形を留めていないが、幅20cm、長さ1m、厚さ2~3mmの板状で、他に杭とみられる炭化材も確認された。炭化材は堰板の可能性も指摘されている。放射性炭素年代測定の結果、曆年代の交点は西暦650年を示した。礎石内部検出炭化物、炭化材とも材質はクスノキであった。



第5図 南門

6.まとめ

南門は金田城の古図（19世紀に作成か？）には掲手とある。平成15年度の調査で南部石垣より新たな城門跡が確認された。近世に描かれた絵図で、殿守・本丸など記されていたが、それらの名称は古代山城には存在しないため信びょう性にかけていた。しかし掲手と記されている箇所から南門が発見されたことにより、この絵図が描かれた時には門が存在した可能性が高まった。城内には未だに未調査の地が多く、踏査して全容解明に少しでも近づけたい。金田城には3つの城戸がありそのうち二ノ城戸と三ノ城戸では城門跡が確認されている。二ノ城戸では1間×2間（桁行3間の可能性がある）の礎石建物が確認された。南門では階段上に4個の礎石を置き門とする構造であった。二・三ノ城戸は東沿岸部（標高30m前後）に位置し海路から通行に利用されたと考えられる。南門は標高90m付近に位置したところにあり陸路に通じる門の可能性もあるが、今まで登城道は確認されていない。他の古代山城調査事例をみると鬼ノ城で登城道の調査を試みているが確定には至っていない。唯一鞠智城では堀切門で両側に側溝を持つ幅3mの登城道が調査によって明らかとなっている。南門及びその周辺の調査はまだ完了しておらず、整備手法においても今後審議を重ね良い手法を模索したい。二ノ城戸の整備を終える平成20年度から調査及び整備に着手する予定である。

整備はビングシ山周辺を一応終えた。平成17年度は二ノ城戸石垣修理工事の2年目を迎えた。門左右の石垣集石・解体・積直工事を平成19年度までに終了させる計画で進めている。門は復元ではなく表示整備程度に留める（可能であれば現状に近い形で公開）。左右の石垣は現状の高さで積直しを行う。発見されたビングシ門・二ノ城戸・南門は礎石建物の門であり、金田城創建時には現行の門より先行する掘立柱建物があると想定される。将来解明すべき重要な課題であり、何れビングシ門周辺の補完調査を考慮する必要があるだろう。

引用・参考文献

- 小田富士雄 1997 「西日本古代山城に関する最近の調査成果」『古文化談叢』第37集 九州古文化研究会
- 熊本県教育委員会 2000 「鞠智城跡第21次調査報告書」熊本県文化財調査報告第191集
- 総社市教育委員会 2001 「鬼ノ城 登城道および新水門の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』11
- 美津島町教育委員会 2000 「金田城跡」美津島町文化財調査報告書第9集
- 美津島町教育委員会 2003 「金田城跡」美津島町文化財調査報告書第10集

・対談・・・・・

(大田) 講座の冒頭に田中さんが、一人でも多くの方に金田城跡に来て頂きたいことをおっしゃっていましたが私も全く同感です。以前とある歴史講座に行きました際に、講座参加者に鞠智城に来た人がいるかを尋ねましたが、来たことがあるのはたった1名という事実に愕然としたことがあります。さて、いくつかお話を伺いたいと思うのですが、まず城の名称ですが、正式には「かねだじょう」でよろしいですか。

(田中) 古代では「城」の事を「き」と呼んでいました。そのため正式には「かなたのき」という言い方が正しい使い方と思います。私は先程から「かねだじょう」と呼んでいましたが、今では「かねだじょう」、整備委員会等でも「かねだじょう」という言い方を使っています。

(大田) 鞠智城も以前は、「くくちじょう」と呼んでいましたが、本来は「かなたのき」同様、「くくちのき」だと思います。その後、平成8年度から「くくちじょう」と呼んでいますが、古代山城の呼び名というのは難しいですね。それではこれから「かねだじょう」と呼んでいきます。ところで、対馬全体を考えた時、金田城に繋がっていくような烽を使つた連携というのは想定されるのでしょうか。

(田中) 烽台も当然山頂付近にあったと思われますが、山頂付近一帯は、明治時代に造られた城山砲台のためコンクリートに覆われております、烽台の跡を確認する事は厳しい状態です。金田城跡は対馬の南の方に位置します。このため対馬の郷土史の先生は、島の北側は最も韓国に近いため、金田城の北側に烽が8ヶ所あったのではとおっしゃっています。その8ヶ所の烽をリレーして金田城に知らせた後、壱岐を経由して大宰府に伝えたのではないかと推測されています。しかし現在まで烽台の遺構は確認できません。

(大田) 対馬の島の形については駆逐艦の様なイメージを持っていますが、もう一度金田城跡の位置説明をお願いいたします。

(田中) 金田城跡は、対馬の中部に所在する浅茅湾の南辺に半島状に突き出た城山という山に所在します。城跡には、北側から一ノ城戸・二ノ城戸・三ノ城戸と呼ばれる城門があります。

(大田) ありがとうございます。次に防人の話について伺いたいと思います。鞠智城においても防人がいたという話はあるのですが、金田城では防人がいたとして、その防人たちはどこに住んでいたのかという素朴な疑問があります。講座の中で城内から炉跡が発見されたことから、城内にも住んでいたのではないかとおっしゃいました。しかし、城内には平坦地が少ないと多くの方は住めないと思いますが、平時には防人はどのような場所にいたとお考えですか。

(田中) 城内には防人が生活する平坦部はありませんし、これまでに見つかった建物跡5棟においても内部が狭く、とてもそこで生活していたとは考えにくいものです。ところで金田城跡の近くに鶴知という地区があります。ここには古墳が3基あり、古墳時代、

古代において対馬の中心はここ一帯であったと考えられます。これまでに古代の集落跡は発見されていませんが、おそらく防人たちはこの鶴知に住み、そこから金田城に行ったのではないかと考えています。

(大田) では、金田城にはどれくらいの防人が配置されていたのでしょうか。

(田中) 金田城整備委員会の中に文献史学の先生がいらっしゃいますが、その先生によると文献の方からも確たる人数が掴めてはいないけれども、対馬全体で100人程いたのではないかということでした。それでも、あくまで推測の域です。対馬の北方から烽を配置していくたと考へるなら、かなり分散する形になるので、仮に100人としても、その100人全員が金田城1ヶ所に配置されたとは考えにくいと思います。

(大田) 防人をグループ分けした場合、数十人もしくは数人単位にしかならず、有事の際の戦闘要員というより治安維持という役割があったのではないかという意見もありますが、対馬における防人の役割はどのようにお考えですか。

(田中) 第1の役割は見張りだと思います。仮に、唐・新羅の襲来を発見したとします。中心地が鶴知周辺と仮定した場合、まずそこまで烽を使ったリレーで知らせ、そして壠岐を経由して大宰府まで連絡をする役割があったものと思われます。対馬で敵を防ぐ事は考えていかなかったと思います。

(大田) 城山の山頂には旧日本軍が設置した砲台があり、韓国の方角に向けて石塁がずっとあります、金田城には唐・新羅連合軍への威圧感を示す役割があったのでしょうか。

(田中) そのとおりだと思います。威圧の意味でその存在を知らしめる役割をもっていたと思います。

(大田) 次に講座でお話に出ましたビングシとその周辺の土塁についてお話をお願いできますか。

(田中) ビングシは二ノ城戸と三ノ城戸の中間に位置します。ここに20m四方のわずかな平場がありますが、土塁は二ノ城戸側に残っており、三ノ城戸側にはありませんでした。それは敵の襲来を想定した場合、北の二ノ城戸側から来ると予想して土塁が造られたと考えられます。外郭線はあくまでも石塁寄りにあるため土塁は唯一ここにしかありません。そして建物跡がわずか数棟ですが見つかっています。私たちは調査の成果から金田城の中心がこのビングシ山鞍部、土塁一帯にあったのではないかと考えています。

(大田) 是非ともお伺いしたかった事があるのですが、中・近世でお城を壊す時にはまず石垣を壊し、その後、門を壊します。そうすることで、お城の生命を絶つのですが、これを「破城」と呼んでいます。古代山城の場合も、同じく城を造って有事等の緊急性がなくなり役目が終わったとします。単に放置していれば敵襲来時に乗っ取られる可能性が考えられますよね。そういう意味で最後に城を壊すのではないかと思います。金田城跡では石垣が相当壊れています、二ノ城戸・二ノ城戸・三ノ城戸が埋まっていますよね。この金田城の崩壊についてはどのようにお考えでしょうか。

- (田中) 私は、金田城を壊したとは考えていません。あくまでも自然崩壊だと思います。後世は対馬を治めた宗氏の管轄になっており、幕末には再利用したという説が残っています。その意味で修築されているんじゃないかと考えられています。北側を中心に砂岩を使った石を積み直しています。おそらく古代から、近世、近代にまで軍事施設として利用されてきたのではないかと思われます。
- (大田) 次に石垣についてお尋ねします。石垣は、壊れると埋め殺し、外側に新たな石垣を築いた方が早いと言われます。一見しっかりと石垣が造られているのですが、実際、城の石垣を発掘してみると石垣が重複して、裏側に壊れた石垣を埋め込んでいる場合がほとんどです。しかし、金田城跡の場合は積み直しております、私は非常に不思議な感じがしました。石垣についてはどのようなお考えでしょうか。
- (田中) 城山は石英斑岩でできた山です。そのため土が非常に乏しく、対馬全体でも言えることですが逆に石はかなり豊富です。そのことから石垣も地元の石英斑岩を使っています。今のところ近世のお城のように埋め殺して前面に積み直した跡は確認していません。おそらくそのようにはしてないのではと思います。古代の根石を利用して積み直している状況はあると思いますが、埋め殺してから前面に造る方法は取っていないと思います。
- (大田) 対馬は国境にあり、古代から先の大戦、現在に至るまで有事の際の基地となります。以前の遺構を利用しながらずっと使ってきました。次に考古学的なお話を伺います。金田城は『日本書紀』の記述によって築城年代がはっきりしていますが、発掘で捉えることのできる時代幅があると思います。そこで、これまでの経験上、金田城の時代幅をどう捉えられているでしょうか。
- (田中) 『日本書紀』に「667年に築く」とありますが、時代の幅を示す遺物は確認されていません。今のところ、7世紀後半の須恵器が出土遺物の中心になります。それより新しい8世紀代の遺物、または逆に7世紀後半より古い遺物は今のところ確認されていません。
- (大田) では須恵器から見た場合、7世紀後半のどの辺りですか。
- (田中) 第3四半期に全部当てはまると思います。
- (大田) すると下限が8世紀に入らないのですか。
- (田中) 入りません。
- (大田) そうですか。鞠智城はずいぶん長く存続し、同じく大野城も長く存続していますが、金田城は非常に早い段階に困難が去った時には役目を終えたのでしょうか。次に言われた防人の生活についてですが、防人が100人と仮定した場合、食糧をはじめ色々な物資が必要で、大和朝廷からの援助物資もあったのではないかと思いますが、対馬では防人たちはどのような生活を送っていたのでしょうか。

- (田中) 『魏志倭人伝』には、弥生時代の対馬の土地は痩せ、山林ばかりだったと記載されています。現在も9割が山林で、耕地面積が3～4%、宅地が2%程度です。海産物は豊富にあったと思いますが、大宰府からの援助がなければ自給自足は難しかったと思います。
- (大田) 金田城を見学した際、興味深かったことがあります。現在、国定公園に指定されていますが大規模に伐採して、石星を露出させて整備されていますね。金田城跡の将来の整備・調査においてもああいった形で伐採して石星を露出させながら積み直していく予定ですか。
- (田中) そうです。確かに樹木伐採は必要最小限といつも言われていますが、見せ場を造りなさいという事もよく言われます。基本的に伐採は東側と南側の一部だけで、他はほとんど手付かずの状態です。そのため、海から見て北側と西側は石星が見えない状態です。国定公園の自然保護の面も考慮しなければなりません。伐採についても木がある事によって石星が壊れる場合と、逆に保護する場合とありますので、そうした注意を払いながら金田城に来る方・登山者に利用していただきたいと思います。
- (大田) 山城の石星は麓から見せるべきだと私は思います。船から見える所まである程度伐採して石星を出すことも理にかなっていると思いますね。いずれによ、金田城の保存と活用は最大の焦点だと思います。今後どのような保存と活用をお考えですか。
- (田中) 当初から海と陸の両面からの見学を考えています。海から行く場合、一ノ城戸の北側に大吉戸神社という後世に創建された神社があります。黒瀬地区から船をチャーターして、3～4分程乗り、神社に接岸して、それから現在の二ノ城戸に移動しています。今のところ上陸した場合、夕方まで帰れません。陸、海両面からの見学ルートの確立を考えていて、そのために大吉戸神社に浮桟橋を早く付けたいと思っています。しかし予算が一番のネックとなりまだ実現には至っていません。陸路は時間が掛かり、駐車スペースはありません。トイレや管理棟のような施設もありません。また、一周するのにかなり時間がかかります。色々なことがネックとなり、観光客には時間の都合上敬遠されているのが現状です。
- (大田) 福岡空港から対馬まで飛行機で30分ですので、観光業者とタイアップすれば日帰りも可能であり、やり方によっては金田城はもっと売り出せると思いますね。

大廻小廻山城跡

乗岡 実

1. 吉備の古代山城

吉備は岡山県の全域と広島県東部を含めた地域である。韓半島・北部九州から近畿地方に至る交通路の中継地的な位置を占め、瀬戸内海に臨む南部の肥沃な沖積地に遺跡が特に多い。5世紀前半の築造とされる造山古墳（墳長350m）を筆頭とする大形前方後円墳も数多く知られ、古墳時代には畿内、出雲、北部九州などと肩を並べる大きな政治勢力があったとされる。古代の政治領域としての吉備は和銅6年（689）に備前国・備中国・備後国に分割され、さらに持統3年（713）には備前国から美作国が分立された。吉備には古代山城が4ヶ所ある。そのうち、備前南部には大廻小廻山城、備中南部には鬼ノ城がある。ともに国指定史跡となっているが、「日本書紀」などの官史書には記載がみえない。また備後南部には「続日本紀」に養老3年（719）の廢城記事をみる常城、茨城があつたはずであるが、確実な遺跡は未発見である。

2. 大廻小廻山城

（1）立地

大廻小廻山城跡はJR岡山駅の北東13kmほどの位置、岡山市の北東部、東区草ヶ部・同瀬戸町観音寺・同瀬戸町笠岡にある。

立地の上で注目されるのは、古墳時代、あるいは山城が築造された7世紀代の遺跡分布と対照すると、大廻小廻山城跡は備前の三大中枢地の地理的な中心にあることである。

備前地域で1つ目の中枢地は城跡の南西に広がる上道平野で、旭川の東岸の沖積平野で、弥生時代以降の遺跡が高い密度で分布する。備前国府の想定地（岡山市中区国府市場）や国府に付随する津と考えられる百間川米田遺跡（岡山市中区米田）、備前最古の寺院である貧田庵寺跡（岡山市中区貧田）や大きな塔心礎を残す幡多庵寺跡（岡山市中区赤田）などがある。国府推定地から城跡までは約6kmである。

2つ目の中枢地は城跡の南東に広がる邑久平野である。岡山県の東部を流れる吉井川の下流東岸に広がる平野で、弥生時代以来の集落遺跡や古墳が濃密に分布する。7世紀代の遺跡としては、服部庵寺跡（瀬戸内市長船町服部）や須恵庵寺跡（瀬戸内市長船町西須恵）が知られている。

3つ目の中枢地は城跡の北に広がる旧山陽町域に広がる旧赤坂郡南部の盆地である。山城の前代では墳長192mの前方後円墳で、二重の周濠が廻ることが確認された両宮山古墳（赤磐市總崎）が注目されるほか、岩田14号墳（赤磐市山陽團地）のように環頭太刀を出土した6世紀後半の大形横穴式石室墳も知られる。古代では、7世紀代の寺院は不詳であるが、備前国分寺跡・国分尼寺跡（赤磐市馬屋）の存在が注目される。また、少なくとも平安時代の延喜式段階の山陽道はこの盆地を東西に貫き、国分寺・国分尼寺の隣接地には高月駅の想定地である馬屋遺跡（赤磐市馬屋）がある。城跡から国分寺跡までは3km弱である。

山城のある丘陵の麓地域には、古代寺院跡などは知られていないが、7世紀代のものを含むとみられる製鉄遺跡が数ヶ所で知られる。正式に発掘調査された事例はないが、炉壁・鉄滓と少量の須恵器や鉄鉱石片が共存し、横長で他口式の製炭窯とみられる遺構が確認できる地点もある。

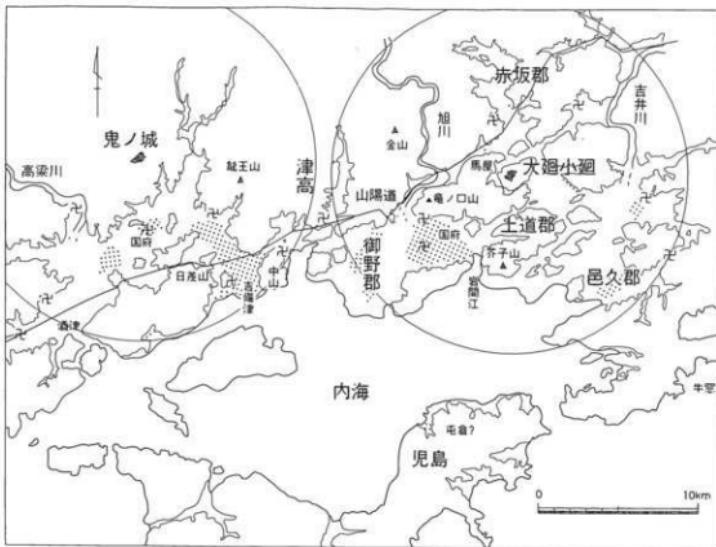


図1 大庭小廻山城と鬼ノ城の位置(円は半径11km。註2文献から)

こうした製鉄技術は韓半島から伝わったと考えられており、山城の周辺部に、渡来系の集団が定着していた可能性や、製鉄工房が山城と同時期に関連性をもって機能した可能性が窺えるのである。

また、城跡のすぐ北の谷は、先述の旧山陽町のルートとは別に延喜式以前の山陽道、あるいは山陽道の副路が東西に貫いていた可能性が指摘されている⁽¹⁾。その想定ルートから最寄りの城壁線までは0.7kmに過ぎず、そうすると当城はいよいよ官道に直結した立地と評価できる。

そのほか、考古学的あるいは歴史学的な証明は難しいが、山城の南東山麓には建部神社が所在し、一般に建部氏は大和政権から派遣された軍事に関わる集団とされる事に照らして注目される。

なお、備前の三大中枢地の地理的中心にあるということは、裏返せば本山城が古代律令制下では北の赤坂郡、南の上道郡の郡境付近に位置することにも繋がってくる。複数の郡に関わる山城であることは山城の規模からも明らかで、築城時の動員労働力の試算が10万人規模で、山城の麓地域だけ、あるいは1つの郡程度からの動員では恐らく賄い切れるものではない。

筆者は西日本各地の山城について、対応地域、守備範囲、つまり1日未満の時間の中で、城内にいる兵が急行して軍事行動を展開したり、地域の集団が城内に逃げ込める範囲として、城跡を中心に半径11km程度の範囲をモデルに考えている。その観点で本城をあらためてみると、その円の中に先に示した備前地域の三大中枢地がほぼ網羅し、備中の鬼ノ城の半径11kmの円と併せると、2城で吉備の中核部を効率よくカバーできる位置にあることが判る⁽²⁾(図1)。実際に城跡の高所からは、こうした地域を眼下に見下すことができる。

(2) 遺跡の発見と調査

廃城年代は明確ではないが、後述の一の木戸石塁の通水溝を埋める土砂から出土した土師器の年代からすれば、平安時代中期の10世紀には既に城としての機能を停止していた。廃城後は広大な山岳寺院境内となり、後身とみられる寺が築地山常楽寺として現存する。寺の山号である「築地」は正に城壁土塁に因む呼称である。そうした靈域あるいはそれを囲む土塁の存在から、弘法大師の行場である、あるいは農臣秀吉が高松城水攻め時に立ち寄り馬で廻ったといった伝説も生まれたようである。

古代山城としての発見は、戦前に廻り、地元の歴史研究者であった荒木誠一氏が1940年に発刊された『赤磐郡誌』のなかで「朝鮮式」の古代山城との見解を発表している⁽³⁾。

それが1960年代になって遺構に即して再確認され、岡山市教育委員会の出宮徳尚氏らが現地踏査を繰り返した⁽⁴⁾。

1984年から1989年にかけて、岡山市教育委員会によって遺跡の範囲と構造を確認するための発掘調査が行われた。城壁線に沿った6地区に小規模なトレチを設定するものであったが、城壁の版築盛土やその基部の列石を検出し、この遺跡が紛れもない古代山城であることが考古学的に確定した⁽⁵⁾。調査成果を受けて2005年3月には国史跡に指定され、史跡公園としての整備に向けて、土地の公有化事業が実施中である。

(3) 城跡の概要

城跡のある丘陵は中央が窪んだだらかな高原状である。最高峰は城跡の南東隅にある標高199mの小廻山、小廻山の北約300mにはほぼ同高の大廻山がある。城壁はこうした丘陵の概ね6合目以上の位置を一周3192mにわたって取り巻いている。城壁線は遺構としての完結回続が確認でき、単郭式である。城内面積は386,000m²に及び、鞠智城とほぼ同じ大きさで、日本の古代山城としては中規模である。

城壁基部でみた最高位は小廻山山頂付近の標高194m、最低位は一の木戸の標高85mで、アップダウンは109mとなる。また、麓の平地からの比高は最低で55m、最高で190mある。平地との比高は、九州の大野城・基肄城などの史書記載山城や備中の鬼ノ城に比べると低く、また鹿毛馬山城やおつば山城をはじめとした九州の史書非記載山城の主体や鞠智城と比べるとやや高い。

城壁線の総延長の98%は土塁である。そのほとんどの部分は土段状(内托土塁)で、城内側には壁面を持たない。またその城外側の壁面基部には列石が構築され、背後の盛土は細かな単位ごとに土盛と叩き締めを繰り返す版築技法によっている。列石と版築盛土の存在は他の古代山城の多くと共通するが、その細部は後述の様に当城の独自性が強いものである。一の木戸、二の木戸、三の木戸と呼ばれている城壁線が谷渡りする部分3ヶ所に限っては、城内側にも壁を持つ夾築の石塁で、排水施設をもつ水門となっている。城内最大の谷は中央から西に抜け谷で、一の木戸と呼ばれる最大の石塁がある。

城門は遺構としての実体は未確認であるが、今も里道が通過する一の木戸石塁の北縁、三の木戸石塁脇、城跡東辺部の大廻山と小廻山の間の鞍部などに想定でき、それぞれが先述の備前三大中枢地との連絡口と位置づけられる可能性がある。

城内の尾根の平坦部などに建物跡が予想できる場所があり、戦後に畠地として開墾された時に建物礎石とも思える石材があったとの証言もある。

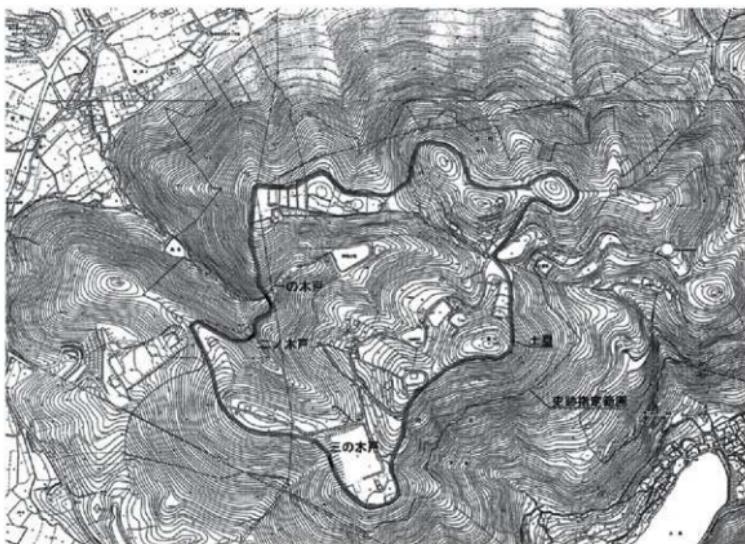


図2 大畠小畠山城跡全体図（註5文献の図を一部改変）

(4) 城壁一般部の土塁

一義的な城壁は版築盛土による造作であるが、たいていの箇所では、その斜面上方に地山削り出しによる上段を伴って、城壁線全体としての断面形は階段状になる。

こうした城壁には3つの類型がある。その第1は、2段造りで、上段の平坦部は明確な幅をもつて山腹に削りだされ、上段全体が下の段と完全に平行して続くもので、急斜面部での基本構造となっている。第2は、高原端の緩斜面部に多い形態で、やはり二段造りであるが、上の段の平坦部は明確な幅を持たずに高原地形の削り残しの側面が強く、上の段の壁は下の段の壁に平行せずにジグザグをなす事が多い。第3は、3段、4段と上方に相当数の段を重ね、平坦部や壁の連続が小刻みに変化して複雑なもので、丘頂付近に多い形態である。こうした、城壁の諸形態は、地形に即した造成方法の選択といった技術的な側面と、敵を遮る壁と守備兵が撃る武者走りの平坦地を入念かつ有効に設けるという、軍事配慮による側面が絡んでいそうである。

一義的な城壁である下段城壁の現状高は厳密に言うと1.5mから3.2mと振幅をもつが、たいていの箇所では2メートル数十センチに揃っている。日本の古代山城の城壁高としてはかなり低いものである。壁の立ち上がりの角度は、残りの良い箇所の基底付近でみると70~80度。壁の前面には、犬走り状の平坦部が沿うことが多いが、鬼ノ城のような敷石まではない。

列石材は、長辺60cm前後、厚さ20~30cmの長方体で、自然石をそのまま用いるものもあるが、粗削り加工を施したものも含んでいる。石の種類は砂質ホルンフェルスや花崗岩で、いずれも城内やすぐ付近で採集されたもので、九州の一部の史書非記載山城の凝灰岩などの列石材のように遠路を運ばれて供給されたものではない。

列石の組み立て方は相当に緻密で、原則は石材を1段1列に寝かせ置く。特に列石の上角は

丁寧に揃えられ、あたかも基準となる糸を張り、それに合せて石材を配していくが如く、きっちとした直線で延び、一定の角度の折れ部をもつ。この折れは、平面の上での折れはもちろん、立面觀としての折れも明確で、列石の傾斜のうえでも明確な変換点が指摘できる。主石材の隙間に詰め石が行なわれたり、列石主体部の背後に控えの石材が置かれた箇所もある。

こうした列石は、版築盛土の土木的基礎、そして防湿機能を果たすものであり、また背後の城壁線を構築する時の基準線となるものであったと考えられる。したがって、版築による城壁全体が列石にしたがって直線と折れを持って丘陵を伸展することになる。列石は、設計上、また工程上、絶対に必要なものとして認識されていたようで、城跡の西南部でし地点と呼んだ尾根筋の横断部では、固い岩盤を抉ったり、石材を小型化させるとしても、列石の連続を強引に確保した状況が見てとれる。壁面に露出する北部九州の史書非記載の山城の列石は、きれいで面を磨いた面をもつ切石を採用していることも併せて、見せ物とする側面が付加されたもので、それよりも大廻小廻山城の列石の方が本来的・機能的であり、古いものと考えている。

城壁裾の列石は神龍石系古代山城に特有なものであるが、厚みのある切石石材を横に置いたり、立てて置き、曲線をなして続く有明湾沿岸の史書非記載の古代山城の列石とは対照的なものである。

版築による城壁の上方、すなわち内托土壁上の平坦地では、柱穴列などの上部構造の痕跡を探したが、その際の発掘調査の内では確認することができなかった。ただ、その平坦地の山側の地山削平による造成箇所、ないしは地山削り出しの上段平坦部には、基本的に城壁線に平行して延びる深さ数十cmの素掘り溝が普遍的に認められた。版築盛土部分に出来るだけ雨水が流れないように、山側で受け止めるための施設と判断される。



図3 直線で延びる小廻山付近の土壘と列石
(岡山市教育委員会提供)



図4 城跡北辺の列石折れ部 (岡山市教育委員会提供)



図5 折れ線を描く城跡北辺の土壘 (岡山市教育委員会提供)

以上の城壁の幅は、場所によってばらつきがあり、またどこからどこまでを測るかといった問題があつて決めていく。下の段の城壁裾から上方の段で地山の削平が及んだ端とみられる位置までを測れば、およそ12mから25mと言える。また、排水用の溝の中心線と列石線に注目すれば、その間の距離はほぼ一定しており9.0mという数値が浮かぶ。9.0mとは、おつば山など北部九州の史書非記載の山城で指摘されている土塁幅の基本形で、唐大尺の30尺に相当し、注目される数値といえる。

(5) 版築の盛土

発掘調査では数ヶ所で土塁の断ち割りを行ったが、いずれも列石は下段の城壁面の20~100cm内側に版築層に埋め込まれていて、当時の壁面には露出していなかった事が判る。列石材は岩盤や風化岩盤を掘り込んだ溝のなかに薄く小さな石材が収まる位置で組まれることもあり、いったん盛土をした後に壁面の削り込みによる露出が予定されながら未遂に終ったというより、当初から壁面への露出を前提としているようである。

城壁本体の盛土は列石構築に続く工程で行われた。列石の外縁から僅かに外側に距離をおいて堰板が立てられた可能性があるが、その具体的な痕跡は確認できなかった。北部九州の史書非記載山城で検出された堰板固定用と評価される列石前面に等間隔で並ぶ柱痕も、発掘した箇所の限りでは検出されない。もし堰板があったのなら、上方から繩で引っ張ったり、板の外側基部に一旦土砂を置いて固定した可能性なども考えられる。こうしたことは本城跡の壁面が概して3mを越えない程の高さでしかないことと、関係する可能性がある。

版築の単位は、厚さは3~8cmで、硬く締まり、単位ごとに肌分かれするが、杵突痕の確認には至らなかった。積まれている土砂は、基底から頂部まで一様な互層をなすのではなく、大別層に分かれて、おのおので土質が異なっている。下部では有機質を多く含む暗褐灰色系統、中部・上部は周囲の地山に由来する鮮色土が優位である。下部の有機質土は、当時の地表土や造成に先立つ樹木の焼き払いに由来するとしても、意図的に選択されたことは間違いない。むしろ盛土全体として、素材を隣接地に求めつつ、炭・灰やニガリ類、水分や石(除去も含む)など含有物が積極的に調合された可能性も想定される。

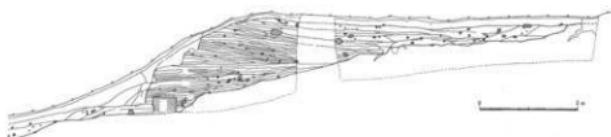


図6 土塁断面図(註5文献から)

(6) 石塁(水門)の構造

最大規模を誇る一の木戸の石垣は、城外向きの石垣の長さが24.0mで、南端付近に折部を持つ。この石垣線は版築盛土中に埋め込まれた、土塁部の列石線にそのまま続くが、石垣石材は列石よりも確かに大きく、長辺が1mを超えるものもある。最大で4段積み、高さ2.4mが残るが、本来の頂部を保つ状況ではない。さらに、石塁部の左右の状況からすれば、石垣の上にはさらに土塁が乗っていたとみられ、城壁としての復元高は最低でも5mに達する。

そうした城外向きの石垣と平行して城内側を向く石垣が構築され、石塁幅6.2mを画している。

内向き石垣の長さは23.3mで両端は石壘左右の斜面に当たって終わる。最大3段積み、高さ1.3mが残っていたが、やはり本来の頂部を保つ状況ではない。城外向き石垣が地山の岩盤上に直に積まれているのに対し、城内向き石垣は通水溝部を除いて、厚さ数十cmの角石層の上に積まれており、谷川の水が石垣本体に当たらないよう工夫されている。両石垣の間にも、土砂を交えず角石が充填され、排水を円滑に進めている。

石壘の基底部には、石壘の軸線とは斜交しつつも谷筋に沿ってトンネル式の通水溝が貫いている。内法は幅、高さとも0.7mほどで、左右壁に巨石を1段に配し、上に天井石を被せた構造で、床は地山の岩盤である。通水溝の出口は、城外向きの石壘面に開口するのに対し、入口は城内向きの石壘から2.5mほど上流に突き出した位置に開口している。

こうした石壘の構造は、これが決して谷水を貯える堤防などではなく、谷部に堅固な城壁を設けつつ、増水時の谷川の濁流から城壁を守り、城外に円滑に排水することに徹したものといえる。

一の木戸の南西にある二の木戸の石壘も部分的に発掘調査を行ったが、石壘の長さは11m、外側石垣の高さは3mほどに見積もれる。やはり城内向き石壘を伴い石壘幅は6.4mを測る。ここは、谷が狭く水量が少ないぶん、トンネル通水溝は設けられておらず、石材の隙間を伝って水が抜ける仕組みであった。



図7 一の木戸石壘 (岡山市教育委員会提供)

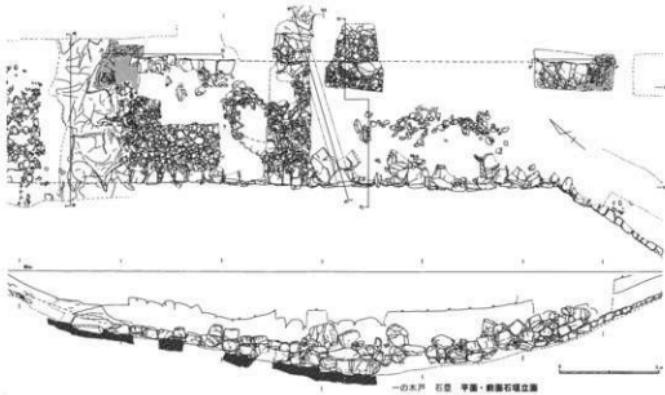


図8 一の木戸石壘実測図 (註5文献から)

3. 西日本の古代山城への展望

大廻小廻山城跡では築城の年代を決定づける状況での出土遺物は未確認であるが、城壁に沿う発掘区で7世紀後半から8世紀初頭の須恵器が出土した。史書記載の金田城、大野城、基肄城、屋嶋城の築城の契機となった白村江の戦いで倭国軍が大敗した663年以降のものである。吉備では備中の鬼ノ城でも同様の年代の須恵器が出土しているし、北部九州のその他の古代山城も同様の年代の須恵器が確認される例があいついでいる。

史書記載・非記載を問わず、西日本各地の古代山城は構造や規模の偏差、構築時期の微妙な段階差を含みながらも、7世紀後半～8世紀ごく初頭という枠組みのなかでは同時に機能したと考えられるのである。しかもこれらは、互いに関連しあっている。全体規模や土壘幅、あるいは構造の上でも一定の規格性、諸城を貫く普遍性がうかがえるし、各城跡の立地がその地域内でもとも、汎西日本的にみても、地域を掌握するのに非常に効率のよい場所にあり、さらに官道と直結した位置にあるものが多く、全体としてネットワークを構成するものである。

筆者は西日本の古代山城は、韓半島での情勢を受けた国際軍事危機を背景とするが、当時予想された日本列島内での大陸軍の軍事行動への即応にのみ徹するのではなく、戒厳令下とでもいうべき最重点地域の領域的な支配、なんなく軍事権の統帥を貫徹するために、畿内政権によつて政策的、制度的に染かれたものと考えている。確かに天智紀記載の6城は、唐・新羅来襲危機を直接の築城契機としたものであり、その他の史書非記載山城と構造的に異なる部分も多いが、列石の存在も含めて最近は共通項も明らかになってきている。両者は近畿政権が政策的に造った山城＝軍事施設として、西日本全体のネットワークのなかで融合していったのであろう。

蛇足ながら、こうした軍事と地域支配、実戦構造と視覚的効果、地域の独自性と政権による政策的配置といった観点から、古代山城を織豊期の城郭を対比してみると想いのほか共通点が見出せる。

註

- (1) 中村太一 1994 「備前国における古代山陽道駅路の再検討」『古代交通研究』第3号 古代交通研究会
- (2) 乗岡 実 1992 「古代山城」『吉備の考古学的研究』下 山陽新聞社
村上幸雄・乗岡 実 1999 「鬼ノ城と大廻り小廻り」 吉備人出版
- (3) 荒木誠一 1940 「第一二章 城址と戰跡」「改修赤磐郡誌」 赤磐郡教育会
- (4) 出宮徳尚 1978 「吉備の古代山城試論」『考古学研究』第25巻第2号 考古学研究会
- (5) 出宮徳尚・乗岡 実 1989 「大廻小廻山城跡発掘調査報告」 岡山市教育委員会

・対談・・・・・

(大田) 今日は講演の最後に、乗岡さんが大変な論を展開されました。つまり、天智期の対外的な政策の城と、大和政権が西日本地方に進出していく時の城とが、お互い国家の有事の際に絡み合っていたという大胆な説を提言されました。これは九州に住む者にとってなかなか考えるのが難しい事です。福岡大学名誉教授の小田富士雄先生は、古代山城は対外的な目的のための城とおっしゃっています。ところで、大和政権は東北地方に進出の際に政府的な足がかりの城柵を築いたことが記録にあります。しかし西日本地方には勢力拡大をしていく足がかり的なものは出てきません。この整合性をどうお考えですか。

(乗岡) 1つは古代山城の機能が対外的なものに尽きるのかと聞かれればちょっと違うと思います。つまり、戦闘だけを意図した構造ではありません。例えば文献資料に記述のない山城が全て鬼ノ城のような堅牢な造りであればそういう考え方もあり立つかもしれません、そうではありません。外国の軍勢からの逃げ込みだけを目的とした城であれば、地域の中核地のすぐ背後や、あるいは外国軍に見つかりにくい、ひっそりした隠れ里のような所にあってしかるべきだと思います。私が講演の中で述べた古代山城の機能を考えるには、近世の城と比較する視点が必要だと言った理由はここにあります。例えば鬼ノ城で復元している城門は、下の平野からすごく目立ちます。これは軍事的、視覚的にデモンストレーションをしているように思えます。織豊期の城郭で戦闘には直接役立たない金箔瓦を屋根に掲げている事と同じでないでしょうか。大廻小廻山城の場合も周囲の三方向の平野から目立つ位置にあります。つまり古代山城には、戦争の道具だけという面より、見かけが重視されているものが相当あると考えています。2つ目は、対外防衛のために築かれた天智紀に登場する山城が、現実に果たした役割です。対外的な緊張関係が起きて慌てて造ったわけですが、城としての整備が進むのはその後です。大野城や基肄城では倉庫跡が多数確認されていて、米の備蓄基地と化していきます。築城の契機や個別の戦略は色々あっても、近畿政権が築いた城は少なくとも結果として地域に近畿政権の存在感を示し、地域支配をより貫徹させるような側面を必然的にもつことになりました。これは、恐らく大宰府の成立契機、また大宰府がもつ軍政上の拠点と地域支配の道具立てとしての側面と重なってくる話だと思います。国府が出てくるまで軍政面を担うのが古代山城ではないかと思っています。確かに東北地方の城柵とは根本的に世界観というか、軍事施設としての枠組みが異なっていると思います。

(大田) 分かりました。では、重ねてお尋ねします。古代山城が造られた契機は対外的なことが大きかったと思います。唐・新羅の連合軍が攻めてきた場合にそれを迎え撃つのは、対馬を最前線基地として、船がずっと奥深く入っていくルートです。最後の高安城までピンポイントで敵の兵力を削減しながら戦っていきます。これは百済から伝えられた朝鮮式の戦略だと聞いたことがあります。こうしたピンポイントで迎え撃つための古代山城の配置は軍事的側面が率直に考えられるのですが、先程おっしゃった近世的な要素まで求めるべきなのでしょうか。

(乗岡) 対外防衛的な役割がゼロではないことは言うまでもありません。先ほど、例えでお話をした近世の岡山城の場合だって、莊嚴な天守や御殿を建て、天下人である秀吉を後見とする宇喜多秀家の備前・美作の支配拠点であります、極めて堅固な軍事施設であり仮

想敵国は西の毛利氏という造りです。ここで言いたいのは、対外防衛一辺倒で総てをそれに収束させて古代山城を考えるではなく、山城が地域の中で果たした役割、また地域支配の道具立てとしての観点からも山城を見る必要があるということです。

(大田) 鞠智城の場合には初期目的である対外的な要因が去った後は地域の治安維持的役割を果たす中で徐々に縮小していったと考えられます。大野城も同じ様子です。その後の状況についてどうお考えですか。

(乗岡) (大廻小廻山城は) 大まかには鞠智城や大野城と同じく変質しながら城の機能は縮小化の流れをとったとみられます。ただ、城としての廃絶は九州の二城よりも早いという見方をしています。また平安時代には恐らく靈域・宗教施設となっています。

(大田) 九州の場合には神龍石と古代山城との関係は非常に難しく、乗岡さんのように整理してもらって非常に助かります。なかなか一概に言えない部分があり、難しいです。

(乗岡) 九州以外から見た視点、西日本各地の古代山城をトータルに見る視点は大切だと考えています。

(大田) ありがとうございます。ところで、大廻小廻山城を訪れた時に、城内にある産業廃棄物を目の当たりにして、冷え込んだ財政事情の下、整備が大変であるなということを実感しました。大廻小廻山城の今後の展望についてお話して頂けますか。

(乗岡) その問題は私どもの中で一番の課題となっています。大廻小廻山城で最初に発掘調査を行なったのは昭和59年のことです。まもなく、粉れもない古代山城の貴重な遺跡、九州の古代山城とは異なる点も多く、その意味では新たな類型の古代山城である事が確定したのですが、史跡の指定は平成17年で、そこまで相当な時間がかかってしまいました。その間には産業廃棄物が持ち込まれてしまった部分もあります。私たちの無力さ、また文化財保護の力の弱さを痛感しました。今、史跡の指定を受けて今後20年間ほどの整備計画を練っています。まずは土地の公有化です。遺跡の大半は戦後しばらくまでは国有林だったところで、それを農地開発するために国策で民間に分譲したのです。それを再び史跡地として買い戻すといった皮肉な作業でもあります。いずれにせよ、土地の公有化をして、遺跡の保存と保護を担保する。次に整備に向けた発掘調査、それから整備です。遺跡は広大で手順や予算の関係などから遺跡全体についての早期実現は難しい状況で、まずは見学して頂けそうなところを段階的に整備を進めていこうと考えています。例えば一の木戸の水門石壁は、いまは藪に覆われています。城壁としての高さは低いと思われるかもしれません、それがこの山城の特徴であり、一番にインパクトのある所で、こうした箇所を核にして少ししずつ公開の為のケアを進める事が第一のステップだと思います。山城の木を全部切って丸裸にするのではなく、自然と一体となってピクニック感覚で遺跡見学が出来る場を段階的に整備する。こうした長い目で大廻小廻山城を21世紀から22世紀へと残し、活用していきたいと考えています。

(大田) 現在の文化財保護行政では徐々に発掘調査は終息に向かい一つあります。財政状況に伴い厳しい状況にあります。鞠智城も例外ではありません。岡山市も同じ状況でしょうか。

(乗岡) そうです。やはり文化財保護行政は10年20年の話では終わりません。それは地域固有のものを保存し活用していくものだと感じています。私がいま働いているデジタルミュージアムはある意味バーチャルな世界も対象にしていますが、本音はなんといっても実物として保存をしていく事が大切な役割だと考えています。文化財の保存を前提としながら地域のアイデンティティを高めていく事が大切です。岡山では鬼ノ城を残して整備しているから大廻小廻山城は要らないという話が出てくるかもしれません。しかし、それぞれの個別性を活かした整備・活用こそが、これから時代で求められているものではないでしょうか。逆に言えば、大廻小廻山城は、鬼ノ城や鞠智城と同じ整備や活用の手法をとる必要はないのです。現代は高度な情報化社会であり、その悪い側面として、あらゆるもののが画一化に向かっています。そうすれば、人々の価値観まで画一化に陥る恐れがあります。普遍性とともに個別性を顧みることを怠ってはいけません。例えば、地名は個別性の最たるもので、正に地域の人々のアイデンティティです。その地名が、自治体の合併や住居表示の再編などで、いまだんじん消えていっています。止む終えない部分も多々あるのですが、地域固有の持り所が減っている。そうしたなか、鞠智城も鬼ノ城、大廻小廻山城もその地域が誇るべきものとして、もっともっと大きな存在になつていくと信じています。

永納山城跡

渡邊芳貴

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

永納山城跡は、愛媛県西条市と今治市との境に所在する古代山城である(図1)。現在のこの市境は、そのままで今治平野と道前平野との境とも一致し、山城は両平野を南北に分断する独立丘陵上に築城されている。また、瀬戸内海に隣接し、東の眼下には燧灘を見渡すことができる。

(2) 遺跡発見から史跡指定までの経緯

史書に名前の記載のない山城「永納山城」の発見は比較的新しく、昭和52年(1977)に当時の市文化財専門委員による遺跡分布調査の際に発見された。この背景には、発見の数年前に発生した山火事の影響で、山中の木が無くなっていたことも幸いしたと言われている。なお、この記録に残る発見以前に、一部の地元研究者によって城壁の一部が知られていたということであるが、永納山城が一般に認知されるのは、この昭和52年(1977)の発見以降のことであった。遺跡発見後、間もなく2度にわたる確認調査が実施され、この遺跡が全国的にも貴重な古代山城であることが明らかとなった。遺跡の重要性から、この時点で国史跡に申請するべきだとの声も聞かれたが、諸事情によりこの段階での指定申請は見送られた。指定申請の断念とともに、遺跡としての永納山城自体も一部の専門家や歴史愛好家を除いて、地元の人々さえ、その存在は忘れ去られていた。しかし、近年、各地で地域の文化や文化財を見直すといった活動が行なわれる中、当時の東予市においても、永納山城という貴重な文化財の存在を再認識し、将来的に保存・整備・活用していくという動きが起こった。そして、まずはそのスタートとして、国史跡の指定を目指すこととなり、平成14年(2002)度から16年(2004)度まで3ヶ年をかけ確認調査を実施した。調査成果については後述するが、発見当時の調査成果と今回の調査成果を基に平成17年(2005)2月に史跡指定申請を行い、同年7月に史跡に指定された。

(3) 遺跡の地形と規模(図2)

永納山城は、通称「永納山」と呼ばれる独立丘陵とその北西に位置する「医王山」という山塊を城域として取り込む。現在これらの二つの山は県道によって分断されているが、本来は谷を挟んで一連の山塊であったと考えられる。永納山の中央には南北に伸び、北に開口する谷が存在し、城壁はこの谷を取り囲む尾根外側の斜面を巡る。なお、城壁線の長さは、推定部分も含めて約2.5kmである。また、標高は山頂部で132.4mと、数値だけを見るとやや低く捉われがちであるが、海に隣接する山塊であり、標高がほぼそのままふもとからの比高差となるため、数値以上の高さを感じる城である。

2. 発掘調査成果

平成14年(2002)度から実施した調査は、史跡指定を目指した調査であった。指定申請のためには遺跡の範囲確定が必要であり、古代山城の場合は城壁線を確定していくことが、遺跡の範囲決定の重要な根拠となる。そこで、発掘調査も城壁部分の調査を主体としたものとなった。この

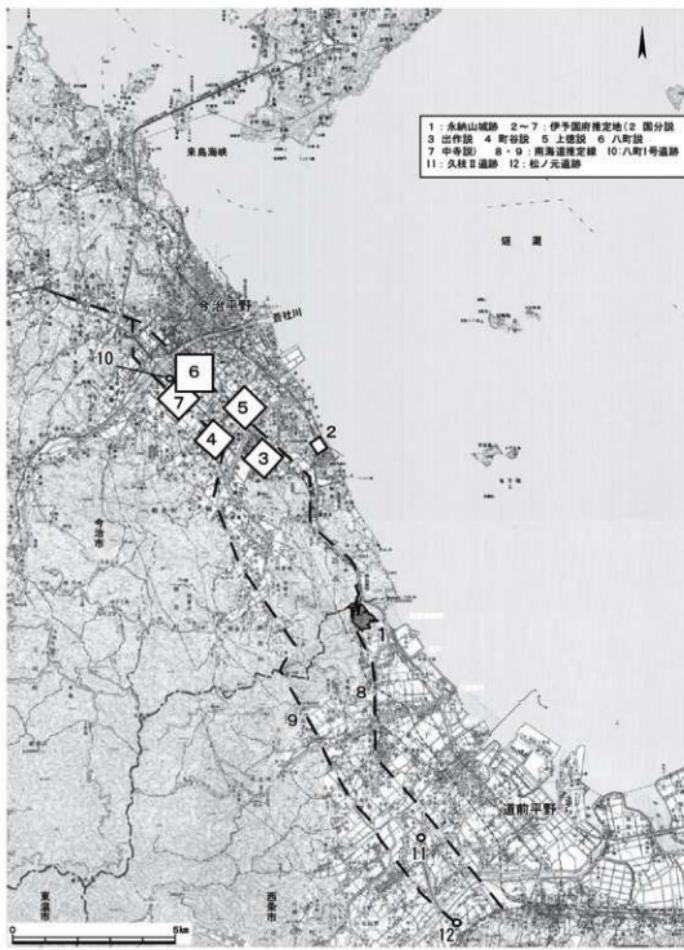


図1 永納山城跡位置図

ような調査成果に基づき、本章ではまず永納山城の城壁の特徴について述べ、次に出土遺物から窺える永納山城の時期について触れていくこととする。

(1) 城壁構造

永納山城の城壁構造は、I 人工的に造られた城壁とII 自然地形を利用した城壁の2つに大きく分類できる。さらに、Iに関しては、①列石と土塁による城壁と②石積みによる城壁に分

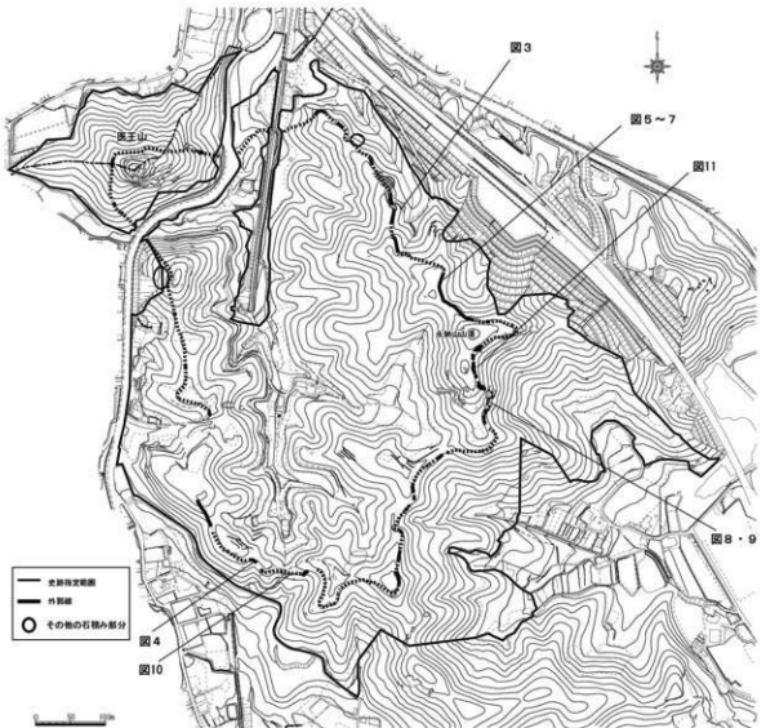


図2 永納山城跡全体図

類が可能である。以下にそれぞれについて、特徴を紹介していく。

I-①列石と土塁による城壁

永納山城の城壁の中で、最も一般的にみとめられる城壁構造である。城壁の基底部に一列に石が並べられ、その上に土塁が築かれる(図3)。

<列石>

- ・大きさ：幅30～100cm前後で、明瞭な規格性はみとめられないが、40～50cm程度のもののが比較的多い。
- ・材質：花崗岩の割石と思われるものが中心。
- ・並び方：直線的に並べられ、変換点は折れをなす(図4)。

<土塁>(図5～7)



図3 尾根に沿うように巡る城壁（北東部）

いわゆる版築構造をなし、花崗岩の風化土をかたくたたきしめながら積み上げられる。高さは、残存状況の良好な場所で約2m程度あることから、本来はもう少し高かったと考えられる。



図4 折れ構造をなす変換点（南西部）



図5 北東部土壁断面割り前



図6 北東部土壁断面割り後1

I-②石積みによる城壁(図8・9)

現在確認している石積みは3ヶ所あり、その中で比較的の状況が明らかかのが東部の石積みである。

東部石積みは、絶壁状に切り立つ岩盤の間を埋めるように幅5mの範囲に石が積まれ、現状で最大4段・高さ約1.2mに積まれているのが確認できる。裏込めの存在等詳細については、断面調査を行っていないため、不明である。

この他には、西部頂上付近・北東部の2ヶ所に石積みが見られるが、未調査のため詳細は不明である。



図7 北東部土壁断面割り後2



図8 東部石積み（東の河原津海岸から）



図9 東部石積み

(2) その他の遺構

これまでの調査は、城壁線の確定が主目的であったため、城壁線上に存在するであろう城門や水門も含め、内部施設の存否は明らかとなっていない。

(3) 出土遺物(図12・13)

既述のように永納山城は、史書に記載のない山城であることから、山城の年代の特定に有効な遺物の確認も調査目的の一つであった。

調査の結果、出土した遺物はわずかな量であったが、その中で平成14年(2002)度調査で出土した畿内系土師器の壺は、永納山城の年代を考察していく上で参考となる。土器の時期について

は、その特徴が畿内で出土するものとほぼ同一であることから、畿内の編年を参考すると、8世紀第2四半期頃にあたる。ここで、畿内との時期差を考慮する必要があるが、畿内系土師器は、地方においては役所等、都との直接的な関係の強い遺跡で確認される場合が多い。このことから、出土土器の年代に関しては、畿内における年代観と大きな開きはないものと考えられる。

では、この8世紀第2四半期という土器の年代は、永納山城の築城から廃城までのどの段階の時期を示すものであろうか。出土状況をみると、この畿内系土師器は、土星の崩落土の中に混入していた。土星自体は、版築によりかたく薄くたたきしめられていることから、もし土星構築時に混じっていたものと考えると、土器自体も粉々になる可能性があるのではないかだろうか。ところが、実際に出土した土器をみると破片にはなっているものの、表面の磨滅もみられず、比較的きれいな状態である。やや消極的な根拠であるが、このような点からこの土器は築城後に持ち込まれ、土星が崩落した際に混じりこんだ可能性が高いのではないかと判断できる。

したがって、遺物の示す8世紀第2四半期という年代は、永納山城の築城時期ではなく、完成後から廃城までの間の一地点を示しており、築城はそれ以前であったと考えられる。

いずれにせよ、1点の土器から城の年代に迫るには限界がある。詳細な年代を議論するためには、今後の調査を通じて更なる資料の蓄積を行うことと、それに基づく研究が課題となる。

3. 永納山城跡築城の背景と当時の様相

ここでは、永納山城築城の背景を探る手掛かりの一つとして、海上・陸上交通についてみていきたい。

まず、海上に目を向けると、中国・四国地方に所在する山城は、主に瀬戸内海を両岸から挟み込むような位置に築城されている（図14）。中国大陆あるいは朝鮮半島から船団が関門海峡を抜け、都に向かおうとすると、瀬戸内海は避けて通れないルートである。また、瀬戸内海は国内でも有数の多島海であるため、その航海ルートはある程度限られてくる。この際、山陽側のルートを通るのか、四国北岸のルートを通るのかという問題は残るもの、四国側のルートを通過する場合、最大の難所となるのが来島海峡である。永納山城は、この来島海峡を抜けた東側に位置しており、山頂からは来島海峡を一望することが可能である。一方で当地は、西から進行してくる船団からは死角となる場所である。古代山城築城の目的には諸説あるが、各山城が連動して国内防衛のために機能していたと想定するならば、見張り的な役割を果たす上では十分適した立地であったといえる。



図10 岩盤に接続する列石（南部）



図11 岩盤に接続する列石（東部）



図12 平成14年度出土畿内系土師器
実測図



図13 平成14年度出土畿内系土師器

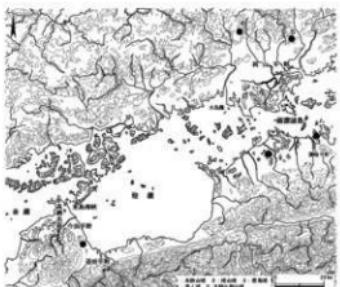


図14 濑戸内海の地形と山城分布図

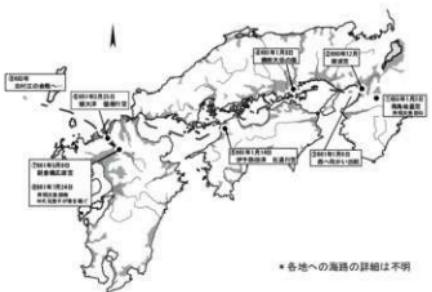


図15 白村江出兵に向かう齐明天皇のルート

なお、四国北岸ルートの重要性を示す資料としては、百济救援のために齐明天皇が九州へ向かったルートが参考となる(図15)。一行は660年12月に難波宮に向かい、661年1月6日に西へ出発し備前を経由して、同年1月14日に伊予に到着した。詳細な行程は明らかでないが、来島海峡を通過していた可能性は高い。また、石湯行宮で療養をするために特別にこのようなルートをとった可能性もないわけではないが、都から九州に向かう際の航路の一つとして、伊予を経由するルートというものが存在していたものと考えるのが妥当ではないだろうか。

続いて、陸地部の状況を見ていく。永納山城は、今治平野と道前平野の二つの平野の境に位置する(図1)。まず、今治平野は伊予国府が所在していたとされる平野であり、国府自体の場所は特定されていないが、古代伊予国の中心地であった。

一方、南部の道前平野は県下第二の規模を有する平野であり、平野北部には桑村郡・周敷郡の2郡が置かれており、古くから栄えた土地である。

この両平野を結ぶ陸上ルートが古代官道「南海道」であり、その推定路線の有力な候補が永納山城の西側ふもとを通過する。

このように永納山城は、海上・陸上両交通の要衝に位置する。この点が、当地に永納山城の築かれた要因の一つであったと考えられる。

また、いかに地理的な好条件があったとしても、山城築城を可能とさせるには、地元にある程度の経済的基盤や労働力が必要であったんだろう。

さらに、文献史学の研究からは、大宰・総領と古代山城の関係の深さが指摘され、永納山城についても伊予総領との関連について論じられている。

これらに対して、これまで考古学的な情報から具体的に論じられることは少なかったが、近年の発掘調査成果により、永納山城周辺の状況も徐々に明らかになりつつある。今後は、調査成果に基づき、当時の様相を明らかにしていく必要がある。

4. おわりに～永納山城のこれから～

最後に、永納山城跡の今後について簡単に述べ、まとめとしたい。

永納山城跡は、平成17年(2005)に国史跡に指定されたばかりの史跡であり、保存・整備・活用に向けてのスタートはまさにこれからという段階にある。

現在は、今後の方向性を示す保存管理計画の策定中であり、この保存管理計画を土台として、より具体的な保存・整備・活用の検討を行い、実際の事業に入していく予定である。

一方で、遺跡自体の内容については、これまで述べてきたように現在までの発掘調査では城壁構造の一端が明らかとなっているのみで、城としての全体像はほんやりとしたものである。今後はまず、内部施設・城門・水門といった遺構の存否確認調査を実施し、その結果に基づいて遺跡の内容を解明していく必要がある。また調査においては、城の時期決定の手掛かりとなる遺物の確認も同様に重要である。

このように現時点では、保存・整備・活用の面、遺跡の内容確認の面、それぞれにおいて多くの課題が残されている。今後、これらの課題を一つ一つ解決しながら、少し時間がかかるとは思われるが、地域の貴重な財産として愛される史跡となるよう取り組んでいきたい。

本稿は、平成18年（2006）7月9日に発表した内容を加除修正して、文語体に改めたものである。したがって、調査成果や史跡の状況等に関しては、発表当時のものである。

引用・参考文献

- 狩野 久 2005 「山城と大宰・總領と「道」制」『永納山城跡－平成14年度～16年度調査報告書－』
白石成二 2005 「古代伊予国における永納山城」『永納山城跡－平成14年度～16年度調査報告書－』
東予市教育委員会編 1980 『永納山城遺跡調査報告書』
西条市教育委員会編 2005 『永納山城跡－平成14年度～16年度調査報告書－』

・対談・・・・・

(大田) お話を伺っている中で、石積みによる城壁の中に自然地形を利用した城壁というのがありました。近世城でもそうですが中世城でも石垣を岩盤にくっつけるんですね。ところが今日、スライドを見せて頂きまして改めて「えっ?」と思ったのは、それが離れている部分があるんです。近世城と中世城の場合には落とし込みをやりまして連続するんですが、渡邊さんこれはどういうふうにお考えですか。

(渡邊) そうですね。これに関しましては私も調査して歯抜け状態だなというのを感じました。ただ今館長さんがおっしゃられたように抜けている、これは当初から無かったのか、あるいは全体ちょっと石が前のめりになっていますけれども長い年月を経る間に、この間を埋めていたのが転げていった可能性もあるのかなとは思ったりしております。永納山城跡の列石は、ほとんど基本的に1段なんですよ。それがここは2段になってますよね。そういうのはひょっとしたら岩に付く部分、ゴールの所で、計算がうまく合わずに調整できないで積んでいる可能性もあったりすると思うんです。

(大田) 版築の断面も見せてもらいまして、当たり前の事なんですけれども、列石というのは、これは結局、版築土塁の一番基底部にあたりますので、石垣でいうならば根石だというふうに思いました。その隙間部分というのが結局渡邊さんのお話では、盛土で平坦面を加工して調整をしているという事なので、列石、列石というふうにずっと並んでいる不思議な石の並び具合というのは結論的には、版築土塁の根石が見えているだけだと。根石が見えているような感じでありますから、これは根石なので実際には石を積めば石垣になると、これを版築に変えていくだけだというふうな感じがしますけど、それはどう思われますか。

(渡邊) 列石に関しましては今言われた根石の役割と、やはり見せる意味もある程度あると思います。ただ、基本的な構造上のお話でしたら、やはり根石的な意味が強いのかなと思うんですよ。と言いますのも、今お話がありましたように石を据えるための盛土をします。盛土自体は非常に柔らかいので、柔らかい上に土塁を積んでも基礎が柔らかかったらどんどん崩れていきますから、ある程度基礎はしっかりしたものが必要だと思うんです。それに関しましては、特に永納山城跡なんか非常に奥行が長く薄っぺらな石を積んで並べていますから、根石としての役割が強かったのかなとは感じます。

(大田) 基礎部の加工なんですけれども、盛土で平坦面というのは非常にやはり構造上弱いと思うんです。ですから、やはりここに柱を立ててカバーするんでしょうね。そうしなければ弱いですもんね。という事は渡邊さんお聞きしたいんですけど、それでは根石を持ってこなくてずっと版築を盛ってきて柱で止めてもいいと思うんですけど。

(渡邊) それがやっぱり先程言いましたように、構造的な意味合いだけではなくて列石を並べるという事に、古代山城としての一つの基準というか規定みたいなのがあったのかと思うんです。九州の方は切石を使っていたり、瀬戸内海は割石だと、そういう細かい違いはあるんですね、大きさなんかも。ただ古代山城を造る上で基本的事項の一つに列石を並べるという事がひょっとしたらあって、ある場所では形骸化してしまって

いても、とりあえず石は並べておこうというような発想もあったんじゃないのかなと思っています。

(大田) 鞠智城の場合にも建物が3～4回くらい建て直しをされていますけれども、同じ場所に同じ様な感じで建てているんですね、米倉あたりを。少し場所をずらしても良いんじゃないかなと思うんだけれども、やはりセオリーがあって造っていたんですかね。

(渡邊) そうだと思うんですよね。やはりそれが国家的事業なんかがというところもあったりして、各地の豪族が好き勝手に造ったものじゃなくて、ある程度こういう規制を持って造られた結果のかなとは思います。

(大田) ところで土壘の列石は、当時は版築土に覆われていたのでしょうか。

(渡邊) 最近の各地の調査だったら、列石を全面覆うような形で土壘が発見されている例が多いと思うんですよ。この永納山も発見当時、昭和50年代に調査されました西側部分に閑しましては一部列石の前を土壘が覆っていたという報告があります。ただ今回の再調査において、確認した場所では全くなかったんですが、昔の調査等でひょっとしたら列石の面出しがされてしまって前面の土壘がなくなってしまった可能性もあります。

(大田) だから列石が版築土壘の基礎部であるというような、根石であるというような解釈をすれば、根石というのは元々近世城の石垣でも埋め込んでしまうんですね、見えないんですね。実際に見てない。だけども後になって根石部分が露呈していくってずっと並んだから異様な感じで列石というふうに受け取るんだけれども、實際には版築土壘の根石部分だというふうに解釈すればそんなに異様な光景じゃないんですね。

(渡邊) 確かにそうだと思います。ただその時に永納山城跡の場合は扁平な石だからよく分かりやすいんですけども、逆にお伺いしたいのは九州なんかのいわゆる神籠石ですね、あれなんか確かに高く列石を並べますよね。ああいう場合もこれと同じ様な根石として理解が可能なのかどうかというのは、私もなかなか疑問に思ったりもするんですがどうなんでしょうか。

(大田) おっしゃった様にちょっと小振りですよね。永納山城跡のものは40cm前後とおっしゃいましたね。だからそういう面で根石の性格的なものも違うかもしれませんね。それもやはり地域によっての違いがあるでしょうから見極める必要があるでしょうね。

(大田) 次に永納山の築城時期とも絡んで参りますけれども、土壘から出た畿内系の土師器によって、その年代が西暦720年～750年代頃というふうな筋書きをおっしゃいましたよね。それでその土器が築城時期に関わってくるということで、果たして土壘が造られた時に混入したのか、崩壊した時に混入したのかという事では大きな問題ですが、渡邊さんは講演の中で崩れた時に混入したのだとおっしゃいましたけれども、出土状況はいかがだったんでしょうか。

(渡邊) 出土状況に関しましては、土壘の残りの硬い土がありますよね、その上に崩れた土が

載っているんですが、ちょうど崩れて列石の上くらいに土星の崩落土がいっぱい溜まっています。その中に混じり込むような状況でそのような土器が出ております。実際のところ、私もこの土器1点から時期を決めるのは難しいなとは実感しております。ただやはり難しいながらもある程度、永納山、全く名前の出てないお城ですから、年代の手掛かりになるものは積極的に利用していきたいなというところがあります。年代に関しては、本当に今後の資料の増加がやはり一番だと思っています。

(大田) お書きになっている中で畿内系土師器の坏だと書いていらっしゃいますね。そして、時期を明確に8世紀の第2四半期というふうに書いていらっしゃいますけれども、四国の西条辺りというのは土師器の編年というのではなくて進んでいますか。

(渡邊) 四国に関しては、土師器の編年はほとんど進んでおりませんね。これも近畿の編年を参考にさせてもらっているんですけども、近畿の方はご存知のとおり平城京があったりとか藤原京があったりします。本当に平城京の時代でも平城の1期というもののから4期、5期くらいまで細かく年代分類されております。そういうのを参考にしながら、細かい25年単位くらいの土器の年代が決められておりますので、それらを基にした年代ですね。畿内の作り方と非常によく似ている、胎土というか土の質はちょっと違うという事を言われたんですけども、奈良の研究者の方に。それ以外の作りは本当に類似しているという事を言われていましたので、そういう点から、近畿で使われている年代と違ひがないのかなという事で、近畿の編年と土器の年代を当てはめております。

(大田) この講座を通じまして神龍石系山城等が意外と新しいのではないかと、白村江の戦いの663年以降じゃないかというような話も無きにしもあらずというような状態になっていますけれども。今の土師器の年代からすると720~750年頃に土星が壊れたと考えられるので、築城時期はもう少し遡るとかんがえてもよいですか。

(渡邊) これは壊れた時に混じったものと考えたら、壊れた時が早くても8世紀の半ば以降ですよね。少なくともそれより前に築かれているという事になったら、通常言われていますような白村江の戦い前後くらいと一致する可能性が高いのかなとは思っております。それがどれくらいの差をもっているのかというのには分からぬんですけども、ただ矛盾する年代ではないのかなとは思っております。

(大田) ところで、古代山城が出てくる時期と巨石墳の築造時期が重なる部分があるため、大和政権が古代山城を造る時に地方の豪族を動かしているというふうな話がありますが、そうすると永納山城跡でも古墳を造ったような豪族の勢力範囲にあるというか、それはやはり背後にいると考えていいんですか。

(渡邊) 私はそう考えていますので、やはり国家的事業でお城を造るにしても人員の配置なんかに関しましたら、みんな近畿から一気に運んでこられるかと言った時に、やはりある程度地元に勢力が、人々の経済力がないと造る事が出来ないと思うんですよ。ですから、やはりこの古墳群とか営んでいた人々の子孫になるのかもしれませんけども、そういう人達が関わっているんじゃないかなとは思っております。特に土星の造り方

もちよこちよこ違いますからね、特徴があつたり。そういうのが人々の違いにも反映してくるのかなと思っています。

(大田) 本当にこれだけの古代山城が有事の際の緊急的なものとして同時に造られたのでしょうか。

(渡邊) こういう城を各地に造るというのは、緊急のためというのは名目上はあると思うんです。ただ将来的には近畿の方が地方を支配とか、そういう拠点とした、そういう可能性もあったのかなとは思うんですよね。実際に白村江の戦いが終わって攻められる危険ができてお城を造る時がありますけど、数年後には攻められる可能性もなくなつて新羅の方から使いが来たりとか、また国交も回復しますよね。そういうのを見たら造る当初のきっかけはそれがあったと思うんですよね。ただそれがだんだん地方を支配とか、そういうのに関わってくるお城に様相が変わっていった可能性もあるのかなとは思っています。

(大田) それと四国の方の立場としてお聞きしたいのは、古代山城というのは対外政策しか考えられないか、対外政策というかいわゆる有事の際の城塞というふうに考えざるをえないという意見もありますが、色々な方に話を聞くとそうでもない人もいるんですね。渡邊さんどう思われますか。

(渡邊) 当初はそれが強かったと思っております。ただ先程言いましたようにそれがどんどん性格が変化していくというのは充分考えられると思うんです。だから永納山城跡も先程のお話の時言いましたけど、讃岐と伊予両方見えるというか中心部に位置しますよね。それはやっぱり対外的な事だけじゃなくて造る際に、さっさと繰り返しになりますけども、地方を支配するのも視野に入れた上でそういう拠点的な意味を持っているのかなと思うんです。逆に地方の豪族が自分の意図をもって造ったものとは言えないとは思うんです。やっぱりそういう対外か対内か、対外政策か対内支配、両方の意味もあると思うんですけど、築城にあたっては都の意図が強かったのかなとは思います。

(大田) ところで、永納山城跡の今後の将来像についてですが、平成17年に史跡、国指定になりましたよね。今後財政がどんどん冷え込んでいきそうですが、今後整備を進めていく計画ですか。

(渡邊) 史跡指定されて重要なものであるという事を国が認めてくれたわけですから、将来的にはきちんと守っていく義務があると思うんですよ、行政には。ただ実際問題としまして、これまた永納山城跡には、民地が多かったりもしますので、まず調査で内容を解明する事と、ある程度の整備ができる程の公有化も必要になってくると思うんです。保存管理の方針も立てた上で、基礎を作つて整備に移つていく必要があるかなと思っています。

(大田) 神籠石系山城の具体的な整備のイメージというのはありますか。どのように整備をしたいというか。

(渡邊) 具体的なイメージといいますと、永納山城跡に限りましては今のところ建物も見つかっていませんから、なかなか復元とかそういう大きなイメージはないんですよ。ただ土壘は、ある程度復元するかどうかは別にしましても、土壘の状況なんかは現地で確認できるようにしていきたいと思います。あとはやはり全体的にみると、どうしても歴史に興味がある方の数は限られると思うんです。もちろんそれを宣伝して普及させていくのは私共の役目だと思うんですが、それ以外にああいう非常に景観も良い所ですから、ビューポイントとしての利用や自然に親しむ場所とかウォーキングですね。そういうものを活用しなければならない。なかなか急に歩くとしんどいんですけど、色々なコースなんかも考えながら体力や性別、年齢なんかも考慮して色々な人が歩いたりできる場所、憩いの場みたいな所、総合的に活用できたらいいかなと思うんです。ただそれもあんまり機械的にいじくりまわすんじゃなくて、今あるものを利用しながら、というふうにできたらいいかなと思っています。

(大田) しかし、見せる所が難しいんですよね。列石ですものね。

(渡邊) そうですね、実際先日歩いて頂いて、歩いているルートというのはほとんど尾根のてっぺんなんですよね。知らずに歩いていたら、列石や土壘がある事も気付かずに過ぎてしまうという所ですね。だから部分的には列石を見るように、列石の前を歩くようなルートも考えていく必要があると思うんです。ただ非常に傾斜が急なので、安全面とか色々課題が多いですね。

(大田) 古代山城の史跡指定が最近ずいぶんと進んできましたが、それらの整備を今後どのようにしていくのか、課題は多いですよね。

(渡邊) そうですね。本当に漠然としたイメージをどう形にしていくかですよね。私共は普段調査して山をいっぱい歩いていますが、その観点だけだったらいけないと思うんです。そこで重要なのが地元の方々と思うんです。地元の方に実際山を歩いてもらったりして何処が危険であるとか、年齢別に歩いてもらいお年寄りの方だったらここがきついとか色々アンケートとか取ってみるのも1つの手かなとも思っているんですよ。それでそれを全部活かせるかは分からないですけれども、一般の人が歩いてみてどう思うかとか、どうして欲しいとかの意見なんかも参考にしながらやっていかないと。どうしても調査する人間の目だけで見たら、本当に自己満足になってしまい可能性がありますので、これからは地元住民も取り込みながら一緒にやっていきたいなと思っています。

播磨城山城跡

義則敏彦

1. 城山の概観

城山城は、たつの市新宮町馬立・下野田とたつの市揖西町中垣内に位置する山城で、最高所の標高は、458m である。急峻な東斜面の新宮町側では、麓の標高が約50m であるので、東斜面側では比高差が約400m あることになる。古代山城の中では非常に比高差のある山城のひとつに数えられる。

城山については、いろんな漢字が当てられており、国土地理院の地図には「亀山」と記載され、中世の文献には「木山」という字も登場する。城山・亀山・木山と書いて、いずれも「きのやま」と読んでいるが、この城=きと呼ぶことには非常に意味がある。古代朝鮮語では、城と書いて、「き」と呼んでおり、その影響かと思われるが、古代山城には、基肆城とか鬼ノ城とか、「き」という言葉が非常に多く使われている。このようなことから、当山城も遺跡名として表記する場合は、「城山城」としている。

城山城は、西方の岡山県側から伸びる準平原状の地形である吉備高原の東端に位置している。吉備高原には、山上にもかかわらず、今でも多くの集落が点在している。また城山城は、海岸まで約13km の揖保川中流域に位置し、やや内陸にあるが、山上からは、天気が良ければ、淡路島・家島・小豆島などの瀬戸内の島々が望める。また、播磨国府のあった姫路市からは、約17km の距離にあり、山上からは、姫路方面も望める。

城山城へのアクセスは、城内を南北に近畿自然歩道が通過しており、ハイキングコースとして整備されている。最近では、多くのハイカーが利用しており、遠方からもよく問い合わせがある。なお、熊本から来られる場合は、新幹線を利用して姫路まで約4時間ぐらいで、姫路から姫新線に乗り継ぎ、播磨新宮駅まで約40分かかる。播磨新宮駅から城山城登山口まで、タクシーで約10分ほどで、そこから徒歩で約1時間半ぐらいで城山城に到着する。片道5~6時間であるので、無理をすればなんとか熊本から日帰りも可能な距離である。

2. 城山城発見の経緯

1970年代頃から、大阪府・奈良県で高安城、岡山県で鬼ノ城・大廻小廻山城などの古代山城が発見され、各地にまだまだ眠っている古代山城があるということがだんだんと分かってきた。古代山城に関しては、文献に記載のあるものとないものがあるが、主に北部九州と瀬戸内沿岸に分布し、瀬戸内沿岸では、旧国単位に1~2の分布状況にある。しかし、岡山県から高安城のある大阪府・奈良県までの間の播磨・揖津・淡路には、なぜか古代山城がない状況にあった。この点に疑問を持たれた志水豊章氏(当時、『龍野市史』編集担当)は、古代朝鮮語の城に由来する「き」のつく山城として城山城に着目し、専門家らとともに昭和52年(1977)に初めて古代山城発見を目的に踏査を行ったが、残念ながら不発に終わった。その後、嘉吉の乱で城山城に滅んだ赤松氏を供養するため、昭和55年(1980)に城山城に登山された「赤松氏興聖寺集いの会」の方々が、山中で道に迷われ、大きな礎石列を発見された。このことについて、教育委員会へ連絡があり、城山城は嘉吉の乱で落城した中世山城として有名であることから、昭和57~58年(1982

～83)に繩張り図の作成を目的に現地踏査が行われた。この時には、多数の郭群が発見され、大規模な中世城郭の遺構が見つかったと大きく新聞で取り上げられた。しかし、採取遺物の中には、多くの中世の遺物に混じって、なぜか奈良時代頃の土器も混じっており、もしかすると古代の山城もあったのではないかと思われるようになつたが、確実な遺構を見つけることはできなかつた。

昭和60年(1985)になり、私が役所(旧新宮町役場)に入り、文化財担当となり、「赤松氏興聖寺集いの会」の方々から、城山城登山のお誘いを受け、昭和61年(1986)12月に一緒に登らせて顶いたことになった。その時に、せっかく城山城に来たので、少し周辺も歩いて見てみようということになり、茂みを搔き分け谷を下つてみると、結構大きな石材を用いた石垣が現れた。中世の石垣にしては、石材がかなり大きいので、これはもしかすると古代山城のものではないかと直感的に思った(これが後に石垣dとよばれることになった古代山城の遺構である)。このことがきっかけとなり、週に1回位のペースで城山城へ踏査し、昭和62年(1987)1月に凹の字に似た石造物(門の築石)を城山城の西斜面より発見した。ただ、発見当初は、古代山城に関する知識が乏しく、この凹の字に似た石造物が何であるか分からず、飛鳥地方にある鬼の俎・雪隠のような古墳に関係するような石造物ではとも思い、県下の文化財担当者にも写真を見せ、類例を訊ねたが、誰も分からなかつた。そこで、石垣の専門家である北垣聰一郎氏に写真を送付したところ、これと同じものが山口県の古代山城の「石城山神龍石」にあり、睿石と呼ばれる門の礎石であることをご教示いただいた。これには、大変驚き、まだ他にも古代山城の遺構があるのではないかと思い、さらに踏査を繰り返したところ、昭和62年(1987)2月に城山城の西斜面より、全長約40m、高さ約3mの大規模な石垣(後に石垣c)が見つかった。普通の石垣であれば、谷を塞いでいれば、砂防用の石垣と考えるが、発見した石垣は谷から山腹を駆け上がるよう石垣が延びており、これも古代山城のものと推測した。なお、同年4月には城山城より少し離れた北西の唐猫谷より、柱穴をもつ礎石も発見した。

以上のような発見から、城山城が古代山城であることが、ほぼ確実となつた。

3. 城山城の歴史と遺構の概要

城山城のある山上には、城山城ができる以前から人が住んでいた痕跡がある。城山城北西の龜の池や寺床池周辺では、弥生土器や石器などが採取されており、弥生時代の高地性集落が山上に存在していたようである。

古墳時代には、城山城北方の市野保集落の北側尾根上に古墳時代前期と思われる前方後円墳(市野保裏山1号墳)が築かれているが、今のところ未調査である。古墳時代後期には、城山城東斜面の山麓部一帯には、数多くの横穴式石室を主体とする古墳群が築かれており、特に市野保集落西方の山麓には約80基からなる大規模な群集墳(市野保古墳群)が存在している。また、城山城直下にある馬立の山麓には、ドーム型の石室をもつ姥塚古墳(県指定史跡)や揖保川流域最大の方墳(一辺25m)であるはつちょう塚7号墳(市指定史跡)などがある。

城山城に関する記事は、当時の文献には登場しないが、当地域のことについてには、『日本書紀』や『播磨國風土記』に記事があり、安閑天皇2年(534)に越部屯倉^{みやけ}が当地域に設置されたことが記載されている。ちなみに屯倉とは、天皇の直轄地で、播磨には、8ヶ所の屯倉設置記事があり、越部屯倉は、但馬国三宅から来た人が造ったと記されている。なお、当時の記録ではないが、城山城の西方にある井関三神社(たつの市揖西町中垣内)の由緒書には、崇神天皇2年に城山の山中に玉の如き光る場所があり、そこに建立した神社が井関三神社の始まりであるという記述が

ある。城山については、神秘的な山として昔から地元では考えられていたのかもしれない。

次に古代山城の遺構であるが、現状では門の築石・石壘・礎石建物跡・土段状遺構などが確認されている。これらの遺構を結ぶと、城山城は周囲約1.3kmの規模となる。

門の築石は、当石造物発見後、地元の聞き取り調査でわかった名称で、当石造物は城門を構成する唐居敷部分であることが明らかになった。この門の築石2点の間には、段差をもつ石造物が1点組み合わさり、扉の開閉を止める役割を担っていた。岡山県総社市の鬼ノ城でも同様の遺構が発掘調査で確認され、原寸大で復元されており、壮大な規模の城門が山上に存在していたことが明らかになっている。なお、方形の柱を伴う古代山城の唐居敷は、不思議なことに城山城(兵庫県)、鬼ノ城(岡山県)^{城山城}(香川県)、石城山神籠石(山口県)の瀬戸内沿岸部でのみ確認されている。背景には、これら古代山城を統括するような組織(例えば吉備の大宰など)の存在が窺える。

次に石壘であるが、城山城では今のところ、a～dの石壘の存在を指摘しているが、bについては、もう少し検討の必要があるので、それ以外について紹介する。石壘aは、城山城西斜面に位置する石壘で、上部を中世城郭建築の際に破壊されており、かろうじて基底部が残存している。石壘cは、前述したが、幅約40m、高さ約3mの石壘で、城山城最大の石壘となる。石壘dは、城山城北西の谷部に築かれた石壘で、大半が崩

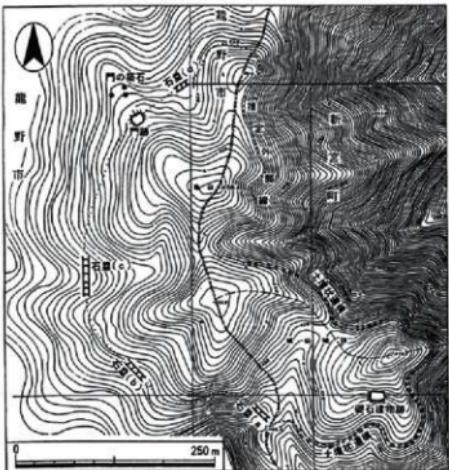


図1 播磨城山城跡遺構配図

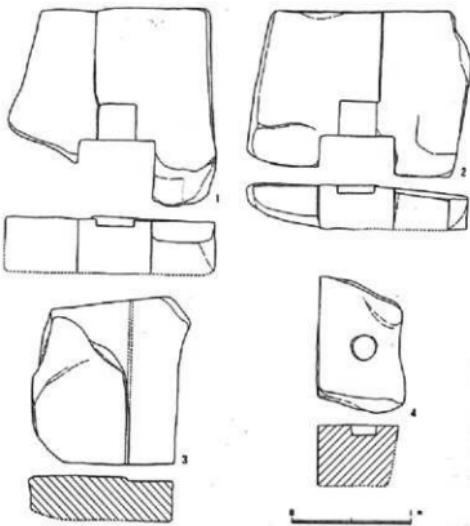


図2 播磨城山城跡の門礎石



写真1 門の築石



写真2 石壘c

た、8世紀後半に姫路市の峰相山の窯でつくられたことの分かる須恵器も採取されている。須恵器・土師器とも、大体7世紀後半～8世紀後半頃の時期のものが採取されている。

次に城山城の周辺であるが、古代においては、数多くの寺院が建立されている。東麓には、越部庵寺・奥村庵寺、西麓には、小神庵寺・中垣内庵寺などである。城山城が位置する揖保郡は、播磨の中では最も多く古代寺院が建立された郡で、渡来系氏族の記事も『播磨国風土記』の中には多数あり、古くから仏教文化が盛んな地域であった。また、城山城の周辺には、東に美作道、南に山陽道が走っており、美作道には越部駅家（馬5匹）、山陽道には布勢駅家（馬20匹）が置かれていた。ちなみに布勢駅家（小丸遺跡）は、国内で初めて駅家の遺構が確認された遺跡である。城山城の周辺には、平木・日山・段之上などの古代山城と関連のあるような地名も存在する。

平木は、城山城の西麓にある地名で、木=城と考えるならば、平城という意味の可能性もある。日山は、城山城の南方にある地名で、古代山陽道とも近接する場所にあり、烽火を置いた場所を示している可能性がある。段之上は、城山城の東麓にある地名で、軍團との関連が気になるところである。

城山城の西麓には、小水城状の遺構の可能性のある場所がある。その場所は、井関三神社から東に一直線に伸びる参道で、平木のある谷を塞ぐような形になる。岡山県の鬼ノ城でも小水城状の遺構が見つかっているので、これについても可能性があるのではと考えている。

壊し、わずかに南端部に数段の石積みを残すのみである。今のところ、石壘については、城山城の西斜面のみで確認されている。

次に礎石建物跡であるが、城山城南斜面において、4×7間のものを確認している。礎石には、大型の石材を用い、古代山城のものの可能性が高いと思われるが、中世の文献に城山城に本堂を築くという記事があり、中世のもの、または中世に再利用したなどの可能性も残る。いずれにしても、城山城には非常に大規模な建物があったことは間違いない。

次に土段状遺構であるが、城山城の推定外郭線上において、部分的に確認しており、斜面をL字状にカットして犬走り状の道を造っている。讃岐の城山城では、同様の遺構を車道と呼んでいる。

次に採取した遺物であるが、須恵器と土師器がある。須恵器の中には、蓋のつまみを打ち欠いて使った転用硯があり、石壘d付近で採取している。また、石壘d付近で採取している。また、石壘d付近で採取している。

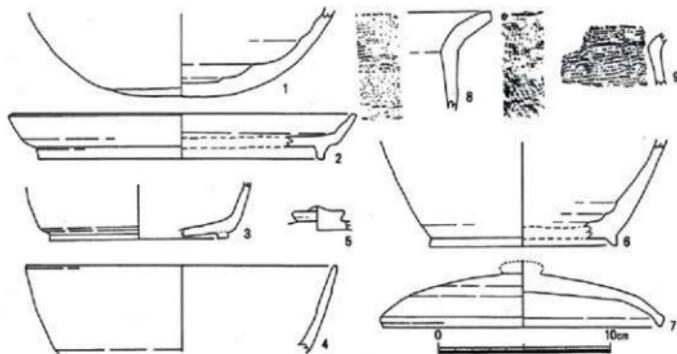


図3 播磨城山城跡採集遺物

『播磨国風土記』によると、城山城のある場所は、「越部里」と「出水里」の境界に位置する。両里については、城山の水をめぐって神様が水争いをして、城山城西麓の出水里の神様が勝利したという記事が『播磨国風土記』にある。城山城北西の山上には、山中の水を出水里へ流そうとした堤の石積も現存している。これらの石積は、古代のものである可能性もあり、城山城の石塁の石積との比較も今後の検討課題である。なお、『播磨国風土記』には、「多駄里」の城卒礼山に百済人が城を築いたという記事があるので、今後「多駄里」のある市川中流域でも、古代山城が発見される可能性がある。

次に平安時代以降の城山城について紹介する。中世に書かれた播磨地方の地誌で『峯相記』という文献があり、城山に関する記載がある。それによると、10世紀中頃の天徳年中に群盜が、城山に城を築くという記事があり、古代山城の遺構を再利用した可能性も考えられる。また、城山城南方の平位(たつの市掛西町)の伝承ではあるが、四天王で有名な平井保昌が城山の鬼退治を行ったという言い伝えがあり、平位には保昌塚がある。古代山城の鬼ノ城にも鬼退治の伝承があり、興味深い話である。

鎌倉時代になると、城山には山岳寺院があったようである。これは、城山城内よりこの頃の備前焼が採取されていることや、サンマイ谷・觀音屋敷などの地名、板碑・五輪塔・供養塔などの石造物が残っていることなどから考えられる。また、近世の寺院縁起にも城山で修行したなどの記事もあり、山岳寺院が存在した可能性をうかがわせている。

次に室町時代になると、播磨國守護であった赤松氏が、城山に山城を築城する。中世城郭の築城に関する資料は大変少ないが、幸い城山城に関しては、「東寺百合文書」などから築城の過程がある程度判明している。それによると、城山城の築城は文和元年(1352)頃から始まり、明徳元年(1390)頃にはほぼ完成していたようである。この時に、古代山城の遺構は大きく改変されたと推測される。その後、嘉吉元年(1441)に嘉吉の乱で城山城は落城するが、天文7年(1538)に出雲から播磨攻めにきた尼子氏が城山城に陣をはり、天文9年(1540)に尼子氏は出雲へ撤退する。これ以降、城山城は城として使われることはなかった。

現存する城山城の中世城郭の遺構としては、郭・堀切・横堀・堅堀・土塁・礎石建物・石垣・井戸・庭園状の遺構などがあり、城内には矢竹が群生している場所もある。

以上のように、城山城は、古代山城、群盗の城、山岳寺院、赤松氏の城、尼子氏の城などの諸要素が混在し、発掘調査が行われていない現状では、明確に各遺構がいつの時期のものであるかというのは、非常に難しい状況である。しかし、文化庁では、城山城の遺構が非常に重要なものであるという認識をいただいており、現在城山城は国指定史跡の候補物件の一つに挙げられている。国指定史跡に向けては、数々の難問が待ち構えているが、今後取り組んでいかなければならない大きな課題と考えている。

引用・参考文献

新宮町教育委員会1988『城山城』

たつの市2005『播磨 新宮町史』

・対談・・・・・

(大田) 私たちは古代山城というのは、馬蹄形をした山の尾根、その瘦せ馬の背中のライン、折れ線をぐるりと歩いて一周が4～5km程度というイメージを持っています。そして谷間には石垣を設けて水を流す水門があって、その尾根筋にはいわゆる米倉などいろいろな建物があるというようなイメージです。鞠智城跡も他の古代山城と比べて山の地形は違いますが、少なくとも土垣線と崖線で囲み込んで範囲を取っています。ところで、この播磨城山城跡は嘉吉の乱で有名な赤松満祐の居城であった中世山城と古代山城が同じ場所にあり、まさに中世山城そのものが古代山城の繩張りということになりますね。

(義則) そうですね。中世山城と古代山城がほほかぶっていますね。

(大田) ではもう一度、たつの市で考えていらっしゃる古代山城の線引きというものを教えていただければと思います。

(義則) それでは門の築石を基点に説明します。まず、門の築石があった所には一つ城門があつたことは間違いないと思います。上の平坦面です。そこからずっと横に移動します。途中おそらく土砂崩れを起こしていると思います。江戸時代の絵図を見ますと城山は禿山ですので、ズルズルと土砂崩れを起こしたことで遺構も無くなつたのではないかと思います。それから石垣の方へ繋がって来て石垣cになります。そしてさらに、尾根を横移動して繋がっていくと思います。

(大田) 横移動をする時のその山腹には遺構はあるのですか。

(義則) 谷に石垣の残骸のようなものが一つあるのですが、これは個人的にはあまり積極的に取り上げたくはありません。遺構かどうか意見が分かれています。

(大田) 斜面を削ったようなものはないのですね。

(義則) はい。それに関してはもしかすると元々ないかも知れません。自然地形がとても急斜面で造らなくても防御できるため略している可能性はあります。そこにかろうじて、中世山城築城により大分破壊されていますけれども、石垣のaと呼ばれている古代の石列が残っています。そこから繋がって谷になるのですが、ここに推定ですけれども門があったのではないかと考えています。そして、そこから上がって平坦な道が土段状の遺構になります。

(大田) 土段というのは犬走りになりますか。

(義則) 今それを外郭ラインと考えているのですが、ずっと延びて来た所に4間×7間の礎石建物があり、その所に土段状の遺構がつながっています。それが今度は回り込んで来るのですが、そこで大規模な土砂崩れを起こしています。ここには中世の道も来ているのですけれども、これも土砂崩れで全部無くなっています。次に北斜面に行き

ますと、ここは急な崖ですので多分遺構はないだろうと思っています。犬走り状の遺構がずっと続く箇所についても、土段状の遺構と考えております。これも土砂崩れがあつたりして何ヶ所か崩れていますけれども、回り込んで来た痩せ尾根の一段下の部分、ここに傾斜変換する場所があるのですが、それを取り込んで山頂の下へ出てきて回り込む。私の推定ラインとしては、そこから回って来て石壘のdに取り付いて、それからまた横移動して最初に戻るというのを考えています。そして、石壘dが回ってきたところに実は傾斜変換があります。これが多分取り込めるだろうと想定しています。石壘d付近からは転用砦が採集されています。その谷から戻ってきて門の築石へと出ます。他に奈良時代の遺物が出るのは山頂部分です。ここは望楼の可能性もあります。他に遺物がよく出る谷間部分には兵舎のようなものがあったのではないかという推定をしています。

(大田) そうしますと、推定ラインを廻ると延長線上何kmになるのですか。

(義則) およそ周囲1.3kmくらいと考えております。

(大田) 小さいですよね。

(義則) 鞠智城跡に比べるとかなり小さいです。

(大田) 鞠智城跡は大体4km弱だから、4分の1もないでしょうね。ところで、私の古代山城の認識というのは、山の痩せ馬のような土星線がぐるりと廻って、その開口する部分にすり鉢状の水門があるようなイメージなのですが、中世山城の場合は折れ線で切っていくのですよね。切っていくて独立区域を造っていきます。先ほど土段というふうに表現されましたけれども、私達はこれを帯状の削平地とか犬走りと呼んでいますが、こういうふうな削平地はどうも中世っぽい感じがして、中世と古代の遺構が何かごっちゃになっているような感じがしないでもないのですが。

(義則) おっしゃるとおり中世の遺構と古代の遺構の見分けは非常に難しいです。人によっていろいろ意見が分かれるところではあるのですが。

(大田) 今お話を聞きますと、鞠智城跡が崖線と痩せ馬の背中の尾根筋ということを組み合わせて城の線引きをやっていますので、ここもやはりそういう類のものになりますかね。いわゆる急斜面と言うか山腹を利用した線引きと言いますか。

(義則) そうですね。今おっしゃったように自然地形を上手く取り込みながら外郭ラインを結ぶという考え方は一つあるだろうと思います。急な斜面については敢えて土壘や石壘を造らないという考え方もあり得ると思います。

(大田) そうしますと、播磨城山城という山城が古代山城である証拠というのは、先程説明がありました門礎石、これは誰が見ても古代山城の城門というところで山口県の石城山神籠石にも類例がありますね。それから城内から奈良時代の遺物が出るということ。そして最後に谷間を仕切るような石列が残っていることがありますね。ところ

で、城域に関しては、現地に、やはり瘦せ馬の背中のような登山道が随分ありましたので、私はもう少し拡大するのではないかという気がするのですが。

(義則) 一つ魅力的な説としては、新宮町側の東斜面は急峻なのでおそらくこれ以上の城域の拡張はないだろうと思うのですが、西の亀ノ池方面へはなだらかな高原状の地形が広がっています。それに向かって延びている尾根を上手く取り込んでいけば、『播磨国風土記』の遺称地を基点にしてぐるりと囲めるような城郭ラインも想定できます。

(大田) 次に山城の配置についてですが、この播磨城山城跡から大和の高安城跡までは、やはり距離がありすぎますよね。もう一度その辺のところを少しお話しいただけますか。

(義則) はい。瀬戸内沿岸というのは北部九州ほど密度は高くないけれども、大体旧国単位で一つない二つの城があるという話をしましたが、指摘がありましたように播磨城山城から高安城まで空きすぎています。この間には淡路と摂津という国があります。やはりどちらかには山城がないとおかしいと思います。

(大田) やはり瀬戸内海にはたくさんの島がありますから航路というのが大事なのですね。古代も現代もあまり変わりはないと思いますので、やはり我々が今から海図と言いますか、航路をもう少し勉強すれば、また少し新しい視野が開けて来そうな気がしますね。航路についてはいろいろ考えられますよね。

(義則) 紀淡海峡はあまり通過していないように思いますね。やはり明石海峡が主要な交通路と考えます。

(大田) 途中には絶対に古代山城が必要ですよね。

(義則) そうですね。『万葉集』などでも防人の歌などありますし、また天皇が巡航していく時に詠んでいる港の歌などもありますので、そんなものを結んでいけば新しいことが見えてくるかも知れません。

(大田) 齐明天皇と中大兄皇子が辿ったルート辺りをもう少し地図上に落としていけば、逆にコースが分かってくるのではないでしょうか。

(義則) そうですね。齐明天皇の下った記事は重要かも知れません。

(大田) ところで講座の中で、門の築石の形状からみた場合に大宰の勢力範囲がというお話がありました。

(義則) 私個人の考えではあるのですが、『播磨国風土記』には吉備の大宰というのが何ヶ所か登場します。どうも吉備と言ひながらも播磨まで勢力を及ぼしていたようで、吉備の大宰が石川王であった時にこの里は改名したという記事が『播磨国風土記』に出ています。方形の柱穴を持つ門の礎石が、なぜか瀬戸内型と呼べるような古代山城の分布のひとかたまりのエリアの中に収まっていることからも、その中心となるとやはり吉

備の大宰がいた鬼ノ城あたりになるのではないかと思われます。

- (大田) 我々は古代山城を“大和政権が国家の非常事態として造った”と考えるけれども、やはり海というのは相当な連続性があるわけだから、九州は九州の統括権というのがあるだろうし、そういうものの見方はやはり必要だろうという感じはしますね。
- (義則)瀬戸内海の古代山城のもう一つの見方をしますと、切石で積み上げた石壁は九州に比べるといいですね。それも方形の柱穴を持つ門の礎石と一緒に、一括りできるような意味合いのものではないかと考えています。
- (大田) 最後に、播磨城山城跡の将来像についてお伺いしたいのですが、今後、中世山城で国指定を受けるとか古代山城で国指定を受けるとかいう話がありますが、山上にある播磨城山城跡のような遺跡の保存と整備というのは大変な課題があるだろうと思うのですが、それはどのようにお考えですか。
- (義則) そうですね。一つはアクセスの問題ですね。播磨城山城跡の場合、アクセスが非常に悪いです。1時間以上歩いて登らないと城に辿り着きません。ですから、個人的には何とか近くまで車で行けるルートができる欲しいと願っています。国指定史跡になれば開発にも制約が出てくるので、それまでにそういう道をつけたいという思いもあります。保存と整備ですけれども、合併してたつの市ができてこれ幸いとも思ったのですが、たつの市の場合、国指定史跡「新宮宮内遺跡」が現在整備中ですし、またもう一つ指定候補物件として「布勢駅家」という日本で初めて駅家が確認された遺跡もあります。それらも今後整備していくかねばならないという課題もありますので、どうしても優先順位が3番目という位置付けになってしまします。そのため今後の整備については、私が退職するまでに少しでも着手できればいいなと願っています。

鬼ノ城跡

村上幸雄

1.はじめに

古代山城には2種類あり、一つは『日本書紀』や『統日本紀』のような官撰史書に記載があつて、一般に朝鮮式山城とよばれているものである。百濟復興戦に介入し白村江の海戦で大敗し、唐・新羅連合軍の侵攻を恐れ、北部九州から瀬戸内沿岸、畿内にかけて急速築城した国土防衛施設としての山城であり、築城年の記載はないものの鞠智城もその一つと考えられている。

一方、朝鮮式山城に類似した規模構造をもつものの、官撰史書に記載がなく、神籠石とか神籠石式あるいは神籠石系山城とよばれる16城がある。これらは朝鮮式山城とほぼ同時期、ないしは若干遅れて築城されたとか、朝鮮式山城より先行して築城されたとか、多くの議論があり、したがって築城目的についても定まっていない。これから述べる鬼ノ城もそうしたもの一つである。

鬼ノ城は昭和61(1986)年3月25日に国指定史跡に指定されたが、指定名称は山名の「鬼城山」である。ただ、一般には通称の「鬼ノ城」に慣れ親しんでいるので、ここでも鬼ノ城の名称で述べたい。

2.鬼ノ城の規模と構造

古代の防御施設としては西日本の山城、東日本の城柵として理解されている。古代山城は北部九州から瀬戸内両岸、畿内にかけての西日本のみに分布する。所在地不明のものを含めても僅かに29城を数えるのみだが、個々の規模は大きい。

鬼ノ城がいつくられたかは確定できていないが、有力な時期になりつつある7世紀後半頃には、海岸線が現在よりも内陸に入り込み、鬼ノ城眼下城では大胆に言えば山陽新幹線のあたりが当時の海岸線になる。いまの児島半島はまさに児島という島で、北岸のあたりは吉備の穴海とよばれる海域である。当時の主たる瀬戸内航路は児島の北岸まわりと思われ、児島屯倉推定地もこの北岸域に考えられている。

鬼ノ城は、中国山地から緩やかに南下してきた高原状地形のいわゆる吉備高原の南縁の標高約400mの鬼城山を中心に占地している。眼下の丘陵は低く、眺望はきわめてよい。瀬戸内を挟んだ対岸四国には屋嶋城を望み、その西方20km余には讃岐城山城がある。両城とも鬼ノ城からは直線距離で50km余、天候さえよければ視野のうちである。また本土側では東方20km余に大廻小廻山城があり、西方の備後には所在地不明ながら『統日本紀』に停城記事のある茨城・常城の両城もある。とすれば、吉備には鬼ノ城をはじめ4城があったことになり、対岸四国の2城を含めれば、この地が北部九州と畿内を結ぶ瀬戸内航路の中間点として、交通の重要な地であったことが理解できる。

また眼下の総社平野では、この地の重要さをしめす軌跡をたどることができる。全土で第4位といわれる全長360mの造山古墳、第9位の全長286mの作山古墳の存在は畿内に匹敵するといわれる吉備の強大さの証しであり、のちに律令体制下になった備中國においても中心地で、未発見ながら備中國府もこの地内に想定されているし、推定されている古代山陽道にも接し、また海路へも11km余である。総社平野はまさに当時の政治、経済、軍事、交通の要衝地であつて、

その裏山に鬼ノ城が築城されているといえる。

鬼ノ城が占地している鬼城山は標高397m、その山容はすり鉢を伏せたような形状で、頂部は比較的平坦だが斜面は急傾斜面になっており、守るに易く攻めるに難い、まさに城つくりに格好の地である。

防御の中心となる城壁は、頂部から斜面となる傾斜変換点のある鬼城山の8合目から9合目のあたりを鉢巻状に一巡している。城壁は基部に自然のままか粗割り程度の列石を1段1列に並べ置き、その上に土を少しづつ入れて突き固めた版築土塁で、6ヶ所に高石垣を築いているが、基本的には土城である。城壁の走行は直線を基調とした折れで構成され、一区間の長さは地形によって異なるが、長い区間で約70m、短い区間では数mのところもある。城壁は城外側と城内側の両方に面をもつ両面築造の夾築だが、傾斜変換点に築かれているため城内側の面は低く、実状はほとんど内托に近い。城壁は版築土塁という土壁であり、そのため長年月の経過により版築土はほとんどが流出しており、基部が僅かに残っている程度で版築土塁の本来の規模は判然としない。しかし、残存のよい西門近くの高石垣周辺では下幅約7m、上幅約6m、高さ約6m、土塁の立ち上がり角度75度前後となる。ただし、構築区間によっては広狭、高低があることはいうまでもない。城外側の列石は、版築土塁完成後も正面側の面は露出しているが、一部の区間ではその一部分が被覆しているところもあるものの、基本的には城外側列石の正面側は露出している。また列石は北部九州の切石と称されるものに比べ、粗く武骨で精緻さはない。

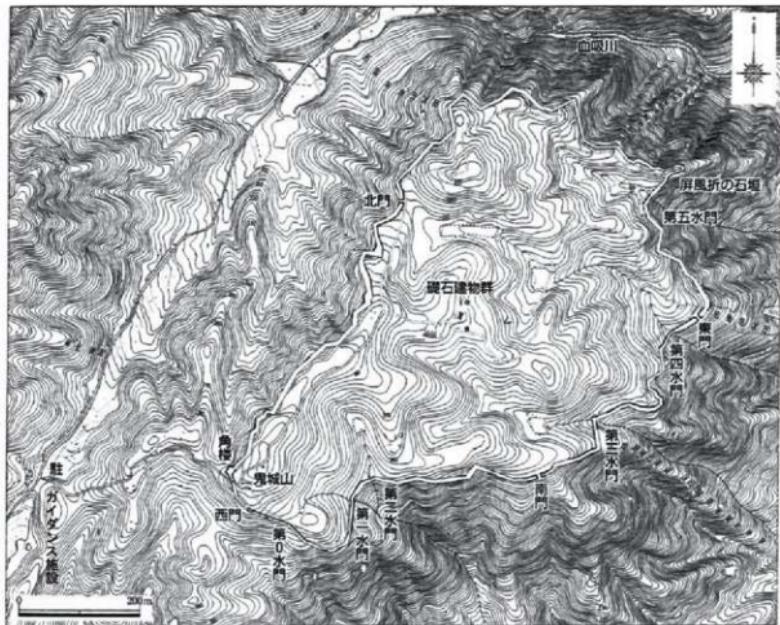


図1 鬼ノ城平面図 (S=1/8,000)

鬼ノ城では城壁の城外側、城内側ともに、石疊状に敷石が敷設されている。基本的には共に幅1.5mだが、城内側では2、3段にわたり、幅5mほどに敷設されているところもある。この敷石は当初犬走りや武者走りにあたる通路と理解していたが、調査の進展による諸観察から雨水によって土壌基部が洗われ、壊されることを防ぐことが主目的と考えるにいたった。

この敷石は日本の古代山城ではいまだ類例がなく、モデルになったであろう朝鮮半島でも蛇山城や扶蘇山城などで知られる程度であり、鬼ノ城の大きな特徴といえよう。また、城内側の列石に添うような城壁の上面位置で、ほぼ3m間隔で柱穴列が検出されており、それに対応するような位置関係で城外側列石に接するように柱穴列があるが、敷石の残存状況がよいため、一部の確認に止まっている。土壌中の柱穴列は板壁または構用の柱列と思われ、城外側列石前の柱穴列は、版築土壌構築に伴う堰板支持柱と理解している。

こうした城壁で囲まれる全長は2.8km、城壁で囲まれた城内は約30haとなる。鞠智城の城壁は3.5km、城壁で囲まれる内城地区47ha、外縁地区を含めた120haと比べると規模的には小さいことになる。全土的にみた鬼ノ城の規模は、古代山城の中では中位規模となる。

さて、城壁で囲まれた城内は広いくつかの谷部があり、雨水を中心とした水処理が必要となる。とくに城壁が版築土壌という土壁であるため、城壁が谷部をわたるところでは水処理施設の構築は不可欠であり、その施設が水門である。鬼ノ城の水門は6ヶ所に構築されており、その位置はすべて正面側で背面側には1ヶ所もない。これは城内となる頂部が正面側へ下降傾斜していることに起因する。鬼ノ城の水門は、城壁の下半部を石垣積みとし、その上部は版築土壌である。排水溝は4ヶ所では石垣の上部に設けられており、他の2ヶ所は排水溝はなく自然浸透式である。この2つのタイプの違いは、背後の谷部の受水面積の広狭による水量の多寡に起因する。水門の城内側となる背面は、豪雨時等を想定してか石垣積みである。鬼ノ城の城壁は両面に壁をもつ夾築式と先述したが、実状

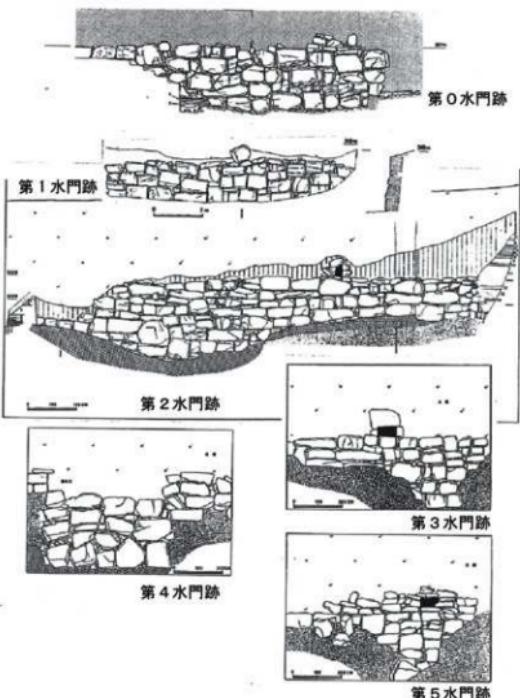


図2 水門跡 (S=1/200)

は城内側は列石 1 石分の 50cm 前後の高さであり、内托式と変わらないものであるが、水門の背面側のみは 1.5m 前後の高さをもっている。

一般に古代山城の水門の排水溝は下端に設けられているものが多く、石垣上端に設定されているのは鬼ノ城の水門の特徴とされているが、これは城壁が頂部と斜面となる傾斜変換点あたりに構築されているため、城内側と城外側の高低差に起因したものである。

なお、北部九州の古代山城では水門と城門が近接している事例が多いが、鬼ノ城では両者が多少隔たった位置にあり、登城道を暗示しているようである。

出入口となる城門は 4ヶ所で確認され、すべて発掘調査を行った。正面側に 3ヶ所（西・南・東門）、背面側に 1ヶ所（北門）である。いずれも掘立柱城門で、建替え等の形跡はない。以下、個々の数値については表を参照されたいが、まず規模的には間口 3間のものと 1間のものの大小の二タイプがある。大型は西門と南門で、間口 3間奥行 2間で中央 1間が通路となるもので、両外側の柱列は土塁中に埋没する。小型は東門と北門で、間口 1間奥行 2間と 3間である。両タイプとも通路部の床面は大きな石が入口から奥まで敷かれており、扉の付く本柱に添えられた門礎には柱の削り形、方立穴、軸摺穴、蹴放しが一体的に刻まれている。柱の削り形の形状から西・南・北門は角柱、東門は丸柱である。ただ、北門は本柱は角柱だが他の門柱は丸柱という特異な組み合わせである。また方立穴の形状は東門のみ長方形状で、それらの違いが時期的なものか、受注集団の違いなのか、いろいろな議論がある。また柱の根入れは 1.5~2.4m と深く、楼門など上

表 1 城門比較表

城門名	構造	規模	門柱	門礎	床面高	その他
東門	掘立柱 懸門 (列石上面から 門道床面まで 220 cm) 門道床面は石敷 門柱間に板壁 門道奥は石垣積	1 × 2間 330×540cm (扉間口 240cm)	丸柱 (最大 58cm) 振り方一辺約 1m 方形 深さ石敷面から - 150cm (根入)	円錐状剥込 方立穴 長方形 (11×25~10cm) 軸摺穴 構丸方形 (一辺 18cm~16cm) 蹴放し (底差 4.5~5cm)	288m (標高)	城内に大露岩 鬼城山は 397m
西門	掘立柱 懸門／平門 (土製スロープ) 門道床面は石敷 門柱間に板壁 門道奥は石積	3 × 2間 1230×760~ 825cm (門道間口 410cm) (扉間口 300cm)	角柱 (最大 60cm) 地面上から立柱 深さ石敷面から - 222cm	コの字状剥込 方立穴 方形 (22×24~12cm) 軸摺穴 構丸方形 (一辺 16~18cm) 蹴放し (6~9cm)	381.5m	門道奥に 4 本柱の 冒頭等 門道奥に 4段の石段 施作後に被災
南門	掘立柱 懸門 (190cm) 門道床面は石敷 門柱間に板壁? 門道奥は石積	3 × 2間 1236×755~ 810cm (門道間口 408cm) (扉間口 300cm)	角柱 (最大 58cm) 深さ石敷面から - 200cm	コの字状剥込 方立穴 方形 (22×25~12cm) 軸摺穴 方形 (一辺 18cm) 深さ 16~18cm 蹴放し (4~8cm)	331m	城内側は毛根斜面で 開窓 門道奥に 7段の石段 施作後に被災
北門	掘立柱 懸門 (150~230cm) 門柱間に板壁 門道奥は石垣積	1 × 3間 400×963~889cm (扉間口 296cm)	角柱 (最大 55cm) 他は丸柱	コの字状剥込 方立穴 方形 (22×25~12cm) 軸摺穴 構丸方形 (23×18~16cm) 蹴放し (6~7cm)	349.5m	城内に券形状剥込み 城外に厚壁状石垣 門道中央部に排水溝 門礎に削り残し 北門は復元整備による数据

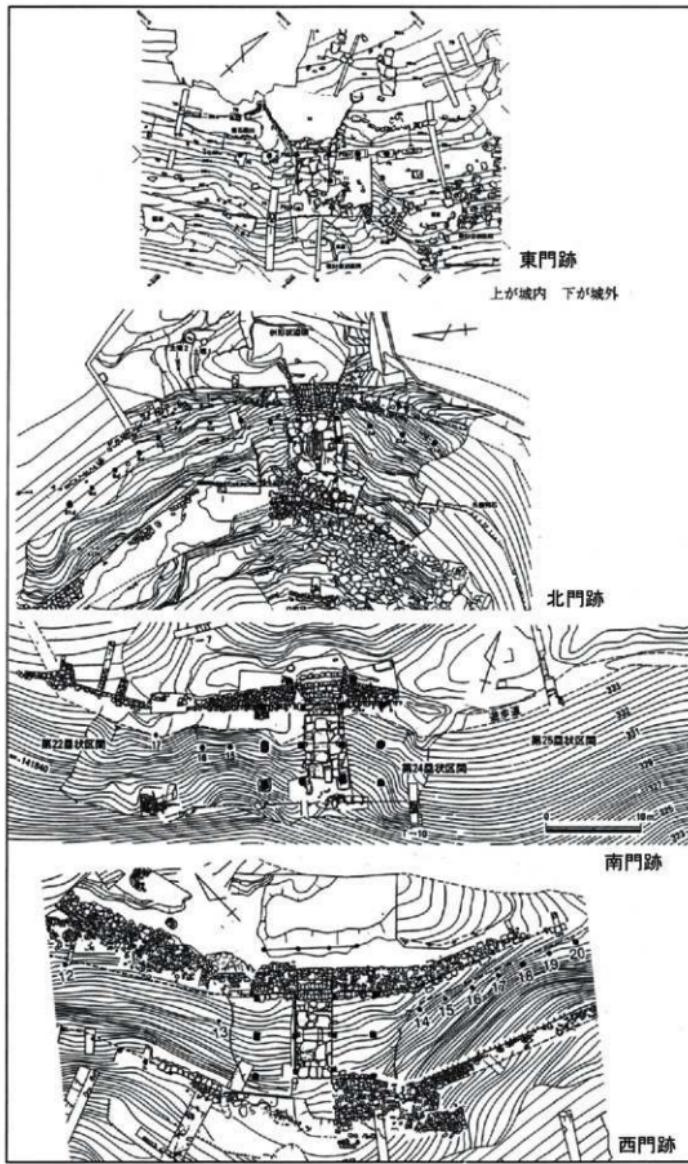


図3 城門図 ($S = 1/600$)

屋がかなり重厚なものであったことを窺わせる。また城門を突破された際の防御策として、西門では目隠し塀、南門では尾根斜面、東門は巨大な露岩が塞ぎ、北門では枡形状の掘り込みを配するなど、さまざまな工夫がこらされている。さらに通路とその前面は南・東・北門では2m強の段差をもつ懸門型式となっており、より防御性の高い城門となっている。北門は裏門にあたるが、正門がいずれになるかについては西門と南門の双方に意見が分かれている。因みに2つの門は同じつくりであり、規模的にも数cm異なるだけの違いであり、俄にはいずれとも決め難い。これらの城門が構築されたあたりの城壁幅は、通常区間に比べて幅広く9~10m前後となっているが、これは上屋架構のためと考えられる。

城壁がいかに折れをもって走行しているとはいえ、区間によっては死角を生ずるところができる。その弱点を補うため城壁の一部を張り出すなどの仕掛けが必要となる。中国大陸でいう馬面であり、朝鮮半島でいう雉城である。いま角塔とよばれている遺構は、かつて第3城門想定地とされていたが、調査の結果先述した特殊な遺構-馬面や雉城に相当することが判明した。

角塔は、鬼城山直下の背面側から正面側へ変わることろに位置し、西門へは60mという近距離にある。かつて第3城門想定地とされ、搦手門的な門跡が想定されていた。角塔は間口約13m奥行約4mが長方形状に張りだしている。張出部の下部は3m近い石垣積みで、その上部は版築土塁である。石垣の各コーナーには一辺約50cm前後の角柱が立ち、石垣上部はこの柱を利用して外面が板壁の版築土塁としている。上部施設は残存せず不明だが、上部は百疊近い広さをもち、城内側にはこの施設に上がる石段も設けられている。

こうした雉城については、従来金田城の一の木戸の突出部が知られていたが、石積みに疑問が呈されるなど不確定な印象が強かった。しかし、鬼ノ城で確定されたことにより、日本の古代山城にもこうした施設が導入されていることが明らかになった。なお、のちに金田城では新たに発見された南門の近くで東南角石塁(突出部)が発見された。

角塔は鬼城山頂部直下であり、西門へも60m。鬼ノ城を訪れた人はたとえ一周する余裕がなくても、この頂部まではすべての人が訪れており、この一帯に版築土塁の城壁、城門、角塔、水門、敷石など鬼ノ城の主要遺構が揃って出土したことは、このあたり一帯が重要な地であり、整備とその後の活用を進めるうえで僥倖であったといふほかない。

城内施設については、昭和58(1983)年に城内中央部のあたりから5棟の礎石建物跡が発見された。その後、平成11(1999)年度の岡山県教育委員会による城内確認調査によって新たに2棟が発見され、合計7棟となった。礎石総柱建物5棟、側柱建物2棟である。従来神龍石系山城では礎石建物は発見されていないか、存在するとされていても確定的ではなく、鬼ノ城で発見された意義は大きい。また、同年の確認調査時には鍛冶炉跡も発見されており、前後する時期の総社市教育委員会の調査では、小溜井、のろし場らしい遺構も発見されている。城外の施設としては、東麓下の谷の出口に九州の水城の小型のような土手状遺構が知られている。谷の出口を塞ぐような土手状遺構の全長は300m余、平成11年度の岡山県教育委員会の確認調査では、幅21mで、中世以前に築造されたことまでは判明したが、細かな年代特定には至っていないが、鬼ノ城の第一次防衛線の可能性が強い。

3. 鬼ノ城の築城時期、目的、築城主体者

これまでの総社市教育委員会による主として城壁線とそれに連関する遺構調査、岡山県教育委員会による城内の遺構調査によって、鬼ノ城を構成する各遺構の具体像がかなり明確に捉えられ

るようになった。

守るに易く攻めるに難い地形状況、要所に高石垣を交えつつ巡る城壁、たとえ城壁を越えたとしても侵入を阻止する板塀列、重厚で幾多の防御策を施した城門、要所に設けた特殊施設としての角楼など。これらの諸遺構で構成される鬼ノ城は、大野城などをはじめとする朝鮮式山城と称される一群にきわめて近い様相をみせている。また城内の礎石建物跡は、官撰史書に記載のない神龍石系山城では明確な遺構としてとらえられておらず、城内に多数の礎石建物をもつ大野城や基肄城、鞠智城など朝鮮式山城の一群に共通した内容となっている。鬼ノ城が朝鮮式山城とされる一群とはほぼ同時期か、ないしは若干遅れて築城されたとする有力な論拠とされる所以である。私も今までそう考えてきたし、今でも遺構からみるかぎり妥当なものとも思っている。しかし、こうした面からのみでは限界もあり、また説得力を欠くことは否定できず、発掘調査による出土遺物からの考察が不可欠となることはいうまでもない。

従来、古代山城は城内面積も広大でなかなか組織だった調査ができるはず、そうしたことでもあって遺構の比較から考察せざるをえなかったことは否定できない。したがって発掘調査によつて出土した遺物は各城とも僅かで、城の活動期の一時期を示しているにすぎない。こうした状況下にあって鞠智城では、城内調査が先進的に進められ、多数の建物関係の遺構ばかりではなく、図示された遺物だけでも150余点が報告されている。これに対し鬼ノ城では、総社市教育委員会の発掘調査は城壁線とその関連遺構であったため多くはないが、岡山県教育委員会による城内確認調査は城内の全域に及び、118ヶ所のトレンチ調査で総面積は5,830m²に達している。こうした調査によって報告された遺物は、図化された須恵器だけで130点にもなり、その後の調査ではさらに300点以上が出土しているという。その時期は7世紀後半から8世紀初頭頃と共通している。調査区域が城内のはば全域に及んでおり、しかも遺物の総数もかなりの説得力をもつほど多いことからすれば、これらの遺物が鬼ノ城の築城から廃城までの過程を示していると考えてもよいのではないかと最近では想いを新たにしている。

では鬼ノ城はだれが造ったのか、ということを考えてみると、その壮大な規模、投下労働力、動員力などからみても、一地方豪族とは考えられず、畿内中央政権とする意見にはほとんど異論がない。

では築城目的は何だったのか。出土須恵器の年代観を7世紀後半としたが、報告者によって微妙な時期差もあり、築城目的が異なることもなる。663年の白村江の敗戦と唐・新羅連合軍による倭国侵攻の懸念がいつまでつづいたのかははっきりしないが、665～667年に築城された大野城、基肄城、金田城、屋鷲城、高安城等の諸城は国土防衛目的であったことは疑う余地はないが、こうした危機意識と対応がいつまでつづいたのか、諸論の分かれるところである。この問題については紙幅の関係もあり、後日を期したい。

4. 復元整備事業について

平成2(1990)年の公有化終了後、遺跡の活用・公開が急務となった。しかし、鬼ノ城の調査は昭和53(1978)年に学術調査が行われているとはいえ、活用公開にただちに応えられるような状況ではなかった。そこで、平成5(1993)年に鬼城山整備委員会を設置し、発掘調査の指導と整備計画の策定を提言していただくことになった。

発掘調査は総社市有地である城壁線関係の遺構からすすめ、城門4ヶ所をはじめ角楼、水門、版築土塁の城壁、高石垣におよび多くの成果を得たのち、平成13(2001)年から整備事業に着手



図4 學習広場からの景観

し、今日にいたっている。幸いだつたのは、これら主要遺構が頂上の鬼城山周辺に集中していたことである。というのも、従来鬼ノ城を訪れた人はたとえ城内一周をしなくとも、城内への入口となる頂上までは登られていたからである。このことは整備後の今日でも実感しており、整備した遺跡が有効に活用されているといえよう。

このように鬼ノ城では城壁線関連の遺構を中心に、遺構上に直接整備してきたことに特徴があるが、鞠智

城では城内の建物関係を中心に整備が実現している。本来は両方が一体的に整備できることが望ましいのはいうまでもないが、現実はなかなかうまくいかない。皆さん方も機会あれば是非鬼ノ城へお越しいただき、鞠智城と比較してみて楽しんでいただければと切望している。

・対談・・・・・

(大田) 先般この館長講座で、最近国指定になりました岡山市の大廻小廻山城についての講座を開催しました。同じ岡山県内で岡山市に大廻小廻山城、総社市に鬼ノ城があるということで、岡山市の方では、「大廻小廻山城の規模は鬼ノ城よりも大きい」というふうにおっしゃっておりますが、鬼ノ城の調査を担当されました村上館長としましては、鬼ノ城と大廻小廻山城のそれぞれの山城の関係と言いますか、そういうものはどういうふうにお考えですか。

(村上) 大廻小廻山城は、鬼ノ城に比べますとだいぶ標高200mくらいの山に所在します。確かに城壁線は大廻小廻山城の方が長くて3.2km、鬼ノ城は2.8kmです。そうなりますと囲まれるお城の中、城内面積というのは当然広くなりますからね。岡山市の方では大廻小廻山城を吉備最大の山城と言っています。それは確かに最大でしょう。私も負けん気を出して、これは考えないといけないなと思っていろいろ考えているのですけれども。

(大田) なるほど。では、鬼ノ城の特徴はどういうところにありますでしょうか。

(村上) 常々私が考えているのは、鬼ノ城は日本に29ヶ所あるとされる古代山城の中でも一言で表現すると「山椒は小粒でもビリリと辛い」という城だろうと理解しています。確かに規模的には中程度かもう少し小さいくらいかも知れません。しかし城の造りは、例えば朝鮮式山城と言われている大野城や基肄城、金田城、それらに負けないような高い石垣や城壁を持ち、防御性が非常に高いのです。それから造りそのものを見ても、城壁の内外にきちんと石を敷いて城壁が永く持つような工夫もしています。それから再現された門などを見ると、非常に立派な門が造られております。そうしたことを考えると、私は鬼ノ城は朝鮮式山城のグループに極めて近い城ではないかと思います。

(大田) では、大廻小廻山城はどうでしょうか。

(村上) 大廻小廻山城はどうかと言うと、確かに列石はあるのです。ですから版築で積んでいます。ただ高さが低いのです。高さが低いし、それからもう一つは二段のように、土段と言いますか、そんな感じで造っているところもあります。そのため防御の点から言うと少し弱いのかなと思います。かと言って、北部九州の神籠石系の山城のように、山裾から山頂までとり込んでいるというタイプでもないわけです。

(大田) 熊本県の場合には鞠智城一つだけなのですけれども、岡山県にはそういった二つのものがあつて、いずれも国指定ということで、さすがに吉備の国という感じがしますね。両方の山城の比較研究というのはできていますか。

(村上) 大分昔になりますけれども大廻小廻山城でも調査が行われました。けれどもまだ鬼ノ城ほど調査ができていない面があるので、その辺りのすり合わせというのは、比較するのが難しいかなと思います。例えば城壁についてはそういうふうな事で構造が分かつたのですが、門が分からぬのですよね。「一ノ木戸」「二ノ木戸」と言われているよ

うな水門の所のことを「木戸」と言っているようですが、もしそこへ門があるとすれば九州によく似たタイプになるのですが、掘っていないので門があったのかどうかこれはまだ分かっていません。ですから少し材料不足だろうと思います。昨年、国指定になりましたから、これから再度調査が進むのではないかと期待しています。

(大田) ところで、鬼ノ城の城内は総社市が3割で、7割が県有地なんですね。ということは、県と総社市との兼み分けというか、総社市は外郭部分をやっていて、県が内部をやっているという事なのでしょうか。

(村上) この辺りがちょっと難しいところです。北門の上に城内で2番目に高い山があるのですが、その辺り一帯に昭和46年頃にモトクロス場ができました。それで当時の岡山県知事がそれではいけないと、まだ指定にも何にもなっていない段階でこの範囲を中心公有化したのです。これは今から考えると大英断だったと思います。およそ城壁線のところが遊歩道になっているのですが、ほとんどこれが土地の境です。そうすると内部が県有地になります。残りの城内は総社市に合併する前の村が持っていた財産区でしたので総社市に持ち上がってきました。そうして指定が終わって公有化が済み、じゃあその後一体どうするんだといった時に、文化財はただ公有化しただけでは意味がありません、これは公開して活用をするという事が一番必要ですから、それを国の方からも厳しく言われました。

(大田) 鬼ノ城の調査はいつ頃からはじめられたのですか。

(村上) 開発行為に関わる発掘調査が一息ついた平成5年頃から整備委員会を立ちあげて調査に入りました。ただ鬼ノ城は昭和53年に表面観察と航空測量を行って外郭線をある程度押えられておりましたし、その後の踏査によって城壁の構造もある程度分かっていました。そのうちの東門については、そこに門があることはまず間違いないと言われていたのですが、決定的な証拠がまだその段階では挙がっていなかったのです。そういう事もあって、これを整備するにしても、もう少しデータが無いとどんな整備をして良いのか分からぬということで調査を始めることになりました。その調査を始めますと、大田館長を前にして言うのは悪いのですけれども、鞠智城は城内を先に調査されたのですよね。私どもの所は外を先にやったのです。それは土地の関係が総社市は城壁線より下の方の土地ということになっておりましたから、勢いこれを追いかけるを得ないということになって、平成6年から調査を始めるにあたって一番確率の高い東門からいったのです。この時は若い人に任せて私は現場はやっていなかったのですが、平成8年になって、今は北門が裏門ですが、当時第3城門推定地や、裏門ではないかと言われていた所を掘ってみたら門にならず、どうも変な遺構になってきたというのが分かりましたので、私も現場へ出ざるを得なくなりました。

(大田) その後はどうなったのですか。

(村上) 来跡された研究者はプレッシャーをかけるのですよね。ここにこういう施設がある以上は門が近くにあると。絶対にあると。どこかは教えてくれないです。そういうプレッシャーだけかけて帰るのですよ。回りまわってようやく西門を探し当てて、その

データから似たような所を調査したのです。その後、もう外郭線は大体分かってきたので、本当は手を伸ばして城内をやりたかったのですが、これは岡山県が所有している部分で、私は総社市ですから。しかも岡山県には古代吉備文化財センターというのがありまして、当時は専門職員が60数名おりました。そういう所へ8名の職員しかいない私達が首を突っ込むというのは、我々の年齢層ではちょっとできない事なのですよね。それで私達はあくせくとそういう所を調査してきました。ただその過程で、岡山県が平成11年度に城内の確認調査を百数十ヶ所のトレンチを入れてやりました。今年から県が7年計画で城内の調査に入っています。

(大田) 私は、門跡などをよく見つけられたなと思ったのですが、今お話を聞いて、地道な努力とバイタリティーがそういう結果に結び付いていくというのがよく分かりました。最後に館長はどうしても聞きたいのは、そうすると鬼ノ城そのものは、今後総社市にとってどのような方向に整備が進んでいくのですか。

(村上) これも難しいところですね。文化財保護法、これは文化財関係で言えば憲法ですよね。それによると、整備・公開というのは所有者がやるべきなのですよね。そういうふうに書いています。そうなると岡山県有地である城内は県が整備しないといけないので。私どもはその他をすれば良いわけですけれども。ところが県はいろいろとあったのか、私達が整備委員会を作った平成5年度から程なくして、総社市が鬼ノ城の管理団体になったのです。これは肩代わりです。所有者が整備・公開するだけの力がない。例えば個人の方でしたら特にそうですよね。行政が代わってやっていく管理団体。そういうケースがあるのです。総社市が岡山県の肩代わりをして管理団体になって整備したのです。整備をしたといっても、今は総社市分の所をやっているだけですから良いのですけれども。しかし城内になるとこれは明らかに岡山県有地です。これは県がやるべきです。それと先程お話ししましたように、ここはいろいろな法的な制約があったり、それから湿地があったりして、自然保護団体から希少動植物保護上の要求も多いのです。私どもはここを掘りたくて仕方ないのだけれども、県有地であり、自然保護団体のプレッシャーもあったりして未だに実現していません。そういう条件下で整備ができる所ということのは、せいぜい鬼ノ城の頂上部周辺と北門周辺。ここは幸いモトクロス場を後始末する時に、岡山県が2トン車が通れるくらいの道をつけたのです。整備はその辺で終わるのかなと思います。これは県の具体的な話を聞いたわけではないですから分かりませんが、どうもそういう方向づけのようです。

(大田) 岡山の場合には非常に周辺の足腰が強くて、大廻小廻山城は岡山市がやって、鬼ノ城は総社市がやるということですかね。よく分かりました。今日はどうもありがとうございました。

(村上) どうもありがとうございました。

屋島城跡について

山元敏裕

1. はじめに

屋島城が存在する屋島は香川県の中央部、高松市の北東部に位置し、現在は高松平野から半島状に瀬戸内海へ突き出た様相を呈しているが、近世に沖積作用と干拓によって陸続きとなるまでは、その名が示すとおり島であった。この屋島の地形を形作る地質は大きく3つに分かれる。島の基盤が花崗岩、その上部である中腹から山上近くが凝灰岩、さらにその上を安山岩が覆っている状況である。この安山岩が下部の岩石よりも硬かったために浸食から取り残され山上部が台地状の平坦地となり、その下部は崩落によって断崖となったもので、地形上は「メサ」といわれ、その典型から国の天然記念物になっている。山上部近くに断崖が連続するというこれらの地形の特徴は、古代山城屋島城の占地とともに防御構造を形作る上で大きな利点となっている。屋島の標高は最高点が293mで、山頂全域が280m前後とほぼ平坦な地形を呈する。中央部が狭いやせ尾根でつながり北嶺と南嶺に分かれる。



図1 屋島と古代の想定海岸線



図2 屋嶋城位置図

2. 築城の契機について

屋嶋城は天智天皇2年(663)の白村江の戦いでの敗戦を受け、当時の大和朝廷が唐・新羅対策に対馬・北部九州～瀬戸内海沿岸に对外防備用に整備した古代山城の一つである。現在、古代山城は明確なものとして全国で22例が確認されている。屋嶋城跡が歴史書に登場するのは1度のみで、「日本書紀」天智天皇6年(667)11月の条に金田城(長崎県対馬市)・高安城(大阪府八尾市)・奈良県平群町とともに築城の記事がある。

3. 屋嶋城におけるこれまでの状況

讃岐には古代山城が2ヶ所ある。最近まで、讃岐の古代山城といえば、もう一つの古代山城である坂出市城山城の方が有名であった。その理由は外郭と内郭からなる2重の外郭線城壁・城門・水門などが存在し、城壁近くには、門の礎石を構成する唐居敷が運搬途中で放置されたような状態で確認されていた。これに対し、屋嶋城跡については、その存在を示す唯一の遺構が北嶺と南嶺を分ける谷奥の標高100m付近を中心に認められる全長約90mの浦生石塁のみであった。この遺構は、大正8年(1919)の関野貞氏によって「史学雑誌」に初めて学会に報告され、のちに大正11年(1922)に岡田唯吉氏によって遺構略図が公表されたが、この城壁が谷部を遮断するのみで山上へ伸びずに完結するものであった。このような城壁の配置状況が、他の古代山城のように山上を巡る外郭線(城壁)とは異なることから、最近まで屋嶋城跡は実態の不明な古代山城との認識が研究者の間であった。

その後、屋嶋城跡に関する遺構については、昭和60年(1985)に村田修三氏が南嶺の北・南斜面において確認した外郭線について報告を行い、平成10年(1998)1月には地元の平岡岩夫氏が南嶺南西斜面において、その後、城門を確認することとなる石塁を中心とする外郭線を発見した。

しかし、いずれの遺構も古代のものとする確証が得られない状況であったことから、現時点で認められる遺構の詳細を確認するため、平成11年度から屋嶋城跡外郭線の確認調査を継続した。その結果、平成14年2月に後述の城門を確認するに至り、古代山城屋嶋城の存在を確固たるものとした。

4. 屋嶋城跡の詳細

(1) 外郭線城壁

- これまで不明であった山上外郭線の城壁ラインの実態は、前述の研究者による発見やその後の高松市教育委員会による分布調査や確認調査によって、これまで指摘されてきたようにその多くの部分が山上近くにある断崖を自然の要害として利用し、人工的な城壁

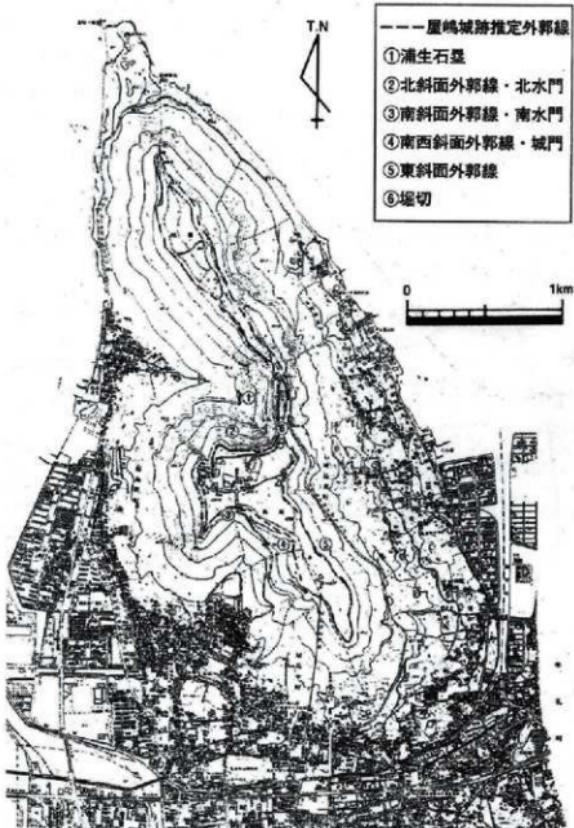


図3 屋嶋城跡関係遺構位置図

は築かれていない状況を再認したが、谷部や断崖が途切れ、傾斜が緩くなり、外敵に侵入されやすい部分については、土盛りや石積みによる人工の城壁を築き、手を加えていくことが新たに判明した。

- 屋嶋城跡の城壁には、他の古代山城と同様に夾築（両壁式）と内托（外壁式）の2種類の構造が存在し、これまでの確認調査等により、城壁に付属する施設（城門等）の有無によって構造を使い分けしていることが判明している。
- 山上部の外郭線城壁の全周は、南嶺のみでは約4km、北嶺を含めると約7kmの規模をもち、大野城跡（福岡県太宰府市ほか）、基肄城跡（佐賀県基山町ほか）などとともに、国内では大きな部類に属する。
- 城門周辺部の城壁構造は最も残りの良い部分で高さ約6m、平均の高さ約3mの石積



図4 北側斜面外郭線



図5 北側斜面外郭線内部状況



図6 南西斜面外郭線



図7 南西斜面外郭線背面石

みが現存し、高い城壁による防御構造を採っていたことが分かる。城壁石垣が崩落した裏側には、版築とは言えないが、細かく積上げられた盛土の存在が確認された。この城壁の背面には列石も存在する。この背面列石には、石積みとなる部分も存在し、地形に合わせて背面の状況を変化させている。これは、城内から流下した雨水によって城壁が崩れないための対策であろう。

- ・山上部の城壁（外郭線構造）の状況が明確になるに伴い、従来から確認されていた浦生に所在する石壘を併せ、2重の防御構造をもつ古代山城であるといえる。

（2）城門

- ・国内では最大級の規模を持つ城門（幅5.4m、奥行10m）は、敵に対して両側からの攻撃が行なえる防御上有利な谷奥に位置し、屋嶋城跡で確認されている城壁の中では最も強固な石積みの北端に造られている。城門構造の特徴のうち、明確なものとしては国内では初めて「懸門（けんもん）」構造を確認した。「懸門」構造とは城門入口に段差を設けるもので、普段は梯子を使用して出入りする。古代山城の重要な防御構造の一つであり、確認した石積みは現存で高さ1.2mの規模をもつが、城内側へ倒れた石積みを本来の状態に戻すと約2mの高さに復元できる。
- ・城門を含めて、城門への登山道（侵入路）や城門内部の通路を屈曲させることにより、防御する側に有利な構造を採っていることがこれまでの調査で判明した。
- ・急斜面に造られているという地形の制約のため、城門床面が他の古代山城とは異なり、床面は階段状の段差をもつ特異な構造をもち（金田城南門に類似あり）、床面下部には



図8 城門前面懸門構造



図9 城門内部



図10 城門内部（南側壁）



図11 門道床面排水溝



図12 城門内柱穴

暗渠となる排水溝（鬼ノ城北門に類例あり）を備えるなど、城内から城門内へ流入する雨水の排水対策も行っていることが判明した。

- 柱穴は南側壁に沿う城門奥側岩盤上で 2ヶ所を確認した。門道中心線で折り返すと北側壁の同じ位置に同様の柱穴が想定され、少なくとも 4ヶ所に柱穴の存在が考えられる。柱穴の平面形状は隅丸方形で、一辺が約 50cm である。山側の岩盤を 20～30cm 削ることにより底面を平坦にしている。柱穴の確認により上屋の存在を実証することはできたが、どのような規模・構造になるか不明である。

(3) 水門(谷部)

現在、屋島寺山門西側の谷部(南水門)と屋島水族館の北側の谷部(北水門)の2ヶ所で確認した。敵が侵入しやすい谷部の防御と城内からの水を排出する目的を兼ねることから通水部を中心にして石積みで造られている。屋嶋城では未確認であるが、他の古代山城では、石積みの一部に水を排出するための通水口を有する。



図13 南水門



図14 北水門

(4) 兵舎・倉庫

屋嶋城跡でも確認されるべき遺構であると考えられるが、屋島山上の平坦地、特に南嶺山上部は寺院や観光地として、早くから人の手が加わり、現在、確認することが困難な状況にある。他の古代山城では、敵に備えて駐留する軍隊のための兵舎跡や食料を保管するための倉庫跡が確認されている。屋嶋城跡では、明確な遺構は確認できないものの、屋島寺宝物館建設工事に伴う発掘調査において、屋嶋城の存続時期と合致する遺物が堅穴状遺構から出土しており(第18図2・3)、現在の屋島寺を中心とする場所に屋嶋城跡に関係する主要遺構が存在していた可能性が極めて高いと考えられる。

(5) 貯水池

多くの兵隊が駐留することから、飲料水等の水の確保が必要である。かつて屋島山上の各所に溜池が存在していたが、現在、その多くが埋め立てられ残っていない。屋島寺東側にある瑠璃宝池(通称血の池)を含む池などは、近接する南側において実施した確認調査の結果から、古代山城の貯水池であった可能性が高いと考えられる。

(6) 浦生石壘

北嶺と南嶺を分ける谷奥標高100m前後の谷部を封鎖(遮断)するように造られた石壘で、全長は90m、石壘の底辺幅9m、天幅4m、高さ4mの規模をもつ夾築構造の大石壘である。北端近くの取り付き部には城門が想定され、その北側には雉城と考えられる張り出しが存在する。現在は、上部からの土砂・雨水によって埋没しているが、水が絶えず流入する場所であることから水門想定地も存在する。浦生石壘のように外郭線とは別に外城を設ける例は、総社市鬼ノ城の麓(池ノ下地区)でもみられる。

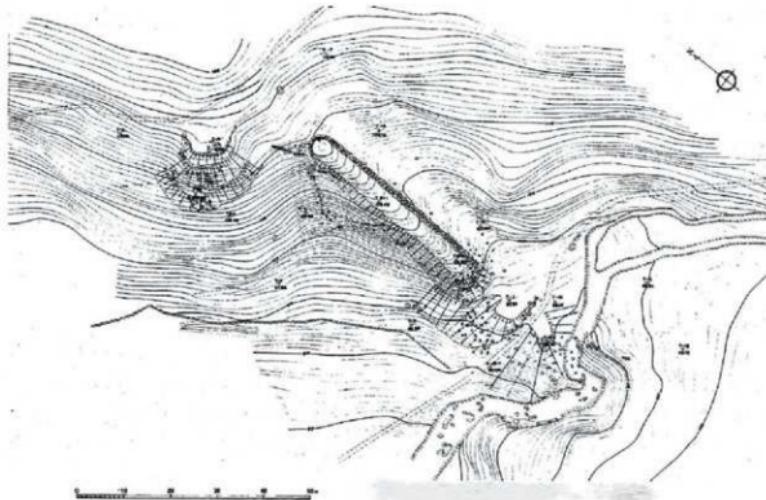


図15 浦生石塚



図16 浦生石塚形状



図17 浦生石塚背面石積み

5. 屋嶋城の存続期間

屋嶋城は『日本書紀』に築城の記事があることから、築造年代は明確である。では、廃城の時期はいつごろであろうか。白村江の敗戦後に整備された防御体制の最終拠点である高安城が大宝元年(701)に廃止となっていることから、遅くともこの時期までは、廃城となっているものと考えられる。屋嶋城を含めて瀬戸内海沿岸には7ヶ所の古代山城が存在するが、このうちの5ヶ所からは、柱を嵌め込むための方形の割り込みを持つ石製唐居敷が確認されているという共通点をもつ。鬼ノ城以外は、本来の設置場所である城門部分での確認ではなく、設置場所への移動途中で放棄された状態で確認されている。この石製唐居敷は、屋嶋城では、未確認であることから、これらの共通した門構造の整備は行われず、それよりも以前に廃城となっていたと解釈できる。屋嶋城に伴うと考えられる出土遺物にも、8世紀に下るものは認められないことからも、それを裏付けるものといえる。

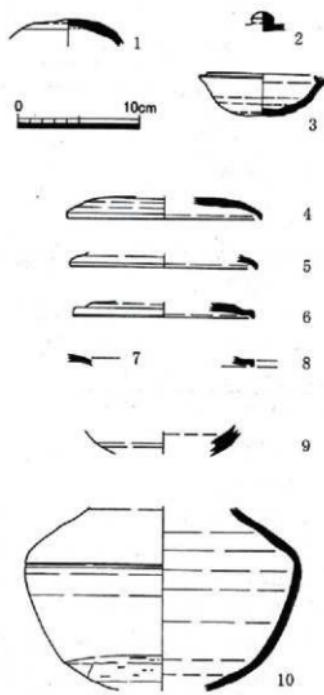


図18 屋嶋城関係出土遺物

6. おわりに 一今後の予定について一

これまで実態の不明な古代山城であった屋嶋城であるが、これまで確認されていた成果と、ここ10年余の確認調査によって古代山城としての構造解明が進展し、日本の古代山城を考える上で重要な成果をあげている。継続した確認調査をおこなうことによって、さらなる構造解明が進むものと考えられる。

本論は、平成18年度の館長講座の発表内容を元に書き起こしたものであり、記載内容については、発表当時の内容を中心によどめた。発表後の確認調査や城門整備に伴う解体修理工事によって、見解が大きく変わる成果も上がってきていているが、全体の体裁を考えて、変更していない。この点については、最近の調査成果を参照していただきたい。

引用・参考文献

- 岡田唯吉 1922 「屋島」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第1 香川県
- 藤井雄三 1981 「屋島城跡」高松市教育委員会
- 村田修三 1985 「研究室旅行こばれ話一屋島城一」「寧楽史苑」第30号 奈良女子大学史学会
- 平岡岩夫 1998 「屋嶋城跡の新発見の石墨について」「溝瀬」第7号 古代山城研究会
- 高松市教育委員会 2003 「史跡天然記念物屋島I—史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書一」
- 高松市教育委員会 2005 「平成15年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業(屋嶋城跡)調査概報」「高松市内遺跡調査概報 一平成16年度国庫補助事業一」
- 高松市教育委員会 2006 「平成16年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業(屋嶋城跡)調査概報」「高松市内遺跡調査概報 一平成17年度国庫補助事業一」
- 山元敏裕 2006 「屋島の港は城門へと通じる(屋嶋城環境復元 その1)」「田村久雄先生傘寿記念文集 十瓶山II」田村久雄傘寿記念会
- 高松市教育委員会 2007 「屋島寺 屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

・対談・・・・・

(大田) 講座での最後のまとめのところで屋嶋城が意外と早く廃城になったのではないかという話をされました。その根拠として国府から17kmも離れているということ、さらに一国で山城を2つ持っているという話がありました。ただし、鞠智城の場合には肥後の国府からそれよりさらに離れておりまして、30km近く離れているという状況もございます。また、当時の都は近畿地方にありますので、奈良県の高安城とか屋嶋城というのが最後の防衛ラインとなると思いますが、高安城も早いうちに廃城になるというように少し矛盾も感じます。また逆に、最前線基地に近い九州側の山城のうちの鞠智城は9世紀後半まで残るということがございまして、大変矛盾するところがあるかと思います。まずは、そのあたりについてお話願います。

(山元) その辺、私も勉強不足で細かなところはよくわかっていないのですが、最終防衛ラインである高安城の一つ手前の防衛ラインに屋嶋城は位置していますので、もう少し長期間、少なくとも8世紀の前半くらいまでは残っていてもいいと思うのですが、発掘調査からは、そのような状況はみられません。屋嶋城を造る契機となったのが白村江の敗戦であり、大きな理由あるとは思いますが、その裏側には当時の国家が円滑に地域支配を進めるための方策も多く含まれているのではないかと思っています。例えば、古代山城を造るために、多くの労働力が必要です。日々、一定量の労働力を確保するためには、地域内の労働力を把握するための戸籍の整備が必要です。戸籍が整備できれば、税を取り立てる量も確定します。古代山城を整備していくと同時に地域支配を確立していくことも大きな目的ではないかと考えています。古代山城の築城に関わる地方の役人や民衆に対しては白村江の敗戦で朝鮮半島から唐と新羅の連合軍が攻めて来るのだから、慌てて古代山城を造らないといけないというふうに恐怖心を煽りつつ、その裏側には当時の国家の思惑が見え隠れしているように思われます。国家の確立の中で、当初の目的が達成されたことから屋嶋城は早々に廃城になったのではないかと思います。

(大田) なるほど。確かに古代山城築城の裏には別の思惑もあったかもしれませんね。ところで、対馬から北部九州のあたりで唐と新羅の連合軍を防ぐような体制を作つておけば瀬戸内に山城を造る必要もないかと思うのですが、そのような観点からお考えはありますか。

(山元) 本当に攻めてくるのを想定しているのであれば、北部九州以外にも伊予、長門、周防のあたりにも、もう少し古代山城があつてもいいのではないかと思いますし、伊予にある永納山城から出土した土器の年代が8世紀の初頭ぐらいにあり、他の古代山城の年代と比べて違和感があります。瀬戸内西部には少なく、瀬戸内東部の備讃瀬戸を中心に古代山城が集中するのは、唐と新羅の連合軍に対しての防備としては弱いのではないかと思われます。

(大田) ところで、これまで屋嶋城の調査では遺物はほとんど出土していないんですね。

(山元) はい。城門背後にある列石の裏側の地山直上から7世紀後半代の短頸壺が出ていますが、明確に形や年代がわかるのはその1点だけです。あとは小さな破片なので細かな時期は追えませんが、7世紀後半を中心とする時期を想定しています。屋嶋城の出土遺物は西

暦でいう667年という文献の年代と、あまり違和感のないものであると言えます。少量の出土遺物からですが、長期間の屋嶋城の存続は考えにくいのではないかと思っています。

(大田) では屋嶋城では、城を修復・改築した痕跡は見つかっていないんですね。

(山元) 周辺の古代山城では、鬼ノ城では門の入口にスロープを付けて入りやすい門の構造を採用しています。他に最近見つかった対馬の金田城の南門も懸門構造ですが、いつの時代に所属するのか分かりませんが、城門の前面に階段を付けています。本来は敵が入り難い懸門構造であったものに階段をついているということは、入り難い門から入り易い門への変化を辿っている。屋嶋城の城門はそのような形態ではありません。門の構造が、どの時代の段階で変化するのかは、現段階では明確に言えないのですが、門の構造変化がないことから、存続時期も短いものと考えています。

(大田) 以前屋島に伺った際に、屋島が山というか、それそのものが、ひとつの城じゃないかという感じがしました。それでもやはり古代山城のセオリーに添って城壁などを造っていないといけないという部分はあるんでしょうか。

(山元) そうですね。屋島に所在する屋嶋城の城壁がどのように築かれているのか、当時の唐と新羅に伝わっていたのか否かはわかりません。現在、我々は屋島に断崖があることを知っていますし、そのような目で見るので、断崖だとわかります。では、屋嶋城に関する正確な情報が無い中で、瀬戸内海の南岸ルートを海岸線伝いに屋島の沖合まで来て、東側を見ると全部が城壁のように見えると思います。事前情報がなければ、このような断崖が続くような古代山城については、敵も目視により地形を観察し、何処から攻めるのが適切であるのか考えると思います。攻めるのが困難であるという心理的なものも含めて、ここに城を造ろうと考えたのではないかと思います。屋嶋城は、谷部や緩い斜面部には、きちんと人工の城壁を築いています。多分、瀬戸内海に突き出した屋島の視覚的なインパクトを考え、城の選地や縄張りを考えたのだろうと思います。

(大田) さきほど、屋嶋城本体は早く廃城するけども、麓の後方支援基地的なものは残っていくとおっしゃいましたよね。

(山元) 屋嶋城を取り巻く状況として、以前は後方支援を行う官衙的な遺跡とのセット関係がよく分からなかったのですが、屋島の対岸における最近の発掘調査で8世紀の初頭くらいからずっと繋がる官衙的な遺跡が見つかっています。その遺跡というのは屋嶋城が廃城になった後も、10世紀位までの200年位に渡って継続していたことが出土遺物等から判明しています。屋嶋城が廃城になった後も後方支援基地であった官衙的な遺跡は目的を変えながら、山田郡の物資の搬出基地であるとか、役割を変えながらも遺跡は存続するものと考えています。

(大田) 本体は廃城になって、麓は残すというのも面白いですよね。純粋な城塞だから本当の緊迫感がなくなってきたら要らないという感覚でしょうか。

(山元) そうでしょうね。元々南側の遺跡というのは、山田郡の物資を出す津の機能を持つと

もに屋嶋城を造るので後方支援も担っていたと思われます。廃城になったことから後方支援基地という役割が必要ではなくなり、本来の物資を搬出する基地に目的が限定されていったものと考えられます。これまで山田郡の古代の遺跡は、詳細が不明でしたが、限定された異方位条里地割が存在し、他の地域より先行して開発がすすめられた地域の一つであると考えられます。少しずつではありますが、以前に比べると古代における山田郡北部の遺跡の状況というのが見え始めたと思います。

(大田) 次に、対岸の岡山県の鬼ノ城との関係についてお聞きしたいのですが、屋嶋城は築城年代が分かっていますけれど、鬼ノ城は分かっていないですよね。

(山元) そうですね。鬼ノ城では、発掘調査で多くの成果が上がっており、最近の古代山城研究の最先端を走っています。やはり多くの遺構があって調査も進んでおり、鬼ノ城の存続時期がわかる遺物が出土していますが、長期間にわたる遺物が出ているようで、土器型式から築城の細かな時期というのが決められないようです。屋嶋城の場合は、幸いにも『日本書紀』のはんの2行程度ではありますが、築城記事が載っており、加えて築城年代も明確であることから、年代の定点ができます。それに加えて長期間の使用が無ければ、屋嶋城から出土する遺物によって時期の絞り込みができます。そうなれば、同様なものが出土している鬼ノ城の各遺構の時期というのが屋嶋城の出土遺物の時期から援用できることが可能です。

(大田) 今後の屋嶋城の整備の方針というか、将来のビジョンについては、どのような考えをお持ちですか。

(山元) 今、屋島というと高松市を代表する観光地です。屋島の山上の土産物店は源平合戦の古戦場の屋島であること前面に出して営業活動を行っています。高松市にける屋島は、我々文化財を保護する立場の教育委員会と、観光地としてアピールする観光課で対応が大きく異なります。同じ高松市ですが、部局が異なることから、世間でよく言われる縦割り行政の弊害があります。屋島を保護しつつ活用するように、部局を超えて連携する必要があると思います。その中に屋嶋城の城門が活用されれば、担当者としてはありがたいと思っています。今日も屋島について、色々とお話しましたが、屋嶋城もありますし北嶺には鑑真が開基したと伝わる千間堂跡という屋島寺の前身の寺跡もあるわけです。屋島の特色は歴史的なものもありますし、自然を満喫することも可能です。屋島は滞在時間30分で語れるようなところではないので、せめて2時間位は滞在して、色々なところを見て屋島を理解して帰って頂きたいと思っています。その為には観光資源を活用する観光課と文化財を保護する教育委員会と地元が一帯になって話をしていく必要があると思っています。繰り返しになりますが、その例の一つとして城門の整備というのを重要なしていただきたいというのが担当者の希望としてあります。

雷山神籠石

—1996年における最新踏査結果について—

瓜生秀文

1. 雷山神籠石について

雷山神籠石は福岡県糸島市雷山・飯原間の山中に築かれた東西300m、南北700mほどの域域をもつ古代山城である。雷山（標高955m）の北中腹約400～480mを測る2つの尾根に挟まれた緩やかな勾配の沢筋にひっそりとその姿をみせる。この尾根は雷山支脈のなかでもとりわけ北方向に突き出ているため、糸島地方のみならず博多湾や玄界灘まで広く一望できる景勝の地である。遺

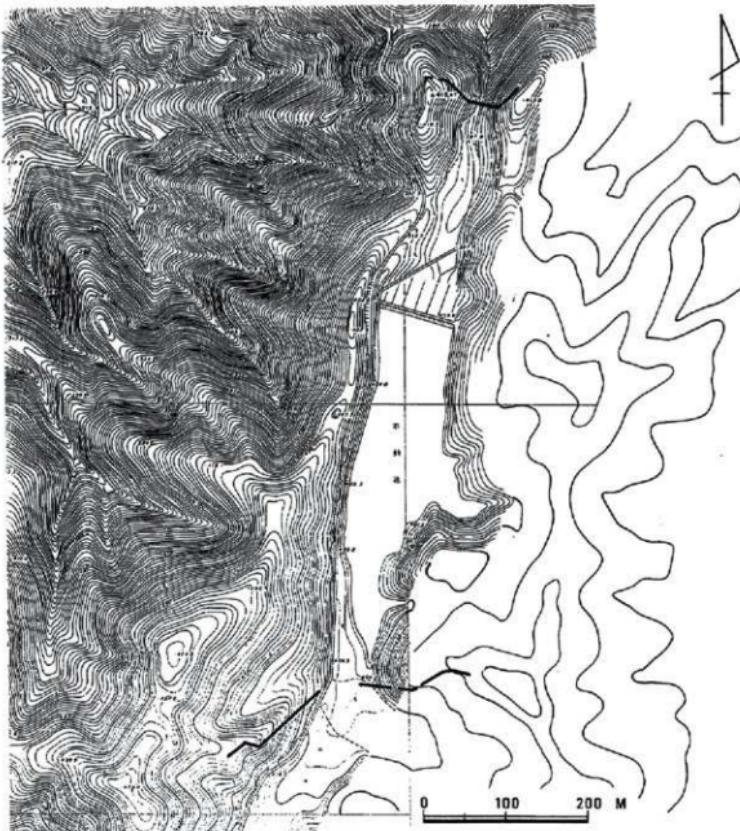


図1 雷山神籠石遺構平面図
『溝塗』第7号（古代山城研究会・1998年）より引用

構としては、現在、谷の南北に築かれた水門とそれから東西に派生する列石群をみることができる。ところで、1996年11月25日に古代山城研究会で雷山神籠石の踏査を実施したところ、「北水門」と「南水門」などの遺構の状態をつぶさに観察することができた。以前の踏査もふまえて雷山神籠石の1996年における遺構の状態についてまとめておきたい。

2. 研究史

そもそも「神籠石」とは福岡県久留米市に所在する高良山神籠石に代表されるように、列石が宗教上の神域と合致していたこと、その基本構造が列石と水門遺構に限られていたために、靈域を示すモニュメントと解され、その名称となった。しかし、1960年代に調査された佐賀県武雄市のおつば山神籠石⁽¹⁾では列石上に土壘、そしてその前面に柵列の痕跡が確認されたことや、朝鮮半島の古代山城の構造との類似点が指摘されてからは、山城としての認識が一般的となった。現在では北部九州から瀬戸内海沿岸にかけての西日本一帯で約十数例が確認されている。

雷山神籠石の研究は江戸時代の貝原益軒に端を発する⁽²⁾。天保9年(1838)、伊藤常足は『太宰管内志』の怡土城の項に

怡土城の趾は雷村の西にあり。石壠の石今も残れり。又雷山の西の谷より北に流るる水あり。そこに大なる石樋を作りて谷水を其樋の内より下す。此水樋の内よりほとばしり出るさま世にめずらし。其水の落る所筒の如くなれば、筒の滝と云ふ。樋の上に城門を立てたりと云、其礎今に残れり。

と記している。

この説は貝原益軒の説を踏襲したものと思われ、永らく雷山神籠石は怡土城と考えられていた。しかし、江戸時代末になり、青柳種信の『筑前国統風土記拾遺』では、怡土城は高祖山である

とされ、以後、この説が正しいとされるようになった。

その後、小田部降叙⁽³⁾、島田寅次⁽⁴⁾、原田大六⁽⁵⁾らによって調査・研究が進められた。特に、原田の研究は東アジア史の流れを踏まえた上で、『日本書紀』の敏達天皇12年条の記載や神籠石の分布状況の検証から、国家指導の下で大陸からの防御を目的として築造された山城であること、石材加工技術に終末期の巨石古墳築造技術との類似点がみられることなどから

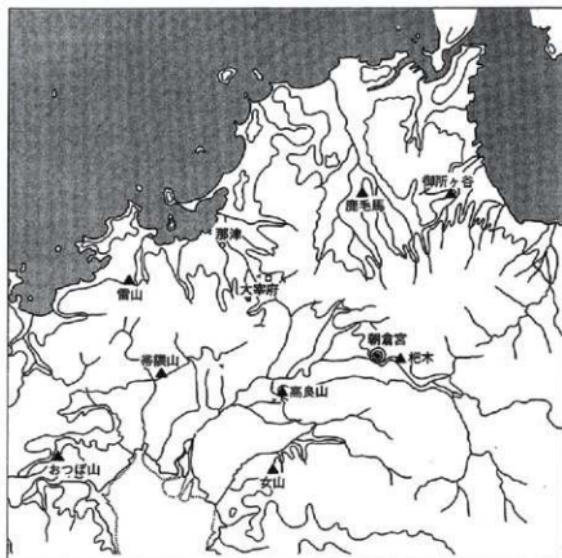


図2 朝倉宮を中心とした防衛プラン(1996年時点)

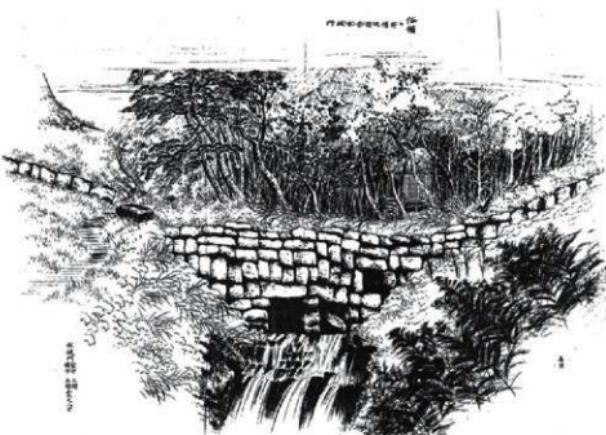


図3 雷山神籠石北水門

その築造の時期を6世紀末と推定した。また、列石には土塁や木柵が未確認であったことをとりあげ、城塞としての機能に乏しかったためにその機能を果たすことなく次代の本格的な朝鮮式山城に移行していくとする所謂「神籠石愚城論」を展開した。さらに、神籠石が高地から低地へと推移していくという想定の下で、雷山神籠石が他の諸例に比べ圧倒的に高所に築造されていることや水門構造の分析等をもとに神籠石の編年案を提示し、雷山神籠石を最古期のものと位置づけるなど、のちの神籠石研究に大きな刺激を与えるとともに、その後の神籠石の発掘調査に大きな影響を与えたことは特筆される。

この雷山神籠石に初めて調査の手が入ったのは大正15年(1926)で、松尾繁人・島田寅次郎による。水門・列石などの実測図が作成され、この調査の結果をもとに、昭和7年(1932)に水門・列石に沿って前後幅10mが史跡に指定された。なお、昭和35年(1960)にも林道拡張のため、拡張用地内における南水門に繋がる西側の列石の一部の調査が行われている⁽⁶⁾。この調査は原田大六が担当したが、その調査報告書は未刊に終わっている。

3. 踏査結果

(1) 北水門部

i. 北水門

北水門は尾根先端部の崖面上に位置し、花崗岩の路頭を基盤として切石を長さ約12m、幅約10m、高さ約3mに積み上げた強固な造りをみせる。この北水門の西端部上部には七郎権現の祠が所在する。水門の石墨は「重箱積」ではなく、基本的に横長の石材を少しずつずらしながら積み上げる「布積」工法で築造されており、底部に2ヶ所の水槽、さらに中央部西端部に1ヶ所の水槽を設けている。平素は下部2ヶ所の水槽から排水しているが、水量が多い場合石墨の中央部西端部に設けられた水槽からも排水する。この排水口である「北水門」から入水口の「南水門」までの水平距離は約730m、標高は南水門に比べると約21mほど北水門のほうが低位置に所在する。のことから、雷山神籠石の排水施設は極めて緩やかな勾配で構築されていることがわかる。



写真1 北水門

ii. 列石

北水門の東西両端から列石が北側に「ハ」の字形に開きながら、尾根頂上に向けて急斜面を登る。北水門の両端から東側へ約37m、西側へ約68mの列石が確認されている。雷山神籠石の外郭線は曲線的ではなく、直線を一単位としてそれが屈折しながら連続する「折構造」をもつことを指摘できる。また屈折する部分の列石上面には土壙構築のために高さを調整したとされる「L字形調整痕」が顕著に見られる。

さらに、北水門から西側へのびる列石の一部の上面には人工的な線が線刻されており、その線を基準にして「L字形調整痕」を施そうとした痕跡が確認できる。この人工的な線が線刻されている列石から、雷山神籠石の列石は、

①ある程度整形された切石を設置する→②切石を設置した後に上面の高さを揃えるために基準線を線刻する→③線刻を基準に「L字形調整痕」を施す
という工程をふまえて構築されたことが想定される。



写真2 列石



写真3 L字形調整痕基準線（上面）



写真4 L字形調整痕



写真5 L字形調整痕基準線（側面より）

Ⅲ. その他の遺構

その他の遺構としては、水門の石壘の上に礎石を2個確認できる。城門の礎石の一部と考えられるが、不明な点が多い。今後の調査・研究に期するところである。

(2) 南水門部

i. 南水門

南水門は雷山の二溪谷の合流部に位置し、その二溪谷からの2筋の流れに対処するために、2種類の水門（入水口）が設置されていたことが想定される。

その一つ目は東側の川筋に位置している石壘の一部に水槽を設けて、そこから流水するという北水門と同じ様式の水門である。現時点においては崩壊した石壘の一部を確認できる。その崩壊した石材の接合面から考えると、当該石壘も「重箱積」ではなく、「布積」工法で築造されていることがわかる。

二つ目は西側の川筋に位置している列石

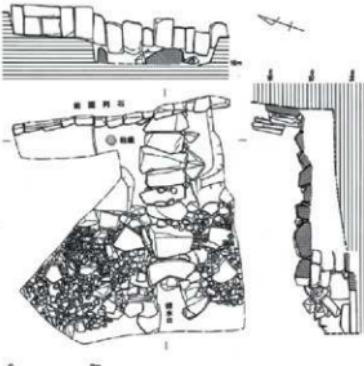


図4 鹿毛馬神籠石第2暗渠実測図



写真6 南水門暗渠（北から）



写真7 南水門暗渠（北から、現状）



写真8 南水門暗渠（東から）



写真9 南水門暗渠断面（東から、現状）

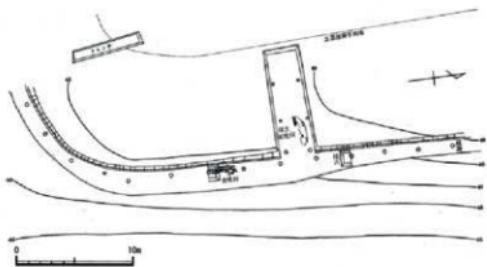


図5 おつほ山神籠石東門地形実測図

れていることがうかがわれる。またその写真と新たに出現した暗渠の一部(写真7・9)を対比すると、

- ①暗渠を石組みする→②暗渠のまわりに拳大の礫を裏込めする→③その上部に列石・土壙を構築する

という工程をふまえていることがわかる。ただし、2つの水門の間にテラス状の遺構らしきものがあり、そこにも拳大から人頭大の楕円形をした石材が比較的整然と組まれているのを断面で確認できる。このテラス状の遺構は2つの水門と何らかの関係があるのかもしれない。今後の調査・研究に期したい。

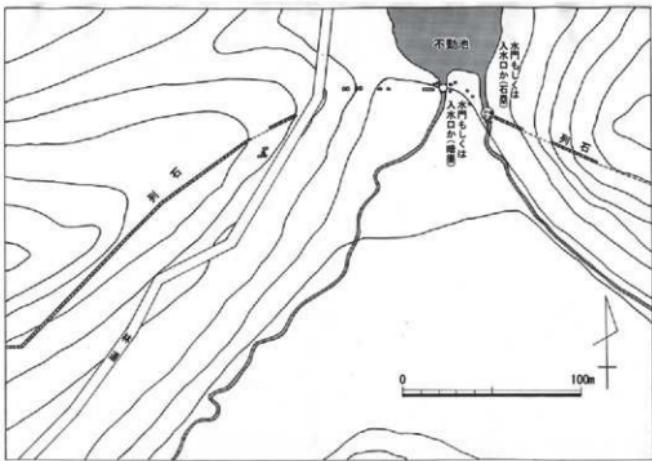


図6 雷山神籠石南水門周辺遺構配置図

ii. 列石

南水門の東西両端から列石が南側に「ハ」字形に開きながら尾根頂上に向けて急斜面を登る。南水門の両端から東側へ約132m、西側へ約171mの列石が確認されている。南水門の東西両端から派生する列石も直線を一単位としてそれが屈折しながら連続する「折構造」をもつこ

の下部(土壙の基底部の下部)に設置される「暗渠」様式の水門(入水口)である。残存状況から東西方向に走る土壙線に対して、南北方向に伸びており、その長さは約9~10mを測る。かつて向井一雄氏(古代山城研究会)が1989年5月14日に撮影した写真(写真6・8)によると、暗渠の構築は列石・土壙構築に先立って行わ

とを指摘できる。また、南水門の西端から派生する外部列石の内側（城内側）には幅約10mほどの土壘状の高まりが認められる。

iii. 城門

南水門は雷山の二渓谷の合流部に位置する。その二渓谷からの2筋の川筋に対処するために、2種類の水門（入水口）が設置されている。その西側の川筋に位置する「暗渠」様式の水門（入水口）から西側へ約20mほど列石線を追うと、約2.8mほど列石の切れ目を確認できる。おつば山神籠石や帶隈山神籠石の事例からこの列石の切れ目は内部に通ずる通路すなわち「門跡」に相当するものと考えられる。

また、東側の川筋に位置している石壘の一部に水桶を設けて、そこから流水するという北水門と同じ様式の水門から東側へ約150mほど尾根に沿って列石線をたどっていくと、約1.5mほど列石の切れ目を確認できる。この部分も「門跡」に相当するものと考えられ、特に入口の列石の上縁が正面と側面の両方に比較的丁寧に面取されている点も注目に値する。

以上、南水門の周辺には2ヶ所の「門跡」に相当する部分を確認している。

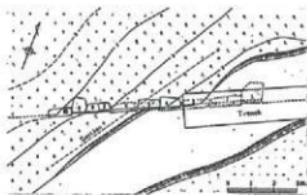
4. おわりに

1996年11月25日、雷山神籠石を踏査し、その成果をもとに整理したのがこの小稿であり、北水門部については主に以下の3点についてふれた。

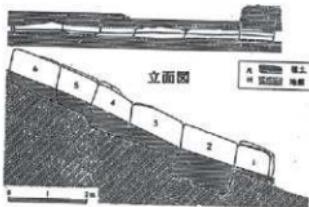
- ①北水門の石壘は「重箱積」ではなく「布積」工法で構築されていること。
- ②北水門東西端部から尾根に沿ってのびる列石は「折構造」をもつ。
- ③北水門西端部から尾根に沿ってのびる列石の一部には「L字形調整痕」の基準線と想定される人工的な線刻を確認した。

次に、南水門部に関しては、主に以下の3点についてふれた。

- ①南水門には「石壘」と「暗渠」との2種類の水門があったこと。
- ②南水門から尾根に沿ってのびる列石線において、「門跡」と想定される列石の切れ目を2ヶ所確認している。
- ③南水門から尾根に沿ってのびる西側列石線において、土壘状の高まりを確認した。



平面図



断面図



図7 雷山南水門西側石列の一部



写真10 南水門石壘石材の一部

先にも説明したように、雷山神籠石は林道拡張のための一部の調査を除いて本格的な発掘調査は行われていない。この小稿で言及したことはすべて踏査によるものである。したがって、将来発掘調査等によって、それぞれの遺構の解釈が変わってくる可能性も否定できない。そのため小稿では現在判明していることのみを列挙し、あえて他の神籠石との比較や雷山神籠石の位置付けを行わなかった。

註

- (1) 佐賀県武雄市史跡調査会1965「おつば山神籠石」佐賀県武雄市史跡報告
- (2) 貝原益軒 1709「簡城」「筑前國統風土記」
- (3) 小田部隆叙1897「筑紫國神籠石」
- (4) 烏田寅次郎1926「雷山神籠石(簡城)」「福岡県史跡天然記念物調査報告」第2集
- (5) 原田大六1959「神籠石の諸問題」「考古学研究」第6卷第3号
- (6) 原田大六1961「雷山神籠石の列石考」「古代学研究」第28号

図版出典

- 図1 古代山城研究会1998「溝瀬」第7号
図3 小田部隆叙1897「筑紫國神籠石」
図4 鶴田町教育委員会1984「鹿毛馬神籠石」
図5 佐賀県武雄市史跡調査会1965「おつば山神籠石」
図6 前原市役所より文書整理中に発見の図面を筆者がトレス。出典不明だが、昭和35年調査時のものか。
図7 原田大六1961「雷山神籠石の列石考」「古代学研究」第28号に一部加筆。

付編

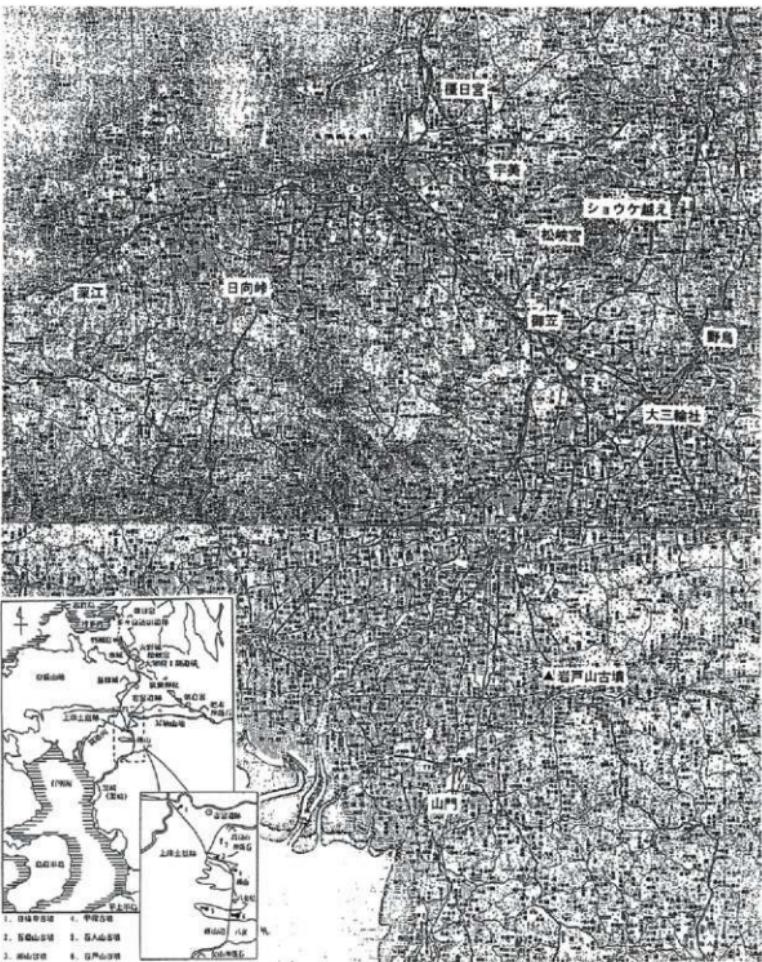
「日向峠越えルート」について

(1) 県道(大野城・二丈線)と沿線の地名

現在、県道(大野城・二丈線)に沿って、「深江」・「日向峠」・「宇美」・「ショウケ越え」の地名がある。これらの地名のうち「深江」・「宇美」は『日本書紀』・『古事記』に由来している。さらに、この県道(大野城・二丈線)に沿って三雲・井原・丸尾台・須玖岡本をはじめ数多くの遺跡が所在している。果たして、この県道(大野城・二丈線)と三雲・井原・丸尾台・須玖岡本などの遺跡の分布との関係は偶然によるものであろうか。この謎を解く鍵は「深江」・「宇美」の地名の由来などを説明する神功皇后伝承(『日本書紀』・『古事記』に限定)にあるようだ。

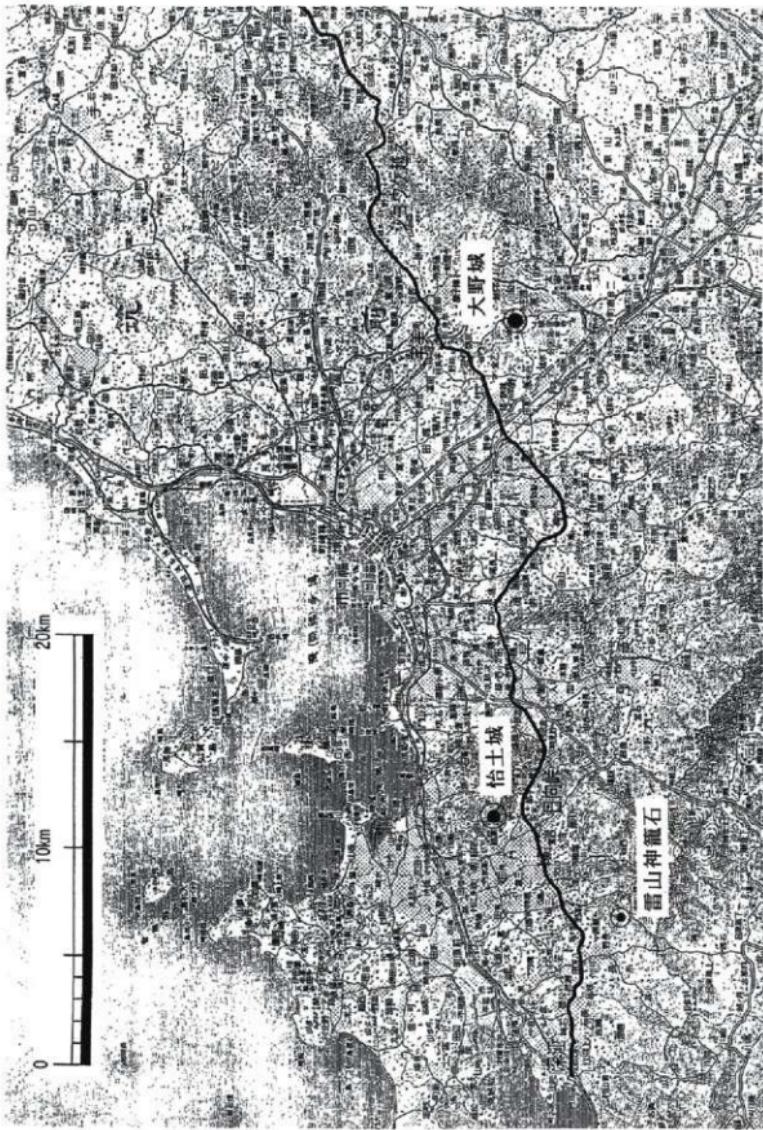
(2) 弥生時代の幹線道路と「日向峠」

『魏志倭人伝』によると末盧國・伊都國・奴國・不弥國等の記述が確認できる。唐津市付近(末盧國)、前原市付近(伊都國)、春日・福岡市付近(奴國)の遺跡分布をみると、各平野の中心的な遺跡は一本の道で結ぶことができる⁽¹⁾。現在、唐津から海岸沿いに深江にいたると、ここを起点とする県道(大野城・二丈線)によって日向峠越えの最短距離で春日市須玖にいたる。この道に沿って三雲・井原・丸尾台・須玖岡本をはじめ多くの遺跡が所在している。さらに、県道を東に進むと、宇美町を経由してショウケ越えで飯塚市にいたる。宇美は文献の上で、また立岩遺



跡の位置する飯塚は考古学的に、それぞれ「不弥国」に比定されることが多い。こうしてみると、末盧国→伊都国→奴国→不弥国は最短距離で結ばれ、そこに当時の交通路の存在がうかがわれる。その弥生時代の交通路に関して、「魏志倭人伝」によると倭国には「京都」＝「都」へ「傳送文書賜遣之物」するシステムがあったことが想定され、この末盧国から日向峠越えを経由して不弥国にいたる幹線道路が重要な役割を果たしていたと考えることもできる。

ところで、この末盧国から不弥国にいたる弥生時代の幹線道路に沿って神功皇后伝承（『日本書紀』・『古事記』に限定）に関する遺跡地が分布していることを指摘できる。そこで、『日本書



紀』・『古事記』に限定して神功皇后伝承をみていくと「深江」→「宇美」というようにその遺称地と児島・高倉両氏⁽²⁾の想定する弥生時代の幹線道路と一致してくる。あくまでも神功皇后伝承は史料としての信憑性を問われているためそれ自体は史実とはいえない。ただし、「日本書紀」神功皇后三十九年条によると「魏志にいわく」という記述があることから『日本書紀』の編者は『魏志倭人伝』を理解した上で編集したことがうかがわれる。このことから、二丈町深江から日向岬を経由して飯塚市立岩へと続くルートは『魏志倭人伝』すなわち中国の歴史書に記録されている史実であった可能性がたかい。その史実を『日本書紀』の編者が国家的意図の下に「神功皇后伝承」というかたちで改ざんしたのではなかろうか。そのために史実として記録にのこらなかったと理解できる⁽³⁾。

なお、このルートは古墳時代を経て、奈良時代まで存続している。その証として当該ルート沿線部に磐井の乱後肥君一族が進出しており⁽⁴⁾、さらに、雷山神籠石、怡土城、大野城等が築城されている⁽⁵⁾。

なかでも、怡土城に絞ってみていくと、海岸部に新設された奈良時代の「官道」と「日向岬越えルート」との三角州に築城されている。また、怡土城の望楼は両ルートを見渡すことができる位置に設置されており、このことから「日向岬越えルート」は時代を経ても新設の「官道」と同じくらい重要視されていたことがわかる⁽⁶⁾。

註

- (1) 長 洋一氏のご教示による。
- (2) 児島隆人 1969『立岩』学生社
高倉洋彰1982「九州本土とその周辺の弥生文化」「日本歴史地図」原始・古代編<上>の解説 柏書房
- (3) 瓜生秀文2001「神功皇后伝承覚書—神功皇后伝承で覆い隠された二つの史実—」『筑紫野市史』資料編(上)考古資料
- (4) 瓜生秀文2001「古代の御笠—筑前国御笠郡一帯への移住について—」『筑紫野市史』資料編(上)考古資料
- (5) 赤司善彦2004「北部九州の古代山城」「シンポジウム記録4 激動の七世紀と古代山城・吉備の鉄」考古学研究会
- (6) 前原市教育委員会2006『国指定史跡 怡土城跡』前原市文化財調査報告書第94集

・対談・・・・・

(大田) 講座の中では、神功皇后伝承をもとにお話しになりましたが、その中で、「日本書紀」の神功皇后の部分を編集した編者がどうも「魏志倭人伝」を読んでいたというお話をされました。もう少し詳しく説明していただけないでしょうか。

(瓜生) 皆様は既にご存知かと思いますが、かつて第2次世界大戦中には、神功皇后は実在の人物として教育されていました。しかし、現代では多方面からの考察の結果、架空の人物と考えられています。また、「日本書紀」を研究する際に、史料として信憑性があるのは応神天皇以降と考えられているため、「日本書紀」における史料の取り扱いはとても難しくなっています。なかでも、神功皇后の部分については慎重に接していくかないと大変な目にあう場所もあるのです。例えば、宇美町の「宇美」の地名の由来について「日本書紀」神功皇后条によると、「宇美」で応神天皇を産んだから「宇美」となったと説明しています。これは明らかに地名の由来を説明する作文ですが、その一方で神功皇后39年条他には「魏志に曰く」と明記しています。今回、神功皇后39年条他にみられる一部分の史実をもとに発表させていただいた次第です。

(大田) 神功皇后伝承を基にして想定された弥生時代のルートと古代のルートとの関係がやや分かりにくいため、ここで詳しく説明していただけないでしょうか。

(瓜生) 糸島地方には古代において2つのルートがあったと考えられます。その一つ目が海岸部に設置された奈良時代の官道。これは今日でいうハイウェイです。二つ目が、本日発表させていただいた「日向岬越えルート」です。このルートは、弥生時代においては中心的なルートでしたが、奈良時代になると、裏道になってしまふようです。ただし、裏道ではあったものの重要なことは間違いくく、このルートに沿って西から雷山神籠石、怡土城そして大野城が構築されています。その中でも怡土城に絞ってみていくと、奈良時代の官道と「日向岬越えルート」との間の三角州に築城されており、奈良時代においても、官道と同様に「日向岬越えルート」は重要であったことが伺われます。

(大田) ありがとうございます。雷山神籠石の城門が南北に設置されたのも、「日向岬越えルート」を意識して築城された結果でしょう。次に、未完成の国家プロジェクトの点について私も同感であり、政策が変更されたために雷山を含む一連の神籠石の築城が中断されたのではないかと考えます。ただ逆の見方をすると、国家プロジェクトが故に完成させるのではないかということは考えられないでしょうか。

(瓜生) 今日の研究史においては、神籠石の次が大野城・基肄城他となっています。また、拠点としては朝倉宮の次に大宰府政府へと変わります。政策が変更された以上、それに伴った朝鮮式山城の築城が実施されます。それは当然のことであり、神籠石の築城は中断を余儀なくされたのでしょう。ただし、だからと言って、雷山神籠石を含む一連の神籠石は全く捨てられたわけではないと考えます。軍事的な拠点であることは間違いないことであり、烽台などの二次的な利用がなされたと考えられます。

(大田) そのように考えると、神籠石という表現はおかしくはないでしょうか。名称が古代山城と混在していますよね。ところで、現地に行って本当に驚いたのが、国史跡指定の方法です。昭和7年の指定で、列石を挟んで10m前後を指定していますね。今日の城域全体を指定する方法とかなり異なっています。さらに、南北水門・列石の間には昭和11年に不動池という溜池が造られている。この溜池の部分は雷山神籠石の中心部と想定されます。その肝心な部分は完全に水没しているのですよね。

(瓜生) そうですね。

(大田) 今日では考えられませんね。

(瓜生) 当時の指定に至る経緯に関する記録がないため不明な点が多いのは事実です。なお、不動池について、「糸島郡誌」などを紐解くと昭和9年に記録的な大干ばつがあり、それに対応するために糸島地方においては不動池を含む大規模な溜池を造ったとなっています。

(大田) 現在でもその不動池は使用しているのですか。

(瓜生) 使用しています。ただし、現在水没している範囲で不動池を造る際に、大規模な土採りなどが実施されたとは聞いていません。ですので、遺構があるとすれば、そのまま眠っていると考えられるので、将来追加指定して、発掘調査などを実施することは可能と考えます。

(大田) 話題は変わりますが、地元の方は雷山神籠石についてどのような認識をされていますか。現況から判断して、「結界」といってもおかしくないような状況ですが、やはり「城郭」として認識されているのですか。よろしかったらお教えください。

(瓜生) 多分、大多数の人が「ただ石が人工的に組んである」くらいの認識でしょう。「大切な遺跡の一つが地元にある」という事だけでも地元の住人に認識していただけたら良いと考えています。雷山神籠石が「結界」であろうと「城郭」であろうとどうであれ、地元の人々に雷山神籠石という遺跡を守ってもらうことがベストと考えています。

(大田) ありがとうございました。今日の講座の中では、考古学的考察のみならず、文献史学の立場からもいろいろと考察頂き大変面白かったです。

(瓜生) 最後に、雷山を含む一連の神籠石の築造に関する文献史料について若干補足させてください。『日本書紀』齊明天皇条の一部に「是に由りて国家、兵士甲卒を以て、西北の畔に連ぬ。城柵を繕修ひ、山川を断ち塞ぐ兆なりといふ。」とあります。かつて、神籠石の築城年代について『日本書紀』のそれらしき記述をもとに考察してきましたが、神籠石の構造・築城技術等の観点から、遺構と文献史料との両者が時期的に一致することはあまりありませんでした。その問題を解決したといわれているのが前述の齊明天皇条に着目して考察した渡辺正氣先生の説です。前半の部分を齊明天皇の西下、後半を一連の神籠石の築造に関係する記事と説明しています。今日では最も支持されて

いる学説です。紹介だけさせていただきます。また、「日本書紀」の齐明天皇に関する記述で面白い部分があります。それは齐明天皇崩御の後、遺体が筑紫から大和に戻るのですが、その途中で「鬼」がその様子を眺めていたという記述があります。これは何を意味しているのかわかりませんが、日本歴史における最古の「鬼」の記述であることは間違ひありません。視点を変えてみると新発見があるかもしれません。ありがとうございました。

高安城の発見と発掘

棚橋利光

1. 市民が探した高安城

高安城を探る会は、昭和51（1976）年に古代山城高安城跡を探索し、その遺構を発見しようと集まつた市民グループである。高安城は畿内に位置する山城として、『日本書紀』の天智、天武、持統、文武の各天皇時代の記事、『続日本紀』の元明天皇時代の記事に多くの記載があり、白村江の敗戦後の倭国大和政権を守る山城として、九州の大宰府を取り巻く大野城、基肄城、それに当地の鞠智城、対馬の金田城、瀬戸内の屋嶋城などとともに重要な古代山城であった。

しかしその場所については判明していらず、江戸時代の『河内名所図会』などには、河内国高安郡服部川村の東にそびえる高安山山頂にあったと書かれているぐらいであった。山の向うは奈良県平群町の山が信貴山まで続いている。古代山城の研究の一環としての高安城についての論文が書かれたのは、大正7（1918）年、東京帝国大学の関野貞博士の「天智天皇の高安城」（『奈良県史蹟報告』第五）が最初である。大正11（1922）年には喜田貞吉博士が「学窓日記－生駒から志貴山へ－」（『民族と文化』7-1）を書かれている。戦後では齊藤忠博士が『日本古代遺跡の研究』論考編（昭和51年）で高安城に関する地元の伝承を記録している。

市民の手で高安城の遺構を探し、場所も確定したいと思ったのは、城があったといわれる高安山を毎日仰ぎみている私たち八尾の市民の想いであった。古代史で有名な山城があるのに、場所も遺構もわからっていないことを残念に思った。発起人で発案者は会社勤めの岩永憲一郎氏で、「いっぺん山に登ってみませんか」と仲間を集めた。それに高校教員の私、古城の研究家、主婦の二人が発起人となり、高安城を探る会を発足させたのであった。山歩きで最初に歩いたのは、関野説の「天智天皇の高安城」の推定地であった。関野博士は奈良県の史蹟調査委員の方々と8月の暑い日に、1日かけて奈良県側の信貴山から高安山への尾根を歩いて、高安城の範囲を推定され、関野説を報告書に発表されたのである。私たちは、その関野説の推定城域線を、地図を片手に山中を歩いたが、見たのは雜木林と山の尾根、谷ばかりであった。しかし、古代山城とはこういう山中にあることを初めて体験し、是非、多くの人に呼び掛けて、探索を大勢の仲間とやりたいと思うようになった。

その後、八尾市の記者クラブで、この抱負を語ったところ、朝日・毎日・読売・産経、それと地方紙の記者の賛同を得て、「市民が探る高安城」、「幻の高安城、この秋、人海戦術で探る」など、各紙に載せていただき、「幻の高安城」探しは、多くの市民の賛同をえ、瞬く間に会員数は130余人にまでなった。

それから12月までは、1月1回の例会で古代山城の勉強を重ね、冬季を中心に毎回30余の人たちと山歩きを楽しみながら、高安城の遺構探しを続けていくことになった。山中の岩も平地も、山麓の畠の石垣も、平らの尾根、谷の池の石垣など、何を見ても高安城と思い、写真を撮り、計測する日々が続いた。探索は楽しい山歩きでもあった。

この時期、私は信貴山縁起の「飛倉の巻」で有名な、山中で廃屋となっていた命運聖の倉が、もしや高安城の倉ではないかと思い、命運が毘沙門天の厨子仏を探し出した山歩きと重ね合わせて、想像を豊かにして歩いていたのであった⁽¹⁾。

2. 発見の喜び

高安山の探索を続ける中、月1回の例会では文献を読む勉強会をし、その合間には高安城の遺構かという論文があった生駒シガキ⁽²⁾、また壬申の乱に関連する龍田越え道を歩くなどの見学会をした。また昭和51(1976)年には2泊3日で屋島城と城山(神籠石系山城)を見学し、「屋島にこんな大きな土壘があるのに、高安に何もない筈がない」と、希望を膨らませせたりした。

その後、探索を初めて2年目の昭和53(1978)年の正月には九州の大野城・基肄城等を見学した。3間×5間、3間×4間の整然と礎石が並んだ倉庫跡建物群を見た。中でも猫坂礎石群では、掘立柱のあったことを示す柱跡に木を植えた掘立柱倉庫が礎石建物と並んでいるのに注目した。もし高安城の倉庫も掘立柱ならトレチ棒(柄の付いた手製の鉄の探索棒)の探索道具では、発見は難しいと話し合ったことであった。予想もしなかったが、この年4月2日が高安城の遺構(礎石建物)の発見の日になったのである。

発見の日のことは、平成18年度第7回館長講座『高安城跡』で、次のように話をした。
「53になって、お正月の15日に、太宰府天満宮をお参りして、それから大野城のある山の上に登ったんです。太宰府天満宮はみんな受験シーズンの前ですから親子さん達が皆折ってはるんですね。私達グループで旅行に来た奥さん方も、息子が今受験シーズンでえらいとこ、こんなとき来て悪かったかなとか、自分の息子ほついてこんなことしてって言うてはりましたけどね。とにかく、その時にその上に上がってね、上がったら大野城で礎石が並んでいますでしょう。それを見て「こんなのがあったらええな」と言うて。間隔は2m10cmあって。そんなことも頭に入っていたんですね。」

4月2日のこの日、平群町久安寺の山中に金ヤ塚といって、信貴山の釣り鐘を掘りだしたという大きな穴の開いた塚状のものがある尾根に来て、村の老人から説明を受けていた時に、一部の人が説明を聞かずに、周りの雑木林の中で、トレチ棒で地面を突いていたら、大きな石が埋まっているような、カーンという音がしたのである。皆が集まって、表面を掘り出し、これは何やと話し合っていた時、誰言うともなしに、2m10cmとなり、そこを突くと、またカーンと、石が当たった。また当る当るといっている間に、3間×4間の建物の礎石が埋まっていることにびっくり、大発見となった。一同興奮気味のまま幕かかる山道を下りたのである。翌週、またその翌週と山に登り、一つの尾根から6棟分を探し出した。それぞれみな地下に埋まっているので、トレチ棒で地面を刺して、石の大きさを確かめた。それから所在地の平群町や奈良県教育委員会に発見届けを出したのである。

その後、当時文化庁におられた水野正好氏に連絡、奈良国立文化財研究所の坪井清足所長等の方々に見てもらったり、同志社大学森浩一教授の古代学研究会の方々が大挙して見に来られたりして、新聞・テレビの発表となり、市民の見つけた高安城のニュースが大きな報じられることとなつた。

3. 発掘結果の驚き

発見の興奮と喜びが続いている間、発掘が始まるまでの数年、いやそれ以後も、多くの古代山城を見て回り、新しい発見に繋げようとした。岡山県鬼ノ城は発掘のための学術調査団が結成されようとしていた。大野城では渡辺正気先生、横田義章先生にお世話になり、対馬金田城では永留久恵先生に案内をもらつた。韓国では忠南大学の成周鐸先生に扶蘇山城や三年山城を案内してもらつた。喜びの日々であった。

最初に鞠智城に行った時は、昭和54(1979)年3月のことであった。当時の思い出は次のようにあった。「米原集落の入口は広く平らな麦畠となっている。麦はまだ背は低かったが、青さが目にしむ。ここを長者原という。道路脇に長者原礎石群と書いた標柱が目につく。車を止めるのもそこそこに、興奮してカメラを持って飛びおりる。

道端に高安城でみつけたと同じ礎石があちこちころがっている。大きさも1メートル前後、上面は平たい。鞠智城のまん中にいるという興奮があった。

礎石は117個ほどがすでに掘り出され、道にころがっているという。原位置から動いているのが大変おしい。久安寺の腹痛石も、このような掘り出された石かもしれない。

礎石の写真をとったあと、岩永さんは畑にかがみこんで、いっこうに動こうとはしない。私は周囲の地形や集落の写真をとる。そのうち岩永さんが焼き米十粒ほどを大事にかかえて帰ってくる。「この焼き米を拾いたかったのですよ」といった。拾えて満足、来たかいがあったと、しきりに感動されている。」この後、親切な村のご老人に教えてもらい、土星線のある尾根にのぼり、すずみの御所などを見て帰った。最初の印象は生々しく残っている⁽³⁾。

昭和54年10月に奈良県教育委員会の中に高安城調査委員会が設置され、市民の発見した高安城跡を放っておくわけにはいかないとして、発掘の段取りが話し合われることになった。

最初の発掘は大阪府教育委員会が昭和56年3月に高安山頂で行い、翌昭和57年3月、奈良県橿原考古学研究所が、私たちが発見した2号礎石建物を発掘することになった。何分山の上の不便なところで、発掘補助員が集まりにくいので、私たち高安城を探る会の女性会員や子供に当る大学生にも発掘手伝いが認められた。親が見つけた遺跡を子が掘るという嬉しいことにもなり、みな一生懸命発掘を手伝つたのである。

2号建物の発掘では礎石は2個欠落していたが、3間×4間の礎石建物であることが確認された。時代を判定するものとして、中央の礎石の掘り方の中から礎石を据えた時にいたと思われる土師器が数十個分出土したことが大変な収穫であった。これについても館長講座の当日、スライドにして見て頂いたところである。その部分を引用すると、次のようになる。

「これが礎石ですね。この円が書いているのが掘方、礎石を備え付ける為に掘った穴ですね。だから穴を掘って礎石を置いて、もう1回土を埋めなんですね。その時に、埋め口のこの所に土器がバーッと詰めてあったんですね。その土器が図面にあるこういう土器です。特にこの辺りですね、これは皿っていうんですか、盤とかいうんですけども、暗文といって綺麗な模様があって、色も赤茶色の綺麗なんですよ。大きいんです。30cmくらいの大きな皿です。こういうのが出てきましてね。この皿が、奈良の平城京の長屋王の家というのがありますて、その長屋王の邸宅の横と溝に、これとほんまによく似たものが出てきたんですね。その時に、溝の中から木簡というのが出来まして、それでいくと720年から730年ぐらいの木簡が出てるんですね。ですから、この土器類は720年から730年ぐらい。奈良時代の初期とこれは断定されたわけです。綺麗な土器ですよ。同じ土器でもむこうの



図1 高安城倉庫跡礎石（2号建物）



図2 2号石垣建物跡出土土器

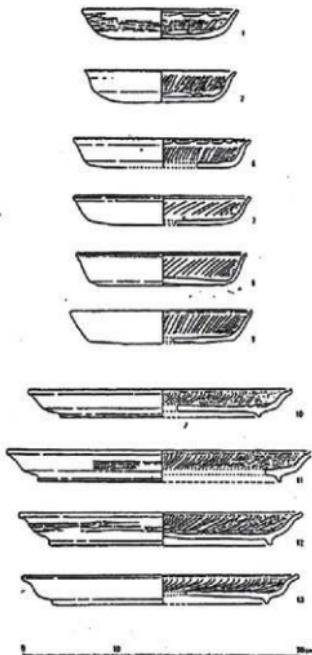


図3 暗文のある建物中央礎石据え付け穴出土土器
(1981年度、高安城跡踏査概報1より)

土器、平城京の土器はみな泥の下に埋まっていますから色も汚いんですけどね。これは埋まつませんから本当に前のままの状態でね、綺麗な赤色ですよ。この土器から、これを建てたのは720から730年代となったわけですよ。」この土器の感触は、平成10年、八尾市立歴史民俗資料館で「高安城と古代山城」展を開催した時、平城京の土器を借り出しに行った時の感想である⁽⁴⁾。

このように発掘の結果、礎石周りなどから土器が出土した。その土器が平城京長屋王邸近くの溝から出土した暗文のある盤(大皿)などと同時代とわかるようになり、高安城を探る会が発見した礎石建物は奈良時代の720~730年代のものと判定された⁽⁵⁾。

翌年の昭和58年3月の3号礎石建物の発掘でも、土器をまとめて埋めた穴が見つかり、土器の時代そのものも変わらないものであることが判明した⁽⁶⁾。

こうしたことから、私たちの発見した礎石建物は高安城のものと専門家から認められたが、「天智天皇の高安城」を発見したと思っていた夢を打ち砕いてしまった。古代のロマンは、やはり天智、天武、持続時代の方が強くあるのだろうか。

その代わり、新しい問題も出てきた。高安城は『続日本紀』によると、大宝元年(701)に廃止するとあり、また和銅5年(712)には元明天皇が高安城に行幸するとあるが、これと今回の礎石建物とはどういう関係があるのか、元明天皇の行幸に何の意味があるのか、考える必要が生じてきた。再築城とすれば、平城遷都後に国内問題により再築城の動きがあったのか、新羅との関係で緊張が出てきたためか、唐との関係か、謎は、大きく広がることになった。

当時の新聞で見ると、高安城跡調査委員会でも、唐と親善をはかるというタメマエと防衛の

ホンネから出た偽装廃城だとの意見があったとある。一方で高安城は一度廃城のあと、対外緊張の高まりで再構築されたとすると調査結果が合うという指摘もあったという。

これはともかく、天智天皇の高安城でなかったことは残念ではあったが、私たちの発見した礎

石建物が高安城のものであるという奈良県高安城調査委員会の結論がうれしいことであった。しかし、一般には、廃城後の建物であるので、高安城ではない、寺院の建物であろうかとか、いろいろな見方をいわれて、会員も動搖した。発見から30年たった時でも「幻の高安城を求めて30年、尋ね当てたものは、それは何だったのか」と考える人もいる。「天智天皇の高安城」を発見できなかった落胆の大きさがうかがえる。

私はこう考え、会員にもいった。この高安山中、6棟もの古代の礎石建物だけの遺構は高安城しか考えられない。信貴山寺のものではない。大野城の3間×4間の礎石建物と何ら変わるものがない。立地もそうである。廃城の命令があったとしても、この建物を見る限り、新しく建てた高安城の倉庫に違いない。あの大宰府でも廃止の命令が出て、まもなく復活した歴史がある。それに、大宰府の建物は天智時代などの初期の第Ⅰ期は掘立柱建物で、奈良時代になる第Ⅱ期になって初めて礎石建物になったのではないか。高安城が掘立柱倉庫から礎石倉庫へ建て替えられても何ら不自然ではない。高安城は『統日本紀』の記述のように、元明天皇の時代に復活があり、新しい礎石建物が建てられたのであろう。それで行幸もあった。記事の錯誤ではない。このようにいい、落胆した会員に、私たちは正真正銘、市民の手で大発見をしたのであると思ってほしかつたのである。

4. 見落としていた視点・平城遷都と国防

平成20年、私は八尾市にある称徳天皇・弓削道鏡の由義宮の講演を依頼された。難波宮、藤原宮、平城宮など、宮都に関する連続講座の一つであった。由義宮での天皇の生活を考えるに当り、平城宮での称徳天皇の西宮の位置が知りたかった。平城宮発掘の報告書を読む内、西宮の位置の議論は長年続いたが、最近は第一次大極殿が恭仁京遷都で移転した後に、その場所に建てられたのが西宮の建物群であったとされるようになった。西宮の中心建物は高床式で和風へ移る特徴があり、平安時代に入り、一時平城天皇の住居となったところでもあったことを知った。一番の驚きは、もとの第1次大極殿の建物で、その巨大さ、中国宮殿風の建物は、これまでにない建造物で、唐国に並ぶ、日本の国の立場を強調する姿を見せる意味もある宮殿であったという。その後、奈良では平城遷都1300年祭の計画が実行されるようになり、第1次大極殿建物を復元する工事が始まった。史跡ハイキングで平城宮跡を通る度に、建築覆い屋の大きさを見て、完成後の姿に期待を持った。平成22年(2010)3月、いよいよ平城遷都1300年祭が始まり、復元完成された第1次大極殿建物が一般に公開された。5月の平日に見学を行ったが、大盛況であった。第1次大極殿は文字通り、壮大なもので、當時の日本の朝廷の意気込みを感じるに十分であった。

この頃、古代山城研究会の向井一雄代表から、9月11~12日に九州国立歴史博物館の一室を借りて、山城の建物を中心に議論する夏例会(第42回例会)を開きたいので、高安城礎石倉庫の発表をお願いしたいとの電話があった。有難く受けした。発表に当っては、高安城では廃城の命令が出た後、なぜ



第4図 復元された平城京第一次大極殿

和銅5年(712)に元明天皇が高安城に行幸したのか、また発掘結果から分かったことであるが、720~730年代に礎石倉庫が少なくとも6棟以上、建設されたのは何故か、これを考え、発表したいと思ったのである。

私が注目したのは「平城遷都と国防」であった。これまで私自身が全く見落としていた視点であった。国防とは国に危機が及んだ時にするものだと思っていたが、これは全く平和馴れした自身の狭い料簡であった。私は権力とは無縁の生活をしてきたので当然ではあるが、古代の国防を論じる時は、古代の為政者・権力者の考えに立たなければならぬと思った。国防とは国家がしっかりした時、国家権力が確立した時にこそ、その権力と富で軍事力を備え、また国防策が進められるものであろう。内政・外交とも確とした軍事・国防策がなされないと国の滅亡が早くなる。

白村江の敗戦後の烽火、防人、山城の国防策は、差し迫った唐の侵攻への備えとしてであって、これは国防の一つの姿ではあるが、これとは違った国防の姿を私が見落としていたことに気が付いた。

滝川先生は日唐戦争といわれたが⁽⁷⁾、白村江の敗戦後の唐との緊張の中で大宰府を建設、水城の構築、大野城・基肄城などの山城の築城をして非常に備えた。この防衛体制は天武、持統、文武と続く。天智期から30年余経って、藤原京の新都も設け、本格的な律令である大宝律令を制定し、遣唐使も派遣できる状況になった。この時、高安城も廃城になったのであるが、ここで一つの時代が終わり、次の時代が始まる。

栗田朝臣真人らの遣唐使の見たものは、白村江戦時代の世界と違った、新しい東アジアの国際情勢、状況であった。唐は西域の国々と通好し、東の朝鮮半島を統一した新羅を実質的に認める方向にあり、新羅の朝貢を認めていた。新羅は唐国では日本より大国、上位の国になりつつあった。藤原宮を造り、国内的に満足していたであろう状況のもと、為政者の意識は見事に打ち砕かれたのではないか。神功皇后以来、三韓や任那を朝貢国に見なしてきて、実際の外交でも、その態度を取り続けていた日本にとって、その東アジアの世界観を維持するため、また西の世界の中心唐国に張り合うためには、東の世界の中心日本は外面向に藤原宮の宮都では満足してはいられない状況であった。政治を動かす大宝律令は唐の律令に倣い、日本の国情に合わせた恥ずかしくない法律であったが、目に見える官都、外交使節を迎える儀式や設備、国の玄関口にある大宰府の建造物、仏教寺院の大きさ、山城や兵士といった軍防(国防)施設、これらの面で、西の中心唐国とは、格段の差がある状況があったのである。それを意識しての新しい国造りが、700年代に入り始まろうとしていたのである⁽⁸⁾。

平城遷都はその表れであり、第1次大極殿の建造はその最初の大工事であった。当然、日本の玄関口の大宰府も立派にし、また大野城・基肄城などの山城も、威力ある姿に再構築することになったものと考える。国力を示す平城遷都とともに、大宰府も山城も再整備する必要があったのである。平城遷都というのは、こういう意味で国防策に大きな変化をもたらしたものと考える。私に欠けていた視点とは、こういうことである。勿論、この国防の再編がどの程度行われ、その意識がいつまで持続したかは、その次に考えるべき事柄である。

5. 大宰府と古代山城

平成22年の古代山城研究会の夏例会では、平城遷都後、大宰府の建替え、山城の整備の中で、高安城も礎石倉庫が建てられ、元明天皇の行幸が実現したこと、高安烽が廃止されたのは平城遷都のためで、高見烽や春日烽が設置されるという再編があったこと、これらは平城遷都後の新事

態であったことを報告した。これとともに、大宰府と古代山城では、どのような新事態になったか、発掘結果からどのような時代判定がなされているか、発掘例を見、考えたいと思ったのであるが、ことは簡単ではなかった。

まず大宰府であるが、大宰府の歴史、主としてその大宰府政府跡の建物の建替えの歴史から見ると、大きく3期に分けられるように云われている⁽⁹⁾。

政庁第Ⅰ期 7世紀後半から8世紀初葉、大宰府政府創建期、掘立柱建物群

政庁第Ⅱ期 8世紀初葉から10世紀中葉、朝堂院形式創建期、礎石建物

政庁第Ⅲ期 10世紀中葉から12世紀、朝堂院形式整備拡充期、礎石建物

これでみると、第Ⅰ期は天智天皇時代に始まった大宰府政府創建期から粟田真人遣唐使の派遣、奈良時代初期まで、第Ⅱ期は平城遷都の奈良時代初期から天慶の乱で焼失するまで、第Ⅲ期はその後の整備再建、拡充期で、12世紀の建物崩壊までと考える。

白村江直後、天智天皇時代に始まった大宰府政府は、これまで長らく現存の巨大な礎石を持った正殿遺跡がそのまま天智期の政府跡と考えられてきたが、実はそうではなく、第Ⅰ期の建物は掘立柱の建物であったことがわかったことは発掘調査の大発見であった。それが第Ⅱ期に入り、政庁が朝堂院形式に建替られた時から礎石建物になる。8世紀初頭から何故大宰府は朝堂院形式の建物になったのか、これは隣国・藩国の使節などをを迎える儀式の場、儀礼の場として、平城宮に呼応して整備されたものと考えられる。天智天皇時代の当初の大宰府政府がどのような姿であったかはまだわからないのであるが、奈良時代初期から礎石建物になったという変化は大きな改変であると考え、重視したい。

それでは次に国防の象徴的な姿を示す山城はどうであろうか。

大野城には現在は70棟余りの建物が確認され、食糧の備蓄や居住に利用されたと考えられている（特別史跡大野城跡整備事業、平成18年）。その大部分は倉庫風、倉庫と考えてよい建物である。倉庫は礎石総柱で、側柱だけのものは倉庫以外の物と考えられている。主城原地区などには普通官衙風、役所風の建物もあることが発掘により確認されている。多くの発掘例から大野城で一般的な普遍的なものは3間×5間の建物で、柱間寸法が210cmの礎石総柱の倉庫風建物である。この一般的な建物から見て前後関係が考えられている。またほとんど地山削平しないものと、山の斜面を大規模に削平して建物を作っているものとに時期差が有る可能性が考えられている。また瓦や須恵器の出土があり、時期の確定に参考になる。

倉庫建物の年代については、横田義章氏が掘立柱倉庫から礎石倉庫への変遷を試みられているが、実年代の考察では掘立柱建物SB064（3間×7間）が第Ⅰ期A（前半）のもので、大野城草創期の中核的建物かと考えられ、天智4年（665）から天智9年（670）の間の建物とされている。大多数の礎石倉庫の実年代までは言明されていない。この時期、関心の中心はやはり創建期の天智時代にあったことを示している⁽¹⁰⁾。

太宰府口城門の年代も、まだ固まっていない。先の藤井・亀井両氏の『西都大宰府』（昭和52年）では、太宰府口城門の変化は、大宰府政府が掘立柱から礎石建物に変化していくことと対応しているのであろうかと、述べられている。しかし、この改修の時期は現在何ともいえないと書かれている。整備報告書にも実年代は書かれていない⁽¹¹⁾。

結局、大野城の70棟以上の倉庫建物については、掘立柱倉庫から礎石倉庫への変化は凡そみとめられているが、時代判定を示す発掘資料がないのであろうか、大宰府政府跡第Ⅱ期の年代ほど、はっきりと結論付けされていないのが現状のように受け取れた。

基肄城の礎石倉庫も出土瓦から、創建当時のものと概略的にいわれているにすぎない。対馬金田城では、掘立柱建物が 2 棟発見されているが、城門の建物との時期的な関係は未詳である⁽¹²⁾。

当地の鞠智城の倉庫については、倉庫間の切り合い具合から、考察がなされているが、2002 年の第 2 次保存整備事業基本計画と 2010 年鞠智城東京シンポジウムの報告書、この二つの時期の違う報告書を見る限り、掘立柱倉庫から礎石倉庫への変化が凡そ予想されているようであるが、なかなか実年代時期を示すことが難しいのが現状のように見受けれる⁽¹³⁾。

鬼ノ城についても、総柱礎石建物 7 棟余のほか、最近掘立柱建物 1 棟が発見されたが、時期的な関連はわからっていない⁽¹⁴⁾。

こうみると、8 世紀初頭、大宰府政庁跡では朝堂院建物への変化にあわせて、礎石建物への変化があったことが判明したが、これに伴う形で、大宰府管轄下の山城、その他の地域の山城で、掘立柱建物から礎石建物へ移行したかどうかは、時期も含めて、まだまだ確定することが出来ないように見えるのである。

6. 高安城は貴重な山城遺跡

高安城を探る会が発見し、奈良県立橿原考古学研究所が発掘した高安城の倉庫は、礎石掘り方内部から出土した土器から、720~730 年代の時期が判明したことは、古代山城の倉庫の時期判定では唯一の事例であることがわかつていただけたと思う。またこの時期と生駒高見烽と春日烽の設置、元明天皇の高安城行幸から平城遷都後の国防の再編が推測されるなど、この発見と発掘は大変大きな意義を持つことを認めてほしい。

高安城については、「日本書紀」の記述から、天智、天武、持統、元明の 4 天皇が行幸したこと、倉庫に穀と塩を積んだこと、その倉が壬申の乱で焼かれたこと、修理の記事があること、廃城の記事があること、平城遷都後、高安烽を廃止して生駒山高見烽と春日烽への烽網の変更があったことがわかるのであるが、その上、発掘によって、奈良時代前期に礎石倉庫へ建て替えられたことが判明していることなど、貴重な山城遺跡である。

今後は、天智天皇時代の掘立柱倉庫や城域の確定など多くの課題を残している。

註

- (1) 橿橋利光 1977 「信貴山寺と高安城」「河内どんこう」 5 号、6 号(櫛橋利光 1985 「古代高安城論」 高安城を探る会に所収)
- (2) 京谷康信 1932 「大和生駒山のシガキと高安城私考」「考古学雑誌」 22 - 3
- (3) 高安城を探る会 1979 「日本古代山城の印象」「夢ふくらむ幻の高安城(第四集)」
- (4) 八尾市立歴史民俗資料館 1998 「高安城と古代山城」 平成 10 年度特別展図録
- (5) 「高安城跡調査概報 1、1981 年度」「奈良県遺跡調査概報 1981 年度」
- (6) 「高安城跡調査概報 2、1982 年度」「奈良県遺跡調査概報 1982 年度」
- (7) 滝川政次郎 1971 「日唐戦争」「皇学館論集」 4 - 3 (通巻 20 号)
- (8) この藤原宮から平城宮への遷都については、次の書などを参照
金子裕之 1994 「藤原宮」「季刊考古別冊 5」 雄山閣出版
井上和人 2008 「日本古代都城制の研究」 吉川弘文館
- (9) 藤井 功・亀井明徳 1977 「西都大宰府」
横田賢次郎 1983 「大宰府政庁の変遷について」「大宰府古文化論叢」 上巻 吉川弘文館

九州歴史資料館2002「大宰府政府跡」

- (10) 横田義章 1982 「大野城の建物」 福岡県教育委員会編『特別史跡 大野城跡V』
横田義章 1983 「大野城の建物」「大宰府古文化論叢」上巻 吉川弘文館
- (11) 福岡県教育委員会 2006 「特別史跡大野城跡整備事業」
- (12) 美津島町教育委員会 2000 「金田城跡」
第42回古代山城研究会夏例会資料 2010
- (13) 大田幸博 1993 「鞠智城から検出された建物跡について」「古文化談叢」第30集(下)九州古文化研究会
熊本県教育委員会 2002 「鞠智城第2次保存整備基本計画」
矢野裕介 2010 「鞠智城の調査成果」「鞠智城東京シンポジウム」
- (14) 岡山県教育委員会 2006 「国指定史跡鬼城山 国指定史跡整備事業に伴う確認調査」

・対談・・・・・

(大田) 高安城跡は、都に近いところに立地していて、場所的には最も重要な場所にありますので、常識的には、誰が見ても分かるような大規模な城跡があつて良いはずなんですが、講座でのお話にもありましたように、まだ城の輪郭がはっきりしていないというような話がございました。私たちが高安城跡を訪れた際に、非常に共通性を感じましたことは、山口県の長門城、ここも九州と関門海峡の境にありますから絶対に城がなければならぬ所で、堅固な城があるはずなんですが、ここも全く場所が分かっていません。場所さえも確定されておりませんので、非常に似てるなというような感じがしました。それから、高安城の場合には、生駒から長広い瘦せ馬の背中のような尾根がずっと下ってまして、その一角にありますけども。見た感じでは四国の屋嶋城に地形的に似ておりましたので、屋嶋の繩張りあたりが参考になるんじゃないかなという感じはいたしました。そこですが、先生の方に少しお話しをお伺いしたいと思いますが、「高安城を探る会」で建物跡 6 棟を発見されておりますよね。それで発掘しましたのは、2 号建物跡と 3 号建物跡だけで、後は発掘してないんですね。この 2 号、3 号建物跡を発掘の対象として選ばれた理由というのは何かあったんですか。

(棚橋) 2 号建物跡を選んだ理由は、私たちが発見の時に表面を出したものですから、そういうこともあってますそこから発掘されたということです。3 号建物跡は 2 号建物跡のすぐ横にありましたので発掘してもらいました。特にそれくらいの理由しかありません。ただ尾根の上から 1・2・3・4 号建物跡と番号は付けていますが、一番発掘しやすい場所でもあったんじゃないかなと思いますが。

(大田) もう随分長いこと現地の方で、「高安城を探る会」の方々で踏査されていますが、ボーリング式による調査では今のところ平場での建物跡は 6 棟以外にはないという状況ですよね。

(棚橋) 発見した所を後からよく見ると、非常に山の中にかかわらず、平場を造っているんですね。だから、そういうところは今のところ、この辺にはあまり無いんですね。ところが魅力的なところが、信貴山の朝護孫子寺の奥の院なんですけど、ここはお寺の境内、山の尾根ですけど、焼き米が出てくるんです。焼け米とお寺は言っていますが、焼け米は拾えるんですね。これはひょっとしたら高安城の米じゃないかなと思ったりしますし。他に、七倉・高倉・モミノオ、こういう小字名が残っているところも有力だと思うんですけど、ここはもう集落になっていて、昔その平地をうまく利用して民家が建っています。だから、そういう意味ではなかなか今後も探すというても、なかなか探す場所がないのが現状なんです。

(大田) 鞠智城もですね、昭和 62 年頃から県が積極的に調査をして全部で 72 棟の建物跡が確認されています。高安城跡の場合には「高安城を探る会」の方々が中心でやられていますので、行政とは違う難しさがあると思いますね。ところで、先生方が今歩かれている高安城跡の範囲の行政区域は大阪府と奈良県にまたがっているんですね。

(棚橋) はい。行政区域でいうと、高安山の西側の方は大阪府八尾市です。それから高安山の

東側の信貴山とか七倉・モミノオ、この辺は奈良県の平群町になります。それから南の方、朝護孫子寺・カナド池・北矢倉・古門・谷門・大門・本堂・ボウジ、この辺りは奈良県の三郷町になります。ですので、大阪府の八尾市、奈良県の平群町・三郷町と3つの行政の区画に分かれていることになります。

(大田) 講座の中で、たくさん土器のことをお話し頂きました。出土した2号建物跡で出土した土師皿あたりからして8世紀のものということをおっしゃいましたが、8世紀代の土師皿が出てきた出土状況について少しお話して頂きたいと思うんですが。礎石を据えるために掘った穴から出てきたんですよね。

(棚橋) はい。掘方の埋め戻した土の中から土器の破片がたくさん出てきたわけですが、おそらく、建物を造る時の鎮壇と言いくつかね、家を建てる時にも皆そういうのするんじゃないですかね。家を建てる時の儀式をして、その時にこういう土器を使った後に礎石のまわりに入れたのではないかなど、そのように言われています。それが2号建物跡の真ん中あたりの礎石の掘方の中から出てきたものと、もう1つは別の位置に平たい石があって、その石の下にも土器がまとめて出土しました。だから鎮壇かなんか、そういうお祀りをした時のものを埋めたんじゃないかなと言われています。

(大田) この場所でお祀りをしたような感じが見受けられますよね。

(棚橋) 直接的な祭祀の痕跡は見つからないんですけども。

(大田) 級石の掘方から土器が出てきたということは、調査の際、礎石を一端上に持ち上げられたんですか。

(棚橋) はい、そうですね。一端吊り上げたわけです。

(大田) 級石の下からも土器が出たんですか。

(棚橋) 級石の下ではなくて横、そうですね、礎石の周り、据え付穴の下に入れたのです。

(大田) 周りから。鞠智城跡でも4等分して1つだけ掘っていますけども、鞠智城跡ではそういう事例はなかったですね。

(棚橋) ないんですか。

(大田) ありませんでした。須恵器の破片とか、そういう小さなものが礎石を掘って、礎石を据えて固める時の土の中に入り込んでいるような状況しかありませんでした。

(棚橋) そうですか。ならこのお祀りは何だったんか、また考へないといかんわけですね。

(大田) それから、3号建物跡のところには、掘立柱の建物もあったんですよね。

(棚橋) はい。3号建物跡は、後で掘った方なんですが、3間×4間の礎石建物になるんですが、その周りのちょうど間々の所に掘方があって大きな掘立柱の柱が出てきたということですね。鞠智城跡の建物の所には、掘立柱がちょうどこの礎石の同じ並びに並んでいるものがあるんですね。この掘立柱はどういう役割をしたのかいうのも是非教えて欲しいんですけど。

(大田) 今の先生の話は、11、12、29号建物跡という3つの礎石・掘立柱併用建物のことですね。鞠智城跡の場合には、これらの建物跡は、中心部が礎石建物で周りに廻廊がつくとうふうな解釈をしてしまって、寝殿風の建物じゃないかとうふうな推定をしたわけです。ところがおよそ寝殿風の建物については、鞠智城の性格からしたらふさわしくないというところでもあります。鞠智城跡の場合には5間×6間ですね、正方形に近い建物にぐるっと囲っておりましたけれども。高安城跡のはそういった長方形の周りにぐるっと囲ってますから、廻廊的なものじゃないかなという感じがしないではないんですけどね。

(棚橋) 発掘担当者の意見では、この周りの掘立柱の掘方が非常に大きいことと真ん中の建物の柱がやはり非常に大きいので、縁側的なそういうのでは無しに、むしろ倉庫ですので。倉庫にあまり雨が入らんように周り庇を伸ばした、そういう雨よけ湿気よけの為に庇を伸ばした為にこういうのを造ったのではないかな、というふうに考えておられます。

(大田) 今の先生の話では、高安城跡の場合には倉庫の庇として考えておられるということですね。調査した者の経験からすると庇にしては少し大きいと思いますけれども。それから、先ほど国の歴史書を引合いに出されまして、高安城は701年の廃城というのがござりますね。それに見合わない時期のものが出土したということで、奈良県の方ではそういった701年の廃城という国歴史書の記録が誤りだという考え方もあるんですか。

(棚橋) 奈良県側では唐に対する偽装廃城という話もあります。701年という年は遣唐使が再開された年なんです。白村江の戦いの後、唐・新羅連合軍が攻めてくるという危機感がありまして、あの当時の状況を日本と唐の戦争やと、そういうふうにおっしゃった方もあるんですけど。とにかくちょっと外交面でぎこちなかつたんですね。それで、遣唐使が長い間行けなかつたんですけども、ちょうど701年から遣唐使が再開されました。そして、ちょうどその時は中国では則天皇后がおった朝廷ですね。日本からの使節とか行って非常に誉められたんです。そういう701年遣唐使、実際は702年に行つたんですけどね。そういうようなことがあるからですね日中友好の為に一応廃城しますと言つたと。ところがなかなかお互いに、今もそうですけど信用できませんので、やはりちゃんとせないかん、防衛はいつもせないかん、ということで高安城も造られたんじゃないかと。そういうのを偽装廃城というように表現して720～730年代にできる高安城を理解しようと、そういう動きもあるようです。

(大田) 先生もおっしゃいましたけども、偽装廃城の根拠の1つというのが、天皇が廃城後にも行幸しているということですよね。その場合に712年の行幸というのがメモリアル的な行幸の可能性もありますよね。また、689年、持統3年には持統天皇が来てますよね。

(棚橋) この高安城の行幸というのがなかなか意味が分かりにくいくらいですけども。東京の方の若い

研究者の方は国見とかいう言葉を使っていますけども。天皇が新しくなって国を見るというんですか、支配地を見る、儀式的な。そうやってそのためにこういう高安城の行幸という事があったんじゃないかなと、そういうふうに理解したらどうかと。そういう言い方をされる方がいてはります。

(大田) 偽装廃城といったら、大原則崩れてしまいますもんね。正式な国の歴史書に載っているから、築城年月日が分かって廃城年月日が分かっていると。これが偽装というふうになってしまったら揃らりますよね。ところで、信貴山の近くにお寺さんがありますよね。高安山と信貴山は、とても近いということですが、こういうふうなものとの関連はないんでしょうか。

(棚橋) これは大いにありますね。信貴山の麓に朝護孫子寺というお寺があるんですけどね。ここから高安山にかけては本当に一体的な山ですね。ただし、信貴山は信仰的な山になっているんですが。だからこれを含めて考えると、なんか高安城と信貴山とは大いに関係があるようと思われるんです。信貴山が寅なんですよ。出現したのが寅年の寅の月の寅日の寅の時刻に信貴山の仏様が出てきはったんですよ。そういうふうに言われて、今も寅を信仰しているんですけども。寅です。それでこの仏さんが、多聞天というんです。そうすると、案外、城なんかも四天王をお祀りするようなことがあったのではないかと。大野城には、四王寺という寺があつて四天王をお祀りしております。だから、高安城にも、そういう城の周りに四天王をお祀りして、その一つが信貴山の多聞天と。そういうように考えて、信貴山もこの高安城の重要な要素であったんじゃないかなと、そういうことも考えられるんですが。

(大田) また、1つお尋ねしたいのですが、出土した土師皿に煤が付いているような感じがしたんですが、あれは煤が付いているんですか、それとも焼いた時の黒色なんですか。

(棚橋) 焼いた時のものなんじゃないんでしょうかね。私もあまり詳しくはないんですけども暗文と呼ばれる非常に綺麗な模様も入っていますよね。

(大田) それで、2、3号の礎石建物から8世紀代という土器が出土したのを考えると、やはり信貴山関係の仏教関係というか、そういうふうな類いのものの性格を考えてもいいんじゃないかなという感じはしましたんですけど。ただですね、私自身が矛盾しますけども、国の歴史書に書かれた廃城説というのは信じなければいけないと私言ったんですが、鞠智城の場合はちょっとおかしいんですよね。鞠智城は、出てくる文献には98年に大野城と基肄城と同時に修理をしていると。で、それから飛んで9世紀代の800年代にいろいろな奇怪な現象というか、鼓がひとりでに鳴ったとかいろんなことが出てくるんですよ。だから、鞠智城はそういうながらも、国家の危機が去ってもずっと残っているんです。だから先程先生とお話したように、やはり国家プロジェクトで造ったお城だから、「はい終わり」ということじゃないのかもしれないですよね。先生それはどう思われますか。新羅、唐の脅威が終わったから、「はい終わり」っていうか、援助を打ち切って国の施設を廃止するっていうのはどうも。

(棚橋) ただ中央、その当時の大和、河内の方の中央から見た場合ですよ。一応、その第一義

的な危機は去ったと。そしたらこれからは九州で止めようということで怡土城とか奈良時代になっても造ってますね。ですから、大宰府、九州管轄でとにかく食い止めようと、そういうふうに考えて九州方面はずっと続いて防備体制をとったといえるかもしませんね。

(大田) 鞠智城の場合は、地方の治安維持みたいなことで残っていったのかなという解釈はしますけども。高安城跡から出てきた2、3号建物跡が天智期かどうかというふうにありますけども、そんなにこだわる必要は無いんじゃないですか。やはり大変な発見をなさったわけですから。だからもっと調査すれば分かると思うんですけどもね。

(棚橋) もっと全部発掘して欲しいなとみんな言うてるんですけどもね、なかなか。

(大田) それと、これまで「高安城を探る会」という非常にユニークな活動をされてきたんですけども、やはり会員の方の高齢化もあって、一応「高安城を探る会」というのが幕を下ろして、今後は愛好会的でやっていこうというふうなことですか。

(棚橋) はい、そうなっております。

(大田) 今どれくらい会員いらっしゃるんですか。

(棚橋) 現在は35～6名です。一番最盛期は130名位いたったんですけども。まだやりたいなという情熱はあるんですけども、ただ体がついていかんと言って。

(大田) それから先生、高安城跡の場合には、谷は、谷間の部分というか、水門とかそういう類いの調査も全部されたんですか。

(棚橋) 一応、谷の方は全部歩いたんですけどね、なかなか見つけにくいんです。みな尾根が櫛状に伸びているんですね。谷もあるんですけど、どれを見ても同じように伸びているんです。だからこれで1つの区切りにしようとか、その区切りがなかなかつかんのですよ。大野城の場合でしたら、なんかこういうふうに川が入り込んで、尾根線がきれいに丸く廻っていますね。だからすぐ範囲を取りやすいんですけども。

(大田) 鞠智城の場合は台地なんですよ。馬蹄形の尾根線でぐるっと廻って水門を設けるような縄張りと違うと言われてですね、縄張りが確定しなかったんですよ。だからこちらとしては何をやったかというと、崖線ですね、崖線+土塁線でもって囲繞されている範囲ということですね。やはり高安城の場合にも、どこで囲繞していくのかということを発想の転換でもうちょっとされても面白いんじゃないかなと思いますけど。

(棚橋) また頑張って発想を変えて考えてみたいと思います。

古代山城・高良山神籠石を考える

小澤太郎

1.はじめに

我が国に20ヶ所ほどが確認される古代山城には、「日本書紀」などの史書へ記載される大野城や基肄城、鞠智城などの「朝鮮式山城」と、全く記載がない高良山城や女山城などの「神籠石」に区別されてきた。近年では研究の進展によって、文献史料への記載の有無という指標ではなく、古代山城遺跡としての機能的な指標をもとにした再分類と評価を目指す動きもある(向井2004)。しかし、明治時代後期～大正時代初期にかけての学会を二分した神籠石論争を例に挙げるまでもなく、学史上における「神籠石」という名称の意義が薄れるものではない。そしてこの名称については、福岡県久留米市所在の高良山神籠石が発祥であることは広く知られている。

本稿では、まず学史的に重要な神籠石という名称の発生と変遷についての経緯を地元史料から明らかにする。一方で、高良山神籠石は、今まで本格的な発掘調査が実施されたことが無く、山城としての実態は詳らかではない。しかし最近の踏査や、過去に実施された限定的な発掘調査の成果から、その構造についての新知見が得られている。本稿では、これらについての報告と検討を行いたい。最後に、地震考古学や地理学的な分析から本遺跡を歴史的空間的に位置づける。

なお、城郭的な機能面を重視して議論する場合、高良山神籠石ではなく高良山城と呼称する方が適當と考える。しかし、本神籠石の学史的な経緯や講演・執筆依頼の内容を考慮して、文中では高良山神籠石と慣例的に呼称している点をお断りしておきたい。



図1 南西上空から見た高良山神籠石

2. 高良山の位置とその周辺環境

阿蘇外輪山に源を発し有明海へと注ぐ筑後川の中流左岸には、東から西へと連なる耳納山地が横たわる。これは長さ約10kmに渡る水縄断層系の活動によって形成された山地である。その西端部は、広大な筑紫平野のくびれ部に向かって半島状に突出しており、先端部に標高312mの高良山が屹立する。この山は古来その秀麗な姿から神奈備山として信仰を集め、山腹には延喜式内社で筑後一の宮である高良玉垂神社(現高良大社)が鎮座している。『肥前風土記』基肄郡条には、景行天皇が筑紫國御井郡(現久留米市)の高羅行宮から國見をしたとあり、現在の神社付近からの眺望に結びつけた説話だろう。祭神は高良玉垂神だが、地方神のためか史料が少なく、どのような神であるのか定説といえるものがない(太田1962)。また、8世紀後半～9世紀前半頃に神宮寺である高隆寺が成立して以降は神仏習合が進み、全山が天台密教の学地となった。最盛期には26ヶ寺があったといわれ(稻次1934)、筑後一円に濃密な高良山信仰圏を形成した(荒木ほか1972)。

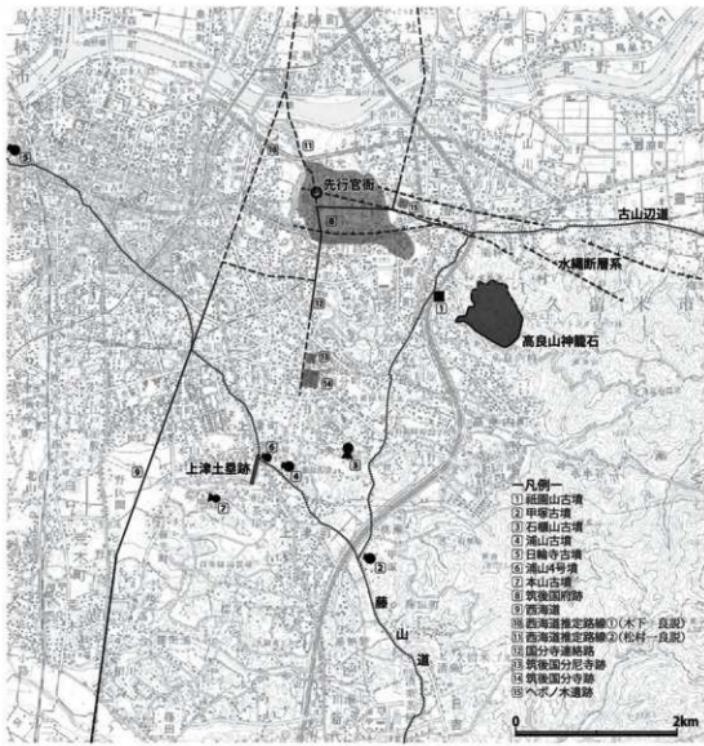


図2 高良山神籠石の位置と周辺的主要遺跡（松村編1986・2009等を参考に作成）

高良山の西麓一帯は『日本書紀』繼体天皇21年条(527)にみえる筑紫君磐井の乱の舞台となつた地域として知られている。中世には、山頂の毘沙門岳城や本宮山の東に隣接した杉ノ城、神籠石北側列石推定線上に位置する吉見岳城をはじめ、多数の山城が築かれるなど、軍事的な要衝の地であった。

また、周辺は交通の要衝でもある。北に筑前国、北西に豊前国、東に豊後国、南に肥後国、西に肥前国と接しており、各國を結ぶ陸上交通路が交差するクロスロードである。西麓には律令以前の古道と考えられる藤山道⁽¹⁾や駿馬である西海道、中近世には薩摩坊津街道が走る。北麓沿いには古代の郡伝路が想定され、近世には日田街道が通る。

さらに、古代においては耳納山地の北側を流れる筑後川と有明海が、対外的な水上交通路として重要な役割を果たしていた。『日本書紀』雄略天皇10年条には、身狭村主青らが吳から獻上された2羽の鶴鳥を携えて筑紫へ帰着したところ、筑後川下流域を本拠とする水間君の飼い犬(別本には対岸の嶺県主の犬とある)がそれを噛み殺したという記事が見られる。また、9世紀以降も有明海沿岸地域はたびたび新羅海賊に襲撃され、10世紀には吳越の船が来航するなど、博多

湾側への鴻臚館設置以降も対外的な交流と無縁ではなかった(田中2003)。考古学的にも、弥生時代前期から中世にかけての有明海沿岸や筑後川流域から、朝鮮系無文土器や青銅器、陶質土器、馬具や武具、装飾品、貿易陶器など、半島や大陸系の文物が多数出土しており、対外交流の窓口としての重要性を裏付けている。

交通が至便な土地柄、高良山麓には古代の公的施設も集中する。西海道より東側は御井郡に属し、2km圏内には筑後国府跡や国分寺跡・尼寺跡などの中枢施設だけでなく、郡名寺院の可能性が考えられるヘボノ木遺跡等も所在する(小澤2005)。南西約3kmには小水域として著名な上津土星跡が、藤山道を遮断するように位置している(松村編1986)。

以上のように、高良山神籠石は筑紫平野における政治・文化・経済・軍事の要所に立地しているのである。

3. 名称の問題と神籠石論争

(1) 論争の行方

神籠石をめぐっては、戦前の考古学会で大論争が巻き起こった経緯から、学史上重要視されており、すでにその流れを整理したものがある(小田1983、宮小路・亀田1987)。詳細はそちらに譲るとして、以下では、その概略を述べたい。

最初に高良山神籠石を中心の学会へ紹介したのは、小林庄次郎であった。彼は、明治31年(1898)8月の現地調査を踏まえ、同年12月、「東京人類学雑誌」上に「筑後高良山中の神籠石なるものに就いて」と題する論文を発表した(小林1898)。文中では、高良神社(現高良大社)を取り囲むような列石の配置から、同神籠石は「靈地として神聖に保たれ」た空間を区別するためのものと解釈した。いわゆる神域(靈域)説である。

ところが明治33年、九州の神籠石遺跡を現地調査した八木奘三郎がこれに反論し、山城説を提唱した(八木1900)。以降、神域説と山城説をめぐって、学会を二分する大論争が繰り広げられることになる。まず、明治35年に喜田貞吉が「神籠石とは何ぞや」という題で、神域説を支持し八木論文への反論を表明した(喜田1902)。これに対して、八木も再反論している(八木1910)。さらに、大正2年(1913)には朝鮮半島の山城を調査した閔野貞が論文「所謂神籠石は山城なり」を発表し、山城説に加勢する形となつた(閔野1913)。これ以降は、喜田・閔野両氏を中心に議論が展開していく。

同じ頃、谷井済一が朝鮮式山城と神籠石の構造を詳細に比較した上で山城説を強調した(谷井1913)。だが、現状の表面観察だけでは情報量も限定的で説得力に欠け、やがて議論は平行線をたどるようになった。そして大類伸の「『神護石』問題解決時期尚早論」が発表されると論争は停滞したのである(大類1914)。

しかし、ついに昭和38年(1963)、佐賀県武雄市のおつば山神籠石、翌年の佐賀市帶隈山神籠石で実施された発掘



図3 明治末年頃の勢至堂付近の列石
(『明治四十四年特別大演習写真帖より』)

調査によって事態は大きく進展する（鏡山1965、鏡山ほか1967）。この時、調査を主導したのは当時九州大学考古学研究室に所属していた鏡山猛と小田富士雄である。彼らは、列石が土壘の基底部に連なっていることや、その前面に掘立柱が約3m間隔で並んでいる状況を明らかにした。また、谷を遮断する部分には水門施設、土壘の切れ目に掘立柱式の門跡などを発見している。この結果、神籠石は、「日本書紀」に記載がある大野城や基肆城などの、いわゆる朝鮮式山城とその構造が酷似していることが判明した。ついに、神籠石は古代山城であるということで、論争は一応の決着をみたのであった。

（2）神籠石の名称起源と変遷

i. 八葉石と神籠石

さて、明治31年に、小林庄次郎が高良山神籠石を学会へ紹介したことから、これ以降発見された同様の列石遺構が「神籠石」と呼称されるようになったことは先述した。ここでは、学会発表以前の高良山において、列石遺構が神籠石と呼ばれるに至った経緯について考えてみたい。

本来、神籠石とは神が降臨する磐座のことを指す。「皇后」や「香合」などの字をあてることもある（柳田1910、古賀1967）。磐座であるから、信仰の対象となっている巨石や奇岩を指すことが多い。実は、高良山において本来神籠石と呼ばれていたのは、参道に面して露頭する岩盤の一部で、現在「馬蹄石」と呼ばれているものである（古賀1967）。

史料をたどると、最初に神籠石という名称が現れるのは、「高良玉垂宮縁起」⁽²⁾である。この史料は、少なくとも、鎌倉時代後期から南北朝時代前期にかけて成立したと考えられている（荒木ほか1972）。

藤大臣者、（中略）借得宿於高牟礼、山上構四方八葉之石疊、為結界地、卜居於彼中央（割注：号彼謂神籠石）

すなわち、藤大臣（高良神）が高良山の地主神である高牟礼神に居住地を借りた際に、石を巡らせ山上を取り囲んで結界としたという内容である。現在神籠石と呼ばれる列石遺構を彷彿とさせるものだが、同書ではこれを神籠石と呼ばず、「八葉の石疊」と呼称している点が注目される。一方、この結界の中央に居を構えたとあり、こちらを「神籠石」と称している。因みに「八葉石」というのは、仏教と結びついた呼称で、蓮の花弁のように中心をぐるりと取り囲むように配された石という意味であろう。後に「蓮華（花）石」とも呼ばれるが、これも同じ意味である。

同様の呼称区分は、これ以降の史料にも受け継がれている。例えば中世後期に描かれたと思われる「絹本着色高



図4 高良大社参道脇にある馬蹄石



図5 寂源による神籠石発掘の由来を記した八葉石碑

良大社縁起」(県指定文化財)や、神職である大祝保房が中世末～近世初頭に書いた『高良記』、延宝3年(1675)に寂源僧正が3ヶ月近くかけて列石線を発掘調査した際の経緯を記した「高良山八葉石記」などがあげられよう。これらの例を見ると、現在の神龍石、すなわち列石造構は元々「八葉の石疊」もしくは「八葉石」と呼ばれていたものであることは明白である。学会へ初めて「神龍石」遺跡を報告した小林が名称を誤って紹介した(向井2009)と言われるのはこのためである。

ii. 名称の混亂

現在のように列石造構を「神龍石」と呼ぶようになったのは、実は近世以降のことである。早い段階の例として、先の寂源が記した「御井寺建立之記并五大尊之事」がある。そこには次のように記されている。

山中中央ニ方八町ノ石疊アリテ神龍石トイウ、マタ(八カ)葉石蓮華・廉円ノ形顯然タリ。

八葉ノ中台、御井寺ト号ス。⁽³⁾

ここでは八葉蓮華の平面形状をした列石造構を神龍石と称しながらも、御井寺がその中心的存在であることを説いている。築造については「神ノ功力ニ非ズンバ誰カコレ大石ヲ累セン。」と、人智を越えた神の仕業と考えており、そこから神龍石という名称を採用するに至ったのかかもしれない。なお、「廉円ノ形顯然タリ」という表現からは、列石造構のコーナー部の存在を認識していることがうかがわれる。

次に、宝暦2年(1752)に緒方惟臣が編纂した『筑後誌略』がある。同書中にはこう記される。

神護石、俗ニハ蓮花石ト云。今ニ大石魚貫シテ、高良山ノ本社ヲ周廻シテ、十町四方ニ在リ
「魚貫」とは、列石を魚が水中を一列に連なって泳ぐ様に例えた表現だろう。

また、安永6年(1777)に杉山正中・小川正格によって編纂された『筑後志』にも同様の記述がある。

山頂社地の周囲、方十町を限り、巨石魚貫せり。これを神龍石という。(割注: 俗に蓮華石と云ふは非也)

一方、高良山の門前町府中に源正寺がある。幕末の嘉永7年(1854)頃にその寺子屋で使用された手習い本にはこのように記される(御井小学校開校百十周年記念事業特別委員会町誌部編1986)。

高良山詣之事…(中略)…子供、女もくたびれ臥可申候間歩行にて蓮華石を廻り極楽寺
へ立ち寄り暫く致物語…(下略)」

この教科書は、書道の練習を兼ねて文字を覚えさせるためのものである。ここに蓮華石とあることから、庶民層では「神龍石」よりも、「蓮華石」という呼称の方が一般的であったのだろう。

同じ頃、久留米藩士で歴史学者だった矢野一貞は、嘉永6年(1853)その著書『筑後將士軍談』で、列石造構が山城である事を看破している。呼称については、文久2年(1862)に記した『筑後国郡誌』中で、

是を神龍石とも八葉石ともいふ。

としている。このころ、船曳鉄門との往復書簡中にも「世俗名て神龍石、又蓮花石などといへり」と記している(古賀1967)。

以上の例から考えると、江戸時代は、列石造構を「蓮華(花)石」や「八葉石」とも、あるいは「神龍石」とも呼んでいた名称並存期であったと言ってよいだろう。

Ⅲ. 八葉石から神籠石へ

ところが明治時代以降の史料には、「蓮華(花)石」や「八葉石」という仏教的な呼称が一切見られなくなるのである。

久留米藩最後の御用絵師の一人、三谷有信が明治6年(1873)に描いた「高良山真景図」という絵図がある(久留米市文化財収蔵館蔵)。ここには高良神社や関連施設と共に高良山の中腹に巡る列石線が描かれているが、その傍らには「神護石」と註が付されている。同じ頃に描かれたと思われる同じ作者の「筑後国御井郡高良山神籠石略図」にも「神籠石」と記されている(小澤2011)。

三谷は明治5年、船曳鉄門らとともに三瀬県庁から依頼され、旧久留米藩領内の地誌調査と編纂を開始した。因みに船曳は明治7年、高良神社権宮司となり、同17年宮司に昇進した人物である。三谷らの成果は、同12年(1879)、梅野多喜蔵と共に著の『筑後地誌略』(序文は船曳)で結実する。列石造構の解説は次のようにになっている。

社伝ニ神籠石ト称スルアリ高良神社ノ後阜ヨリ起り周廻十余町石壙ヲ廻ラス

このように、縁起等において八葉石などと仏教的な呼称で呼ばれていた列石造構を、社伝では神籠石と称するというようなどと、事実とは異なる説明をしている点に注目したい。

同文は、明治27年(1894)刊行の戸田乾吉著『久留米小史』にも引用されている。一方、同書では『筑後国郡誌』における矢野一貞の山城説(筑紫国造磐井の築城説)も紹介されている。このことから、戸田は列石造構が「神籠石」とも「八葉石」とも呼ばれているという同書中の矢野の記述を認識していたはずである。あえて触れていないとすれば、「八葉石」という仏教由来の呼称を意図的に避けたのではないだろうか⁽⁴⁾。

次に、小林庄次郎による学会発表前後の状況について見てみよう。

明治31年(1898)に大阪大成館銅版部が作成した高良神社の銅版図には、高良山を取り巻く列石の表現に対して「神籠石」の注がある。因みにその原版は高良大社に保存されているという(御井小学校開校百十周年記念事業特別委員会町誌部編1986)。

翌年、10月1日、軍医監として小倉に来ていた文豪森鷗外は、久留米の府中を訪れ高良山へ登山した。「小倉日記」には、「道の左に高木神社あり。これより登ること十五町。神籠石と馬蹄石とを見て、高良山頂に至る。」と記す。馬蹄石とは、中世末～近世初頭以前に「神籠石」と呼ばれていた磐座のことである。

更に、明治33年(1900)に当時の高良神社宮司である川村作摩が内務大臣西郷従道宛に提出した「神籠石御調査ノ義ニ付願」(久留米市文化財収蔵館蔵)でも、列石造構について、

古来之ヲ名ケテ神籠石ト称ス

とする。この文書には資料として、栗田寛の「高良神社祭神考」(久留米市文化財収蔵館蔵)が添付されていた。ところが、列石造構の名称については、「高良玉垂宮縁起」等を引用しながらも、

当社拾町四方ニ石疊ヲ設ケテ、カウゴ石ト称スルハ何ノ故ソヤ(下略)

とあり、「八葉之石疊」という縁起における名称は完全に無視されている。同書の提出は明治33年であるが、文末の日付から、明治31年2月初旬に執筆されたものと考えられる。すなわち、同年8月に実施された小林の現地調査以前に書かれたことが明らかである。

以上の資料からわることは、明治初頭以降は列石造構に対して「神籠石」という呼称が定着しており、少なくとも高良神社の公式見解として、そう呼ばれていたという事実である。すなわち、小林が列石造構の調査・紹介を行った明治31年に至っては、「八葉石」という名称

を「神籠石」ととり違えたり、後者を意図的に選択したりする余地は、ほとんどなかつたと考えるのが自然であろう。

iv. 廃仏毀釈と神籠石

列石造構が「蓮華石」とも「神籠石」とも呼ばれた名称並存期から、「神籠石」という名称が定着した明治時代の間、すなわち、幕末～明治初期にいったい何が起きたのだろうか。ここで考えられるのは、当時高良山に吹き荒れた政治的大変革の嵐、廃仏毀釈である。

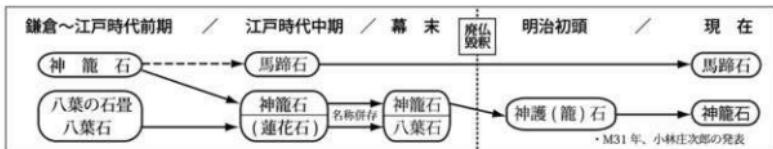
慶応4年(1868)、太政官は王政復古と祭政一致の回復によって神祇官を再興した。続いて神祇事務局は神社に勤仕する僧職の還俗を布達し、いわゆる「神仏分離令」によって仏教勢力の排除を行った。

久留米藩で神仏分離が始まるのもこの年である。まず、高良山中にある将军家靈廟の祭祀を廃止し、翌明治2年、高良山座主の還俗と退寺を命じた。そして廃仏毀釈によって、高良山から寺院や坊が取り壊され、僧侶たちの姿も消えた。まもなく、高良玉垂宮は高良神社と改称して国弊中社に列せられた。

この時期、神社は国家的な宗旨として明治政府の統制と保護を受け、新たな地位を確立しつつあった。一方で、それまでの社領が引き揚げられ、一定の境内地を残すのみとなっていた。高良神社も例外ではなく、田中吉政時代以来の社領千石が上地され、本坂より上の四反三畝が境内と画定された。窮地に追いやられた同社は、明治5年に三瀬県庁へ列石内八町を神域として払い下げるよう申請したが不許可となっている(久留米市史編さん委員会1985)。のち第4代宮司となった川村は「神籠石御調査ノ義ニ付願」の中でこう言う。

該石(筆者註: 神籠石)ヲ以テ神域ノ分界線ト為シタルモノナルハ疑ナキカ如シ
すなわち、列石造構が高良神社の神域を示す根拠として主張するためには、仏教的な「蓮華(花)石」や「八葉石」といった名称ではなく、あくまでも「神籠石」でなければならなかつたのである(小澤2011a)。

以上からわかるように、神籠石という名称は、幕末維新期の廃仏毀釈という政治的宗教的な大変革の中で、整理され決定されたものと考えてよいだろう。



4. 高良山神籠石の構造

(1) 高良山神籠石の構成

現在確認できる高良山神籠石の造構としては、列石とその上部に残存する土壘の可能性がある堆積土や、谷を遮断する水門の石壘、角楼等の施設の存在が想定されるコーナー部2ヶ所が挙げられる。以下では、近年の踏査成果を中心に見ていきたい(小澤2009)。まず、列石と土壘で構成される城壁は基本的に曲線で、高良山の西側斜面にある5つの峰を繋ぐように構築されている。高良大社の背後にある本宮山(標高253m)東側斜面を最高所としており、仮にそこを

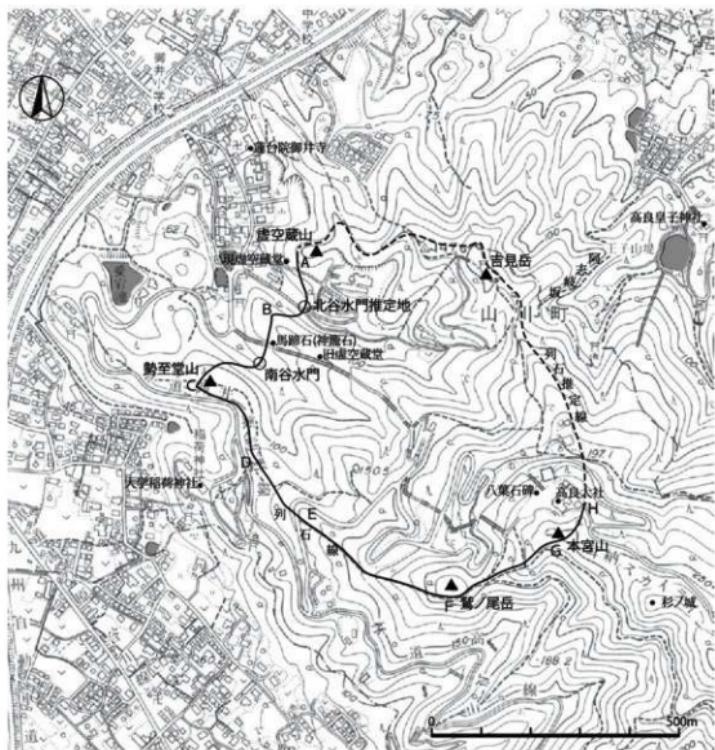


図7 高良山神籠石全体図

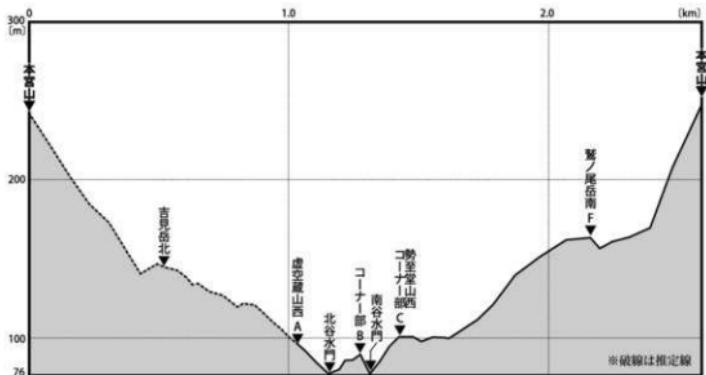


図8 列石線ルート展開図

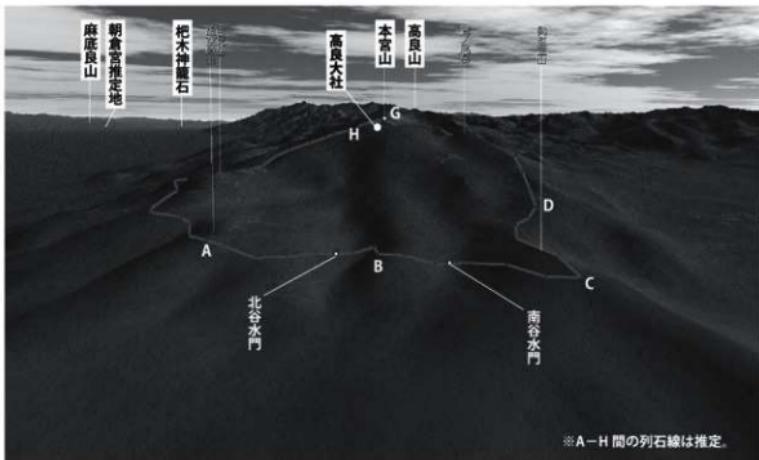


図9 北西上空から見た高良山神籠石の列石線（カシミール3Dにて作成）

起点とし時計回りに進むと、鷲ノ尾岳（標高220m）～勢至堂山（標高115.3m）～南谷へと下り、最低所である北谷（標高約65m）から登りに転じ、虚空蔵山（標高105.8m）へと至る。しかし、これ以降の北側列石線が未確認となる。主に地形から判断すると、尾根筋の外縁部を迫って吉見岳（標高147.6m）を経由し、本宮山から延びる尾根の北側斜面を登って起点へと戻る。いわゆる「傾斜回縦型」（葛原1981）と呼ばれる形態である。

城壁の最高所と最低所の比高差は約180m以上ある。確認できる列石線長は1,517m、北側の推定線を加味すると2.5km以上となり、それらに開まれた城裏面積は約355,000m²で、福岡市にあるヤフオクドームの約5個分におよぶ。

水門は、南谷と北谷の計2ヶ所に存在したものと思われるが、現在は南谷のみに残る。北谷では南側と北側それぞれの斜面を四曲線を描きながら城内側に下ってきた列石線は、谷底付近で途切れる。しかしそこは地形の変換点となっており、等高線の間隔が詰まっている。したがって、付近に北谷水門が存在した可能性を考えることができる。なお、南谷水門については、別項にて述べる。

先述したように、城壁は曲線で構成されるが、旧虚空蔵堂西側（図7-B）と勢至堂山南西側（図7-C）には列石線がほぼ直角に折れる箇所がある。前者は北谷水門の南側斜面を登り切った尾根上に位置し、北谷を見下ろすことができる。後者は、南谷水門の南斜面側を登ってきた列石線が勢至堂山の南西側で一端最高所に達する場所にある。こ



図10 勢至堂山南西側の列石線コーナー部

のコーナー部の列石は、上面をほぼ水平に揃えて据え付けられ、その隅角には長辺1.2m、短辺80cm、高さ85cmの大形石材を母岩上に設置する。こちらは南谷水門を見下ろすことはできないが、城外の南西方向に視界が開けており、「藤山道」を意識した何らかの施設の存在が想定される。現地を訪れた大田幸博は、角楼のような構築物が存在した可能性を指摘している。

(2) 列石線と土壘

列石材は、高良山一帯の母岩である片岩が使用され、ごく一部に安山岩や滑石が認められる。形状は立方体で、大きさは高さ70cm前後、幅約15~320cm、奥行き約20~120cmとバラツキが多いが、一辺の長さの平均は約70~80cm前後になろうか。

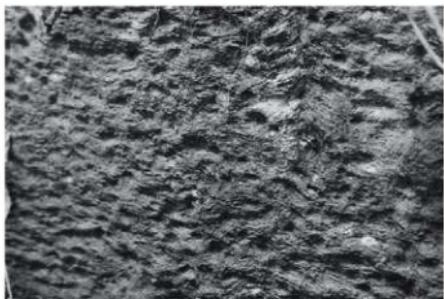


図11 石材の表面調整（片岩）



図12 扁平石材を複数段積んだ例（南谷南側斜面）



図13 自然露頭を表面調整し利用した例（大学稻荷北側）

石材は6面全ての表面を小さく連続して叩く、もしくはノミで削る加工を施した切石である。背面や両側面、前面下端部など、施工後隠れてしまう部分についての加工は概して荒く、前面など視覚的に目立つ箇所については、より細やかな表面加工が施されている。ただし、他の神籠石で見られる切石前面上縁部のL字形の切り欠きは認められない。以上の状況から、近辺の石切場である程度の大きさと形状に加工し現地へ運搬、据え付け後に現地で表面加工を施すという2段階の工程を考えることができる。

列石線における石積みは、基本的に一段積みで直列に並べている。列石前面の傾斜角度は70~90度である。ただし北谷水門推定地の北側斜面と南側斜面、旧虚空蔵堂西側コーナーでは、板石や横長の石材を2段に積んだ箇所があり、南谷水門の南側斜面にも2~4段積みの箇所が認められる。また、南谷水門南側斜面や大学稻荷神社北側では、母岩の自然露頭を利用し表面調整した部分も認められる。後者では母岩の窪みを成形し、そこに加工石材を嵌め込んで面を揃えている。また、段積み部分にしても母岩露頭の表面調整部分にしても、下縁ラインは不揃いであるのに対し、上縁はそれらに繋がる一段積みの列石と揃えられている。すなわち、段積みは石積みにより高さを出すためではなく、主要石

材である片岩の薄く割れやすい性質を克服するための工夫であったのである。

土壘については、列石の上部に積み土の一部が残る箇所もあり、本来は列石と土壘とが一体となって城壁を構成していたことがわかる。例えば、北谷南側斜面、勢至堂山北側と西側、大学稲荷神社北側、鷺ノ尾岳西側、本宮山東側などでは内托式土壘の痕跡が認められる。

i. 後世に積み直された列石の問題

高良山神龍石に限らず古代山城に

おいては、築城以降その機能を保つために城内施設の補修が実施されたであろうし、拡張や縮小などに伴って増改築が行われたであろう。さらには、機能停止後は様々な自然要因から崩壊したり、あるいは人為的に毀損・改変を受けたりした結果、現在目の当たりにできる姿となっていることは想像に難くない。当神龍石においても、後世に改変された箇所が複数確認できる。

a. 虚空蔵堂東側列石線

最初の例は、現在確認できる列石線の北西端部、虚空蔵堂東側である。ここでは参道に面した列石と堂脇の列石では、明らかに並べ方が異なっている。まず南側では長辺が1m以上の大形の横長石材を置き、統けて上面幅15~80cmの小形~中形の切石を立てて並べる。石材の上縁ラインは揃えられ、斜面の傾斜と平行している。一方、虚空蔵堂脇では、上面幅30~80cm程度比較的大きさが揃った中形の石材を用い、立てて並べている。しかし、石材の上縁・下縁ラインは揃わず、階段状となる。

詳細に観察すると、両者の違いはそれらが据えられた基盤の違いに対応していることがわかる。前者は露頭した母岩上に据えられているが、後者は扁平な片岩を平積みした高さ2.2~3.6mの石垣の直上に並べられている。この石垣は、高良山参道沿いなどに多く見られる近世~近代の石積みに近い。すなわち、後世に大掛かりに改変されているのは確実であろう。

虚空蔵堂は近世に高良大社参道脇の伊勢社の下にあったものを現在地に移したものとされる(稲次1934)。移転の時期は不明であるが、武藤直治らが昭和4年(1929)に作成した高良山神龍石の地形図には、現在の位置に表記されている。可能性として考えられるのは、明治2年(1869)の魔仏毀釈の際に旧本堂が取り壊され、現虚空蔵堂を管理する旧座主本坊の御井寺が再興される明治11年以降に現在地へ再建されたのではないかということである。あるいは本堂東脇の石垣の築造と列石線の改変もこの頃行われたのではないだろうか。



図14 内托式土壘の痕跡（北谷南側斜面）



図15 異なる石積みの境界（虚空蔵堂東側列石線）

b. 本宮山東側列石線

高良大社社殿背後の列石線では、過去に2度の発掘調査が実施されている。最初の確認調査は昭和37年(1962)、耳納スカイラインから高良大社境内へ進入する道路を新設する際に実施された。この時、従来列石線の北東端とされていた列石から更に北側へ延びる列石8個が発見されている(波多野1974)。列石線は約18°の傾斜で北に下っていくが、これより先は急な崖となっており、列石は確認されていない。石材の大きさは長さ0.6~1.1m、高さ65~80cm、

奥行き35~50cm程度である。この一帯では列石下縁を描えるように並べられているため、上縁ラインは不揃いで石材ごとに凹凸がある。

二度目は、昭和53年(1978)に実施された。これは昭和28・29年(1953・54)の水害で被害を受けた列石線の復旧保存工事に先立つ基礎調査である⁽⁵⁾。この際、転落した列石の背後にトレーニングが設定されたことは、本遺跡唯一の調査例として大変注目される。そこでは列石線よりも城内側に6.5m幅で掘り込みの跡があり、列石自体はそこに堆積した厚さ0.4~1.3m程の礫混じりの黄褐色土層上に据えられている。出土遺物を実見したが、同層中からは土器器細片が26点出土し、うち回転糸切り底を施すものが2点認められた。因みに筑後地方における回転糸切り技法の出現は、12世紀初頭頃とされる(松村1982)。

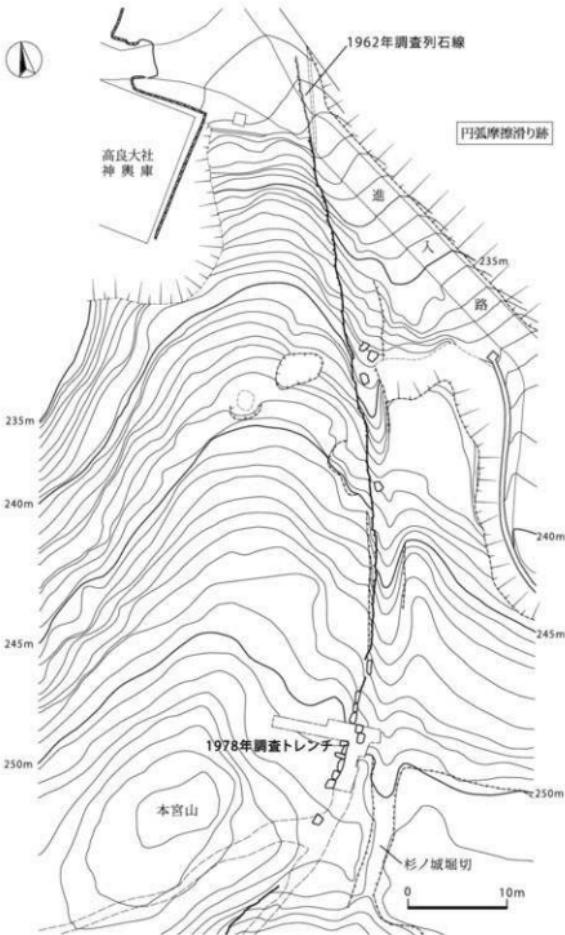


図16 本宮山東側列石線と調査地点の位置(小澤2009を一部改変)

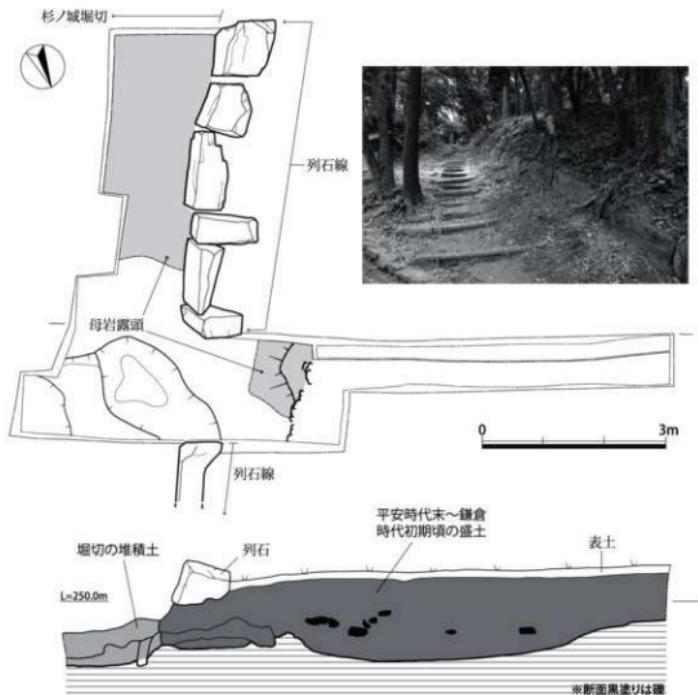


図17 本宮山東側列石線の現況写真とトレンチ平面・断面

一方、列石の前面は列石線に沿う形で幅約3mの溝状に掘り込まれている。本宮山東側には中世山城の杉ノ城が隣接しており、これがその堀切に相当すると考えられている(磯村ほか編1974)。堀切内部の堆積層中からの出土遺物は、玉縁口縁の白磁碗や龍泉窯系青磁片、瓦器椀など12～13世紀代の時期のものが中心であった。また、先述した昭和37年の確認調査地付近と同様に列石線上縁部が崩はないことから、本宮山東側の列石線は広い範囲で後世に改変されているのではないだろうか。その原因として、平安時代末～鎌倉時代初期以降に実施されたと思われる杉ノ城の堀切造成が挙げられよう。その際、堀切の西岸に列石をそろえて再設置することにより、機能的かつ視覚面での防衛力強化を意図したものと思われる。

ii. 南谷水門の構造

昭和5年(1930)に水門前面が発掘されるまでは、3mほど堆積した土砂に埋没していたという(武藤・石野1930)。しかし当時すでに著しく崩壊しており、城外側の石積の基底石4個と谷北側の二段目の石材を残すのみという状態であった(樋口1981)。近年は、度重なる集中豪雨のため水門を覆っていた土砂が流失、皮肉にもその姿があらわになりつつある。

詳細は以下に述べるが、同水門は石壘構造であり、推定規模は長さ約13m、高さ約4.5m、基底部幅約9.5mを測る(小澤2009)。



図18 南谷水門の現況



図19 南谷水門背後の石積み

谷の南岸付近を流れる溪流部分には、水門前面石積の基底部と考えられる大形石材が3個並ぶ。最も大きいもので、長さ1.2m、高さ50cm以上、奥行き1.05mを測る。溪流の北岸には前面を揃えた石積みが階段状に残存するが、基底部から垂直に近い角度で8段以上積み上げていることが確認できる。石材の大きさは長さ80cm、高さ50cm程の切石で、基底部のそれよりも小振りである。材質は列石線と同様、片岩が主体であるが、一部安山岩を含む。ただし、布積みというよりも縦目地が通る重箱積みに近い。谷の北岸側は地形の傾斜に沿って、石積みの横目地も傾斜するが、谷底付近では目地が水平に近くなりそのまま南岸に至る。南岸の取り付き部分は、石積み前面に揃うように母岩露頭を鍵形に成形している。

一方、上流側に水門背面の石積み基底部と考えられる石材3個と2段分の石積みを確認している。この城内側の

石積みも方形の切石を使用するが、水門前面のそれと比較すると小振りである。こちらも城内側の面を揃え垂直に近い角度で積み上げているものと思われる。

水門の芯部は石築で、拳大～人頭大程度の片岩角礫が堆積していることから、石墨であることが明らかである。その断面観察では少なくとも基底部から高さ約1.5～2mまでは角礫で充填していることがわかる。上流側の石材の方がより大振りである。なお、石墨上部には礫をほとんど含まない土砂が堆積している。これについては、石墨の崩壊状況や平安時代～近世にかけての遺物を包含することからみて積み土ではなく、中近世以降、昭和5年以前の間に谷へ流入していた堆積土である可能性が高い。

なお、現時点では、門道部や城門、通水施設等の存在については判然としない。

5. 高良山神籠石の崩壊と7世紀のくるめ

(1) 北側列石線存在の可能性

高良山神籠石の北側列石線は現在のところ未確認で、現状では城壁が全周しないことは先述した。列石を含む城壁の有無についての考え方を整理しておく。

まず、城壁の存在を否定する立場では次のような説明が可能だろう。高良山を含む耳納山地は、北麓を東西に走る水繩活断層の活動によって形成されている。このため、北側斜面は急峻な自然地形であり、かつ母岩の露頭箇所も数多く見られる。すなわち、地形を利用したため当初から城壁を構築しなかったとする見方である。一方で、建設計画はあったものの、何らかの理由で工程

的に後回しになり、結果的には着工されずついに完成しなかったという場合も想定されるだろう。

次に城壁が存在したとする立場である。昭和初期に詳細な現地調査を実施した武藤直治らは、「篠山城の築城にも高良山神龍石を使用せり」「他所にも運搬し去り」「巨石墜落して人家を破壊したる」「存在せるも埋没せり」「墓穴穿掘の際、神護石の列石に掘当」などという列石線の存在に関する複数の地元伝承を紹介した(武藤・石野1930)。これらの証言内容が事実であれば、列石の一部は未だに埋もれたままとなる。ただし、急峻な地形を利用して、列石線の構築が部分的であった可能性を考慮しなければならない。

以上のように、本格的な発掘調査が実施されていない現在、北側城壁すなわち列石線の有無についての決定的な情報は無く、これ以上は如何とも判断しがたいのが現状である。

(2) 筑紫大地震と水縄断層

さて、高良山神龍石の北側斜面下に山川前田遺跡がある。この遺跡では、平成4年(1992)に水縄断層系追分断層本体の調査が行われ、都合4回の活動痕跡が確認されている(松村1994d、同編2000)。なかでも最新の活動は6世紀～12世紀の間であると推定された。この他にも筑後地方の遺跡からは断層のみならず、地割れ・地滑り・土石流・液状化・噴砂・倒木痕などが20ヶ所以上で発見されている(白木2006)。

例えば、上津土星跡では、7世紀前半～8世紀後半の間に土星本体が地盤の液状化によって崩壊し、その後修復されていた(松村編1986・松村1994a)。また、筑後国府跡先行官衙(前身官衙)の東限大溝底部では、液状化に伴う噴砂が発見された(水原編1991)。発生時期は溝堆積層内の出土土器から7世紀後半～8世紀半ばに絞られる。小郡市上岩田遺跡では、7世紀後半に造営された金堂の基壇に走る無数の地割れが村松一良によって現地で確認され、これが金堂の倒壊を引き起こした原因と考えられている(松田2000)。このような断層の活動は、地形・地質的に明らかに認められる場合、マグニチュード6.5以上になるといわれている。また、液状化現象についてもV(強震)～VI(烈震)以上の強い揺れの場合に発生するとされる(松村1990)。すなわち、これらはその位置や年代、規模などから、水縄断層による地震活動の痕跡であると考えてよいだろう。

一方、筑後地方北部一帯に認められる地震痕跡を検討してきた松村は、『日本書紀』天武7年12月条の記事に注目した(松村1990)。

是の月に、筑紫国、大きに地動る。地裂くこと広さ二丈、長さ三千余丈。(後略)

これは被害を具体的に描写した記録としては日本最古のものとして知られる(寒川1992)。すなわち、天武7年(678)に筑紫国(7世紀末に筑前・筑後に分割)で地震が発生、幅約6m、長さ約10kmにおよぶ凄まじい地割れを引き起こしたのである。高良山北西麓に当たる神道遺跡では、平成16年の第22次調査で、断層本体とともに幅約7mの大規模な地割れ帯が発見された(白木編2006)。この数値は『日本書紀』の記述ともきわめて近く、その信憑性を裏付ける結果となった(白木2006)。

このように、遺跡から発見される地震痕跡に具体的な年代が与えられた意



図20 神道遺跡で検出された断層と地割れ帯(背後は高良山)

義は大きい。筑紫大地震は7世紀における地域研究の重要な鍵を握っているといつても過言ではないだろう。

(3) 列石線の崩壊とその年代

ここで注目されるのは、高良山神籠石の北側城壁が水縄断層の活動で崩壊した可能性を指摘する説である(松村1994a)。現在、高良大社社務所北側一帯は急斜面となっており、先述したように列石線はここで途切れている。氏は、この斜面が円弧摩擦滑りによる斜面崩壊によって形成されたものとする。高良山北側斜面では同様の地形が広く観察される。山川前田遺跡では、この状況を裏付けるように、土石流が堆積した状況も確認されている。このことから、マグニチュード7.1の地震を発生させる同断層の激しい地震動で、高良山神籠石の北側斜面と、少なくとも列石線北東端部に連なる列石線の一部が崩壊した可能性が想定されるのである。

なお確証はないが、高良山神籠石の列石上部は土塁積土部分が流失したような状況を呈しており、B地点-参道間の列石線が斜面崩壊により滑落した状態であること、北谷・南谷水門の破壊がきわめて著しいことなども、筑紫大地震による地滑り、土石流などがその破壊の原因として考えられるのではないだろうか。

これらが正しければ、高良山神籠石が天武7年にはすでに存在していたことになり、物証が乏しい神籠石の年代解釈にも、ひとつの定点を与えるものとなる。



図21 円弧摩擦滑りの痕跡（高良大社北側斜面）

(4) 周辺の諸施設との関係

先述したように、筑紫大地震の被害を被った遺跡、すなわち筑後国府跡先行官衙、上津土星跡、高良山神籠石は、少なくとも7世紀後半の天武7年(678)の時点で、同時期に存在していた可能性が高いといえる。これらのうち先行官衙は重要な水上交通路である筑後川に面しており、立地や遺構、遺物内容から、大宰府I期に先行する何らかの行政的軍事的拠点であったことが想定される(小澤2012)。一方の上津土星跡は、律令以前の古道である「藤山道」を遮断するために構築された防衛施設とされる(松村1986・1994b)。高良山神籠石は、先行官衙の背後にそびえる山塊に築造された山城であり、「藤山道」を望む南西側の小高い勢至堂山にはコーナー部を設けている。重要な交通路沿いに配置されたこれらは、山城・小水城・官衙施設と、それぞれが単体で存在するのではなく、有機的に結びつき相互に連携する施設として、一連の計画と目的の下に建設されたと考えるべきではないだろうか。

その造営時期については、先行官衙の出土遺物が参考となろう。まず、北限大溝下層からは弥生時代終末の土器に混じり、わずかだが7世紀前半代の須恵器が出土する(小澤編1999)。東限大溝下層は7世紀前半～同末にかけての官衙の様相の遺物が大量に含まれている(松村編2009)。先行官衙の正殿と目される田代地区の大形四面廂建物は、7世紀初頭の堅穴住居を埋め戻し後、切り込んで建築されている(神保編2006)。これらの状況から、同官衙は7世紀前半～中頃に造営を開始したものと考えることができる。上津土星や高良山神籠石の造営開始についても、近い

時期が想定可能ではないかと考える。

先行官衛の北側を流れる筑後川は、有明海へと注ぐ半島や大陸との交流と交渉の道であった。一方の上津土壙跡が塞ぐ「藤山道」についても、有明海方面から上陸して旧三池郡黒崎（大牟田市）から丘陵裾沿いに女山神籠石の西側を経由し筑後地方を縦断、筑後川を渡河して肥前へ抜け、大宰府方面へと向かう古墳時代以来の重要な陸上交通路であった（松村1994e）。水陸交通路を押さえた高良山神籠石・上津土壙・先行官衛などの施設は、松村が指摘しているように、有明海方面からの軍事的な侵攻を想定して、周到な計画の元に設置されたものと考えてよい（松村1994c）。



図22 先行官衛（前身官衛）の正殿と目される大形四面庵建物

6.まとめ－神籠石の配置とその意味－

(1) 築造年代観

これまで高良山神籠石について記述してきたが、神籠石全体が抱えるいくつかの課題について私見を述べておきたい。まず、築造年代の問題についてである。これについては出土遺物が少なく確証にかけるものの、切石の加工技術やその使用、唐尺の使用、城門構造などから概ね7世紀代とするのが大方の見方である（宮小路・亀田1988）。また、高良山神籠石は7世紀前半～中頃に築造され、7世紀末頃には一部崩壊する可能性もあるなど、存続は比較的短期間であった可能性がある。また、北部九州の10城は土壙線下部に据えた列石には切石を使用し、高良山神籠石以外は切石の外縁上端部に切り欠きを有するなどの構造上の特徴が共通することからも、ほぼ同時期に築造されたものと考えてよいだろう（小澤2002）。このような年代観に基づけば、当時の東アジア世界における政治的緊張を背景として、任那復興のための新羅征討が計画された推古朝の動向や、齐明朝における百濟救済戦争への突入と『日本書紀』齐明天皇7年（661）5月条の朝倉広庭宮遷宮などが築城の契機として考えられるのではないだろうか。

(2) 分布

北部九州の神籠石は、広大な筑紫平野を除けば、原則的に一平野に一城を配置している。かつ、各方面から筑紫平野に抜ける交通の監視に有利な要所を占地している。これらにティセンボリゴン法を用いた地理学的な分析を行うと、杷木神籠石を中心として放射状に山城が配置されていることがわかる（小澤2002）。これは、杷木神籠石に何らかの中心的な機能が付されていた可能性を示すものと思われる。

同神籠石は、齐明天皇の朝倉橘広庭宮の有力な推定地（小田和利1993）である朝倉市志波地区の東方約5kmに位置する。両者は古道沿いに立地し、かつ筑後川に面しているなど、水陸交通路での連絡も緊密に行なうことが可能である。また、杷木神籠石の水門は西向きに開口しており、志波地区方面的後背地に築城されていることから、逃げ城としての役割を担っていたのではないだろうか。この地からは、日田盆地を経て豊前豊後方面へ抜け、周防灘や別府湾から瀬戸内海を通り大和へ退くことも容易である。連絡路である瀬戸内沿岸にも石城山城（山口県光市）や鬼ノ城（岡山县總社市）など6ヶ所の神籠石系山城が配置されており、不測の事態に備え退路も確保

した万全の体制といえる。すなわち神籠石の築城と整備の最終的な目的は、朝倉宮防衛網の形成にあったと考えるのである（小田和利1997、小澤2002・2005a）。

（3）高良山神籠石の役割

神籠石は、全体的には杷木神籠石を中心として衛星状に配置されているが、広大な筑紫平野においては高良山神籠石を中心として放射状に配置されるサブグループが存在する。これは高良山神籠石の北に位置する阿志岐城（筑紫野市）、西の帶隈山神籠石（佐賀市）、南の女山神籠石（みやま市）とで構成される。同グループの特徴は、他の神籠石とは異なり、相互に見通すことができる可視的な位置関係にあることである（小澤2002、狭川2006）。山城間の距離は16.0～25.6kmで、平均距離は21.2kmとなる。これは『養老律令』軍防令烽置条に見える、烽の設置距離に関する規定の40里（約21.6km）ときわめて近い⁽⁶⁾。このことから、可視関係にあるグループ間では、烽などの手段を用いて緊密な通信網を構築していたことが想像される（小澤2002）。

このサブグループは、有明海方面もしくは博多湾方面から侵入し、筑後川を遡上、または山地裾の古道を北上して、朝倉宮推定方面へ向かう外敵に対する防衛ラインと考えられる。位置

関係から、高良山神籠石にはこのグループを統括する、情報の集約・伝達機能が付与されていたのではないだろうか。ここからは、朝倉宮推定地を望むことも可能であり、水上交通や烽火を介せば杷木神籠石とも情報共有が容易であろう。すなわち、高良山神籠石を中心とする可視関係にあるグループは、国家的なプランのもと、杷木神籠石を中心とする防衛網の傘下で、有明海方面と博多湾方面におけるフロントライン、もしくは中継の拠点として機能したと考えている。

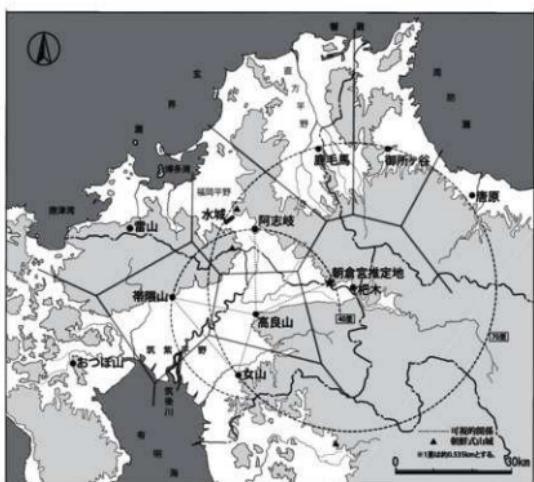


図23 神籠石型山城の配置と理論的な領域

註

- (1) 松村一良氏によれば、浦山丘陵と上津土塁の接点（東門推定地）から、丘陵裾を東へ進み、藤山を経由して南下、黒崎（大牟田市）へと至る古道の痕跡が辿れるという（松村編1986）。この古道沿いには、岩戸山古墳（八女市）をはじめとする主要な古墳や、正惠・大坪遺跡（八女郡広川町）、女山神籠石（みやま市）などの評・郡都推定地や神籠石などが存在する。『日本書紀』景行天皇18年条に、「丁酉に、八女県に至る。即ち藤山を越えて南粟（栗ヶ）崎を望りたまふ」とあり、文献史料もその存在を示唆している。
- (2) 同縁起の写本の一つ、宗崎大宮司家所蔵のものに天正12年（1584）の奥書きがあることから（荒木はか1972）、少なくともそれ以前の成立であることは間違いない。古賀寿氏は、石清水八幡宮所蔵文書にある同縁起の古写本から、平安時代末期～鎌倉時代初期にまで遡る可能性を考えている（古賀1967）。

- (3) 原文は漢文。久留米郷土研究会編1987より。
- (4) 8世紀後半～9世紀前半以降、神仏習合が進んだ高良山ではあったが、大祝ら社家側は「高良社往古禁佛教」と主張し、仏教が神威を穢すものとして嫌惡する風潮が近世以前からあったようである。近世には、相論のたびごとに『高良記』を楯に仏徒を排撃し驅逐するための主張を展開した。「米府(久留米藩)の処士」にもこれに賛同する者が多かったという(荒木ほか編1972)。こうしたことが、魔仏毀釈時に由来を無視して「神龍石」という名称を採用した背景にあったのかもしれない。
- (5) この調査内容については未発表であるが、久留米市教育委員会作成の『史跡高良山神龍石保存修理事業実績報告書』および、調査を担当した山口淳氏のご教示、出土遺物の実見観察等を元に記述した(小澤2009)。
- (6) 神龍石をはじめとする古代山城間の距離が「養老律令」軍防令峰置条の規定の数値に近いことは、樋口一成氏がすでに指摘している(樋口1981)。その中から可視関係にある筑紫平野の神龍石間を抽出すると、平均距離の数値はきわめて近似する。一方で、可視関係にある神龍石グループでの運用実績が、律令の規定に反映されたのではないかとの想定も可能であろう。この仮説については筑紫野市教育委員会山村淳彦氏との対話が元になっている。

引用・参考文献

- 荒木 尚・川添昭二・古賀 寿・山中耕作1972『高良玉垂宮神秘書・同紙背』 高良大社
稿次成令1934『高良山雑記』『郷土研究筑後』第2巻第3号
- 磯村幸男・阿蘇品保夫・森下 功・三木 靖編1974『日本城郭大系』18 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社
- 太田 亮1962『高良山史』神道史学会
- 大類 伸1914『「神護石」問題解決時期尚早論』『考古学雑誌』第4巻7号
- 小澤太郎2002『北部九州における神龍石型山城の配置』『究極』II 埋蔵文化財研究会
- 小澤太郎2005a『古代国家への道—飛鳥時代—』『広川町史』上巻 広川町史編さん委員会
- 小澤太郎2005b『寺院か官衙か—福岡県久留米市所在ヘボノ木遺跡の機能をめぐって—』『古代東国考古学』慶友社
- 小澤太郎2006『神龍石型山城の展開』『図説南筑後の歴史』 郷土出版社
- 小澤太郎2009『高良山神龍石とその周辺』『第4回神龍石サミット』同実行委員会
- 小澤太郎2009b『高良山城における列石の変遷と水門構造』『九州考古学』84 九州考古学会
- 小澤太郎2011a『八葉石から神龍石へ—古代山城遺跡の名称起源—』『ふるさとの自然と歴史』338 田舎ふるさとの歴史と自然を守る会
- 小澤太郎2011b『最後の御用絵師が描いた神龍石』『久留米市文化財保護課年報』Vol. 7
- 小澤太郎2012『西海道における四面廻建物の様相』『四面廻建物を考える』報告編 奈良文化財研究所研究報告第9冊
- 小澤太郎編1999『筑後國府跡－第159次調査報告－』久留米市文化財調査報告書第152集
- 小澤太郎編2009『高良山神龍石と七世紀のくるめ』久留米市埋蔵文化財センター
- 小田和利1993『朝倉橋広庭宮の再検討』『九州歴史資料館研究論集』18
- 小田和利1997『神龍石と水城大堤－水城の築堤工法からみた神龍石の築造年代について－』『九州歴史資料館研究論集』22
- 小田富士雄1983『神龍石系山城研究の歩み』『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10 名著出版
- 鏡山 猛1965『おつま山神龍石』佐賀県文化財調査報告書第14集
- 鏡山 猛・小田富士雄1967『帝釈山神龍石とその周辺』佐賀県文化財調査報告書第16集
- 喜田貞吉1902『神龍石とは何ぞや』『歴史地理』第4巻第5号 日本歴史地理学会
- 久留米郷土研究会編1987『郷土久留米』第48号
- 葛原克人1981『古代山城の特色』『日本城郭大系』別巻1 研究入門 新人物往来社
- 久留米市史編さん委員会編1985『久留米市史』第3巻 近代
- 古賀 寿1967『高良山神龍石研究史序説－「神龍石」なる名称の由来と明治以前の研究史－』筑後地区郷土研究会

- 小林庄次郎1898「筑後國高良山中の神龍石なるものに就いて」『東京人類学雑誌』14
- 荻川真一2006「古代山城からの可視範囲」「元興寺文化財研究所研究報告2005」（財）元興寺文化財研究所
- 寒川 旭1992「地震考古学－遺跡が語る地震の歴史－」中公新書1096
- 白木 守・近澤康治2000「筑後における初期貿易陶磁器の様相」「貿易陶磁研究」20
- 白木 守2006「水縄断層系の活動に伴う地震痕跡」「古代学研究」第175号
- 白木 守編2006「二本木遺跡群－神道遺跡第22次調査－」久留米市文化財調査報告書第226集
- 神保公久2006「古代の防衛拠点」「図説 久留米・小郡・うきはの歴史」郷土出版社
- 神保公久編2006「筑後国府跡－第210次調査報告書－」久留米市文化財調査報告書第235集
- 閑野 貞1913「所謂神龍石は山城なり」「考古学雑誌」第4卷2号
- 田中正日子1996「朝倉橋広庭宮とその時代」「温故」第24号 甘木歴史資料館
- 田中正日子2003「律令支配の動揺と大宰府・筑後の政序」「筑後国府跡－平成14年度発掘調査報告－」久留米市文化財調査報告書第193集
- 波多野院三1974「高良山神龍石」「久留米市埋蔵文化財調査報告書」久留米市教育委員会
- 樋口一成1981「高良山神龍石」「久留米市史」第1巻 久留米市史編さん委員会
- 樋口一成編1977「史跡高良山神龍石保存管理計画策定報告書」久留米市文化財調査報告書第15集
- 松田時彦2000「上岩田遺跡の基壇の地割れと天武七年筑紫国地震」「上岩田遺跡調査概報」小郡市教育委員会
- 松村一良1982「筑後国府の調査」「古代文化」第37巻2号 古代学協会
- 松村一良1990「『日本書紀』天武天皇七年条にみえる地震と上津土塁について」「九州史学」第98号
- 松村一良1994a「高良山神龍石」「久留米市史」第12巻 資料編考古 久留米市史編さん委員会
- 松村一良1994b「上津土塁跡」「久留米市史」第12巻 資料編考古 久留米市史編さん委員会
- 松村一良1994c「筑後国府跡」「久留米市史」第12巻 資料編考古 久留米市史編さん委員会
- 松村一良1994d「山川前田遺跡」「久留米市史」第12巻 資料編考古 久留米市史編さん委員会
- 松村一良1994e「西海道路」「久留米市史」第12巻 資料編考古 久留米市史編さん委員会
- 松村一良編1986「上津土塁跡」久留米市文化財調査報告書第48集 久留米市教育委員会
- 松村一良編2000「山川前田遺跡・国指定天然記念物水縄断層」久留米市文化財調査報告書第163集
- 松村一良編2009「筑後国府跡(2)」久留米市文化財調査報告書第284集 久留米市教育委員会
- 御井小学校開校百周年記念事業特別委員会町誌部編1986「御井町誌」御井小学校父母教師会
- 水原道範編1991「筑後国府跡－平成2年度発掘調査概要－」久留米市文化財調査報告書第67集
- 宮小路賀宏・亀田修一1987「神龍石論争」「論争・学説日本の考古学」第6巻 歴史時代 雄山閣
- 向井一雄2004「山城・神龍石」「古代の官衙遺跡」II 遺物・遺跡編 奈良文化財研究所
- 向井一雄2009「最近の古代山城調査事例」第40回古代山城研究会例会資料
- 武藤直治・石野義助1930「高良山神龍石」「福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書」第5輯 福岡県
- 八木斐三郎1900「神龍石の種類」「東京人類学会雑誌」第173・175号
- 八木斐三郎1910「神龍石と城郭」「歴史地理」第15巻第3号 日本歴史地理学会
- 谷井清一1913「日本上世山城廃址考略」「考古学雑誌」第4巻2号
- 柳田國男1910「神龍石に関係ある地名」「歴史地理」第15巻第3号 日本歴史地理学会
- 吉村靖徳2009「大宰府の位置選定に至る経緯について－両筑平野からの視点－」「地域の考古学」佐田茂先生論文集刊行会

* カシミール3Dは、DAN杉本氏作成。

* 図16・17の原図および、同図と図1・20・22図については、久留米市教育委員会の掲載許可済み。

* 本講座及び本稿の執筆に際しては、田中正日子・松村一良両先生から数多くのご助言をいただいた。また、講座音声を文字起こしていただいた丸山裕見子氏、久留米大学学生の二村智治・大賀恒星・中村麻衣の各氏にも現地再踏査でお世話になった。文末ではあるが、謝意を表したい。

・対談・・・・・

(大田) 神籠石の国史跡指定は非常に古くてですね、戦前とか戦後まもなく指定があったところが多いんですね。高良山神籠石の場合も最初の国指定は確か古いんですよね。

(小澤) そうですね、高良山神籠石の場合はですね、最初の指定は昭和28年ということで非常に古いんです。その後、追加指定をずっと繰り返して、結局昭和50年代ぐらいにですね、だいたい南側全城を指定できました。高良山神籠石が所在する久留米市の中にはみやま市というところがあります。そこに女山神籠石という神籠石がございまして、そこでは列石線が土砂の採掘によって崩壊してしまっています。国指定の時、列石線のみしか指定もっていなかったものですから、内側の私有地が掘削され列石がガバっと押されてしまったわけなんですね。列石線だけの指定では、そういう崩壊を招くことがありますから、高良山神籠石では全城が山城ということで全城を指定に動いたんです。

(大田) 今日ですね、小澤さんの話を聞いてびっくりしましたけど、高良山神籠石ではこれまで発掘調査をしていないんですね。

(小澤) そうなんですよ。講座では神籠石という名前の発祥はうちですと相当強調しましたけど、実は正式な発掘調査をしていないのは多分うちだけなんですね。

※緊急調査の例あり。（本文112～113頁参照）

(大田) 鞠智城は朝鮮式山城に分類されるんですが、国の歴史書に載っているんだけど神籠石は載っていないんですよ。昭和50年代ぐらいからは、古代山城というのは、1300年前に国が造った山城なので、当時の文部省も積極的に保護していくという方針を打ち出して、どんどん指定が進んで、整備が進んでいったんですね。新しく発見された神籠石というのについては、国指定をするために基礎調査をしなさいというところで調査をしているんですね。ところで、この神籠石という名称にも問題があるんですよね。

(小澤) 神籠石の名称の由来については、全然ご存じなかった方もいらっしゃるかと思いますけど、はじめは高良の神様が降りてくる磐座自体を神籠石と呼んでおったわけです。最初に神籠石を学界に紹介した小林庄次郎先生は地元の方じゃないですから、当時高良山の宮司さんに話を聞かれてはいるみたいですが、大急ぎで聞かれたみたいで、どうも話を取り違えているみたいなんですね。そういう経緯もあって、列石の方が神籠石だと思ってしまって、そういうふうに言ってしまうわけなんですけども。その後すぐ女山が見つかって、それも神籠石ということになっちゃってですね。それから以降はみんな神籠石になっちゃってるんですね。

※神籠石という名称が採用された経緯は本文104～107頁にて訂正。

(大田) やはり小林先生という方は偉いと思いますね。当時の学会もすごいですよね。神籠石が学界に発表されると「自分のところにある」「自分のところにある」って手を挙げたわけでしょう。

(小澤) そうですね。非常にですね、この頃は少數精銳といいますか、考古学に关心を持つ人は変わりもんだと言われている時代にですからね。そういう人達が、今みたいにインターネットとかメールがないにしてもですね、非常な情報網を持っておって、情報交換というのは常にされていたみたいなんですね。ですからこの方が坪井正五郎先生と懇意にされておって、それで話を聞かれて、現地を見、論文を書いて、その後、女山神籠石が出てきて、雷山神籠石が出てきてというふうに繋がっていくわけなんですね。

(大田) 次に、神籠石では大きな石をずらつと並べる技術がありますが、これをみると近世よりも古代の方が石積みの技術が上だったかもしれないと思うのですがいかがでしょうか。

(小澤) そうですね。繋ぎ目とかですね、確かに間に間詰め石を入れているところもないことはないんですが、ほとんどそういうところはなくて、きれいにこの隙間が埋まっているような状況で。インカの遺跡とはいいませんけども。本当に隙間なく、きれいに並べていく。これどういうふうにしたのかなと本当に想像が出来ずにですね。古墳時代の6世紀後半ぐらいは切石といいますが、加工石の技術がありまして、ここからこういう古代山城に繋がっていくと思うんですけども。そのあとまた途切れると。中世になると切石積みはなく技術の系統が途切れることになるんですね。古代の技術というのは非常に高度だったんだなということがこういうところから分かるかなというふうに思います。

(大田) それでですね、今日問題を提示してもらって非常に有難かったんですけれども、講座の中で神籠石式山城の配置とその意味というのを提示されまして、朝倉宮を中心とした神籠石式山城の配列状況をお示しになられたのですが、それについて伺ってもよろしいですか。

(小澤) はい、どうぞ。

(大田) 百済救援のために齐明天皇が九州に下りますよね。齐明天皇が宮とした朝倉宮を防衛するためにこういった神籠石の配置がなされたということですね。齐明天皇というのは、狂心の構など、大土木工事が非常に好きだった女帝でしょ。だから急速、朝倉宮を守るために造ったのが神籠石だと言われるんですね。その後、朝倉宮で齐明天皇が急に亡くなって、中大兄皇子が後処理に非常に奔走するんですが、結局百済救援の兵を派遣して白村江で敗れるでしょ。その前段階に、朝倉宮というのがもうなくなってしまうので、神籠石は急速に造られて急速に無くなつたということになります。また、白村江で負けて、向こうから攻めてくるんじゃないかというところで、大和朝廷が、百済の築城技術を導入して古代山城を築いたというのが一般的な理解だと思います。とするならば、この神籠石を造ったのはどういう技術集団でしょうか。なぜなら、神籠石を造れる技術があったのならば、大和政権が国防への為の古代山城造るときにわざわざ百済の指導をうけなくてもよいと思うんですよね。その点どう思われますか。

(小澤) まず、神籠石なんですけれど、これも古代山城の範疇に入るということなんですが、非常に特徴的なものとして、列石があります。ただ、列石があるけど、土塁があつて

水門があって、それはもちろん朝鮮半島の山城の構造とも、それは非常に類似しているものです。ただし、白村江の戦いが敗れた後に、朝鮮半島から来た百濟の貴族の技術指導によって、基肄城や大野城が造られるわけなんですが。その前の段階でも、もちろん渡来人は入って来ていますし、技術者は、暫時、ずっと入って来ているわけなんですね。例えば寺院の基壇構築の技術者とかいうのも、100年以上前から入ってきていますから、そういう土木技術はあったし、当然、朝鮮半島との交流、特に百济との交流がありますから、入ってきていると思います。だから、そういう技術を持つ人が、おそらく、ヤマト王権側から派遣されて技術指導しているので、地域別に造ったのではないというのが、同じような構造をしているものがあることからも、明確だろうと思うし、国家規模で造られたといえると思います。ただし齐明天皇は、先程出した狂心の溝とか土木工事が非常に好きな女帝なんですよね。例えば酒船石の周りからも切石積みの城壁に類した壁なんか出ていますんで、そういう切石積みの技術というのも非常に得意としていると考えます。ですから、そういう技術を活かしたところで、こういう山城なんかを造っていたんじゃないかなというふうに考えています。

(大田) そうですね。神龍石の築造は誰がみても国家プロジェクトじゃないと造れないということは明白ですね。では、神龍石はなぜ国の歴史書から欠落したんだろうかという時に、一番短絡的な理解としては、歴史というのは勝利者の歴史なんで、負けた側は歴史に残らないという考え方もありますね。

(小澤) ただ齐明天皇の評価自体もですね、当時難しいものもあったんじゃないでしょうか。例えば、齐明天皇が造った溝は『日本書紀』にも狂心の溝と呼ばれ、天皇であるにも関わらず、とても評価が低いですよね。

(大田) それはそうですね。

(小澤) そして、齐明天皇は最後は朝倉宮で亡くなるんですよ、一年もたたないうちにですね。福岡県朝倉郡杷木町(現朝倉市杷木町)で調査された遺跡が、朝倉宮関連の建物じゃないかなというふうに言われるんですが、私もそう思うんです。そういうのを見ますとかなり急いで造っています。ここは、ちょうど風水に適っています周りをグルッと山に囲まれて、その西側の山を麻底良山というんですけど、『日本書紀』に書かれていますが、ここの麻氏良布神社の木を切ったがために、鬼が毎晩出るという非常に奇怪な記事が出ています。また、怒りに触れて齐明天皇も亡くなったという記事だったと思うんですけど。天皇のことをあまり悪く書かない『日本書紀』という正史にさえもそういうことが書かれてある。その辺と、次の中大兄皇子がしばらく天皇にならず政治をしますけど、この辺の大きな政治の空白が、理由としてあるかなという感じは何となくしますけれど。

(大田) おっしゃっていることはよく分かります。一昔前の考えというのは、神龍石が磐井の反乱に関係するとかそういうところに持っていくんだけども、やはりこれだけ考古学が進歩してきて発掘事例が出てきて、さらに7世紀の遺物が出てくるとなってきた場合、やっぱり神龍石はこういうふうな考え方をせざるを得ないかなという感じはする

んですけどね。でも、今は古代山城として一緒に考えているんだけど、何かこう、神龍石と朝鮮式山城のギャップみたいなのはまだ埋まらないんですよね。

(小澤) そうですね。ただ構造的には非常に近いですよね。この神龍石の終わり方ですが、663年に白村江の戦いに負けて防衛網を大改編しますよね。そして、水城が664年、これが完成年か築造開始年か私は少し検討する余地があると思うんですけども、その後、基肄城、大野城ができる、そのような防衛網がつくられる。すなわち、それまでの中心が朝倉宮だったのが大宰府へ変わり、そこを防衛するように防衛網が改編されると。そういうことで、必要なくなった神龍石は使われなくなっていく、一方、御所ヶ谷のように改築されている痕跡があるものもありますので、必要であるものは若干残ってくると。ただし正史にはそれでも出てこないという状況ですよね。私は他にも神龍石はあるんじゃないかなと思っておるんですよ。これは地理学的な方法で分布を見た感じですが、まあ例えば博多湾の東側とか、唐津湾にあってもおかしくないし、別府にあってもおかしくないし、内陸にあっても当然おかしくないかなという気はしています。

(大田) 次に、高良山の列石の廻る範囲なんですけど、北側には列石が今のところないんですね。地震で崩落したんじゃないかというような説もおっしゃいましたんですけども。それだけの地震というか北側の列石を吹っ飛ばすような地滑りっていうのがあるんでしょうか。

(小澤) 『日本書紀』に書かれている筑紫国大地震の記述というのは凄まじくてですね。幅が二丈(6 m)位裂けて、長さ三千丈(10 km)にわたって裂けたと。前の晩に山の上に住んでいた人の住居が、朝起きてみたら山の下にあったとか、それくらい被害がひどかったと、そういう記事が書いてあります。昨年度、九州縦貫自動車道久留米インターチェンジの南側で発掘調査をしまして、そこでは断層本体が出ていました。やはり、地震を裏付けるような幅約7 m位の地割れを見つけております。それくらい地震動が激しかったと。その後、地割れの跡を掘りなおして、中世の館の大きい堀が造られているようなそういう状況が見られました。ただ地形を見たときには、列石全体が地震で壊れているかどうかというのは、非常に判断が難しいところもあります。高良大社裏の辺りは確かに円弧滑りといいますか、ガバッと抉れています。斜面が崩落してしまって、この辺りは確かにそういうことが言えるかもしれません。活断層はこの北側を走っています。しかしこれ、北側の列石全体がなくなった理由として考えられるかというと、そうでもないような気がします。他の部分の列石はまだ、埋もれている可能性もあるかもしれません。

(大田) 最後に一つやはり、古代山城でも神龍石でも城壁はぐるっと巡らないといけないという前提のようなものがありますが、近年発見された福岡県の宮地岳神龍石も城壁は一周していないのですよね。高良山神龍石でも当初から城壁が一周していなかった可能性性はありますか。

(小澤) そうですね、列石でも特に大きいのは南側なんですよね。それ以外は小振りの石が比較的多いんですよね。だから、南側には長さ3.2mの石があつたりとかしますし、2 m位の石が何個もあるんですね。西側は80cm位の石がきれいに廻ってますんで、比較的

南側の方が大きい。見せる要素というかですね、見せたい所に大きいのを置いているのかなと。もしかしたら、だんだん石が小さくなるこの辺りは、水門から北側ですね。あるいは必要でない部分には城壁をつくる必要性もなかったのかなということも考えられると思います。

館長講座一覧

平成14年度

回	開催月日	タイトル	講師
1	9月1日	発掘調査の歩み	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
2	10月5日	城門	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
3	11月3日	貯水池跡	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
4	12月1日	鼓樓と建物遺構	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
5	1月12日	古代山城	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
6	2月2日	城歴と調査成果	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
7	3月2日	まとめ	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)

平成15年度

回	開催月日	タイトル	講師
1	5月11日	熊本県の城①(古代～近世)	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
2	6月8日	熊本県の城②(古代～近世)	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
3	7月13日	西日本地方の古代山城	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
4	8月10日	瀬戸内海沿岸の古代山城	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
5	9月14日	朝鮮半島の古代山城	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
6	10月13日	鷦智城の土壙線を歩こう①	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
7	11月9日	鷦智城の土壙線を歩こう②	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
8	12月14日	本年度調査の成果	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
9	2月8日	鷦智城を文献から眺める	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)
10	3月14日	まとめ	大田幸博(熊本県立装飾古墳館副館長・分館長)

平成16年度

回	開催月日	タイトル	講師
1	6月13日	西日本地方・古代山城としての位置づけ	小田富士雄(福岡大学名誉教授)
2	7月11日	文献から見た古代山城茶城の時代背景	板橋和子(九州ルーテル学院大学教授)
3	8月8日	古代山城の保存整備とその意義	磯村幸雄(文化庁主任文化財調査官)
4	9月12日	瀬戸内海沿岸の古代山城	出宮徳尚(岡山市教育委員会)
5	10月10日	東北古代城柵の構造	岡田茂弘(国立歴史民俗博物館名誉教授)
6	11月14日	大宰府政庁と大野城	高倉洋彰(西南学院大学教授)
7	12月12日	鷦智城跡調査の今昔物語	杉村彰一(日本考古学协会会员)
8	2月13日	新聞記事が語る鷦智城	矢加部和幸(熊本日日新聞社論説委員)
9	3月13日	古代へのいざない	古閑三博(熊本県文化財保護審議会委員・文学博士)

平成17年度

回	開催月日	タ イ ド ル	講 師
1	6月12日	宮地岳古代山城跡	草場啓一(筑紫野市教育委員会文化財課)
2	7月10日	基肄城跡	田中正弘(佐賀県基山町教育委員会)
3	8月7日	怡土城跡	瓜生秀文(福岡県前原市教育委員会)
4	9月11日	唐原山城の調査	末永浩一(福岡県築上郡大平村教育委員会)
5	10月9日	鹿毛馬神籠石	須原 緑(額田町教育委員会)
6	11月6日	御所ヶ谷神籠石	小川秀樹(行橋市教育委員会)
7	12月11日	大野城・水城	小沢佳憲(福岡県教育庁文化財保護課)
8	2月12日	金田城跡	田中淳也(対馬市教育委員会)
9	3月12日	大廻・小廻山城	乗岡 実(岡山市デジタルミュージアム主査)

平成18年度

回	開催月日	タ イ ド ル	講 師
1	6月11日	韓半島の山城	西谷 正(九州大学名誉教授)
2	7月9日	永納山城跡	渡邊芳貴(愛媛県西条市教育委員会)
3	8月6日	播磨城山城跡	義則敏彦(兵庫県たつの市教育委員会)
4	9月10日	鬼ノ城跡	村上幸雄(岡山県総社市埋蔵文化財学習の館館長)
5	10月8日	屋船城跡	山元敏裕(香川県高松市教育委員会)
6	11月12日	雷山神籠石	瓜生秀文(福岡県前原市教育委員会)
7	12月10日	高安城跡	棚橋利光(元八尾市立歴史民俗資料館館長)
8	2月11日	高良山神籠石	小澤太郎(福岡県久留米市文化財保護課)
9	3月11日	神籠石と水城大堤	小田和利(福岡県教育庁総務部文化財保護課)

平成19年度

回	開催月日	タ イ ド ル	講 師
1	6月10日	御智城総論	大田幸博(熊本県立豪飾古墳館長)
2	7月8日	杷木神籠石	乙藤 慎(福岡県朝倉市教育委員会)
3	8月12日	帶隈山神籠石	高瀬哲郎(佐賀県立名護屋城博物館)
4	9月9日	おつば山神籠石	原田保則(佐賀県武雄市教育委員会)
5	10月21日	長門城	濱崎真二(山口県下関市教育委員会)
6	11月11日	女山神籠石	小田和利(福岡県教育庁総務部文化財保護課)
7	12月9日	讃岐城山城	増田鉄平(香川県坂出市教育委員会)
8	2月3日	古代の官道	日野尚志(佐賀大学名誉教授)
9	3月9日	日韓の山城	島津義昭(熊本県教育委員会)

平成20年度

回	開催月日	タ イ ド ル	講 師
1	6月8日	鞠智城と国営公園化運動	大田幸博(熊本県立美術館古墳館長)
2	7月13日	建築からみた鞠智城	小西龍三郎(元九州造形短期大学教授)
3	8月10日	石城山神籠石	向井一雄(古代山城研究会代表)
4	9月14日	基肄城	田中正弘(佐賀県基山町教育委員会)
5	10月12日	文献からみた古代山城	板橋和子(九州ルーテル学院大学教授)
6	11月9日	常城・茨城	土井基司(広島県府中市教育委員会)
7	12月14日	大野城	小澤佳憲(福岡県教育委員会)
8	2月8日	金田城	田中淳也(長崎県対馬市教育委員会)
9	3月8日	古代山城総論	大田幸博(熊本県立美術館古墳館長)

平成21年度

回	開催月日	タ イ ド ル	講 師
1	6月14日	百濟の仏像	大西修也(九州大学名誉教授)
2	7月12日	大宰府成立と大野城・基肄城	赤司善彦(九州国立博物館)
3	8月9日	日韓の古代山城	亀田修一(岡山理科大学教授)
4	9月13日	古代西日本の朝鮮式山城	小田富士雄(福岡大学名誉教授)
5	10月11日	文献からみた鞠智城	坂上康俊(九州大学大学院教授)
6	11月8日	阿志岐城	草場啓一(福岡県筑紫野市教育委員会)
7	12月13日	鞠智城	大田幸博(熊本県立美術館古墳館長)
8	2月14日	屋嶋城	山元敏裕(香川県高松市教育委員会)
9	3月14日	鬼ノ城	岡本泰典(岡山県古代吉備文化財センター)

ふりがな	きくちじょうとそのじだい
書名	鞠智城とその時代 2
副書名	－平成14～21年度「館長講座」の記録－
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	能登原 孝道
編集機関	熊本県立裝飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館
所在地	熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1
発行年月日	2014(平成26)年3月20日

鞠智城とその時代2

— 平成14～21年度「館長講座」の記録 —

〔編集発行〕

熊本県立裝飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館

〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1

TEL 0968-48-3178

〔印刷〕

株式会社 大和印刷所

〒861-8031 熊本県熊本市東区戸島町920-11

TEL 096-380-0303

発行者:熊本県
所屬:県立裝飾古墳館
発行年度:平成25年度

この電子書籍は、鞠智城とその時代 2 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城とその時代 2

平成 14～21 年度「館長講座」の記録

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2002 年 8 月 18 日